有田・小田部 52

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1177 集

２０１３

福岡市教育委員会

有田・小田部 52

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1177 集

平成 25 年 3 月

福岡市教育委員会

有田遺跡　第 88 次調査堀立柱建物群（南から）

有田遺跡　第 96 次調査井戸 SE01 断面（西から）

序　文

玄界灘に面した福岡市は、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。福岡市の大部分を形成する福岡平野は、古くから大陸との交流が盛んで、この中でも特に博多湾西部に面した早良平野は、弥生時代のクニの形成を示す早良王墓や大型建物跡が見つかった吉武高木遺跡、また古墳時代の前方後円墳、奈良時代の早良郡衙跡など貴重な遺跡の発見が相次いでいる地域です。しかし、近年は市街地化の拡大と共に都市基盤整備が進められており、福岡市では昭和50年度から各種の開発に対応して埋蔵文化財の保存措置に努めている地域でもあります。

本書は、昭和58年度、昭和59年度に実施した有田遺跡第84次調査から第99次調査までの成果について報告するものです。この発掘調査では、縄文時代から近世江戸時代に至る遺構や遺物が出土しました。これらの遺構・遺物は、早良平野の歴史的経過を解明する重要な手がかりになるものと考えられます。

本書が市民の埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会
教育長　酒井龍彦

例　　言

⑴　本書は、福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における住宅開発等に伴い、福岡市教育委員会が昭和 58・59 年度の二カ年において国庫補助を得て実施した発掘調査報告書である。

⑵　本書には、昭和 58 年度の第 84・85・88・89・90 次調査、昭和 59 年度の第 91・～ 94・96・98・99 次調査について収録するものである。

⑶　発掘調査は、昭和 58 年度を福岡市教育委員会埋蔵文化財課 (当時) の井澤洋一、松村道博が、昭和 59 年度は、同じく井澤、松村（前任）、米倉秀紀（後任）が担当した。

⑷　本書に掲載した遺構実測図は、昭和 58 年度を井澤、松村、谷澤仁、辻哲也、庄野崎ヒデ子、清原ユリ子、金子由利子、砥綿千江子、渡辺武子が行い、昭和 59 年度は井澤、松村、米倉、谷澤、宮田昌之、清原ユリ子、金子由利子、砥綿千江子が行った。

⑸　各調査地点遺構配置図は、平成 6 年度に牛房綾子が製図したものを使用した。その他の遺構・遺物の製図は井澤が行った。

⑹　遺構の写真撮影は、井澤、松村（第 91・94 次調査）、米倉（第 98・99 次調査）がそれぞれの調査地点を担当し、遺物撮影は、井澤が行った。

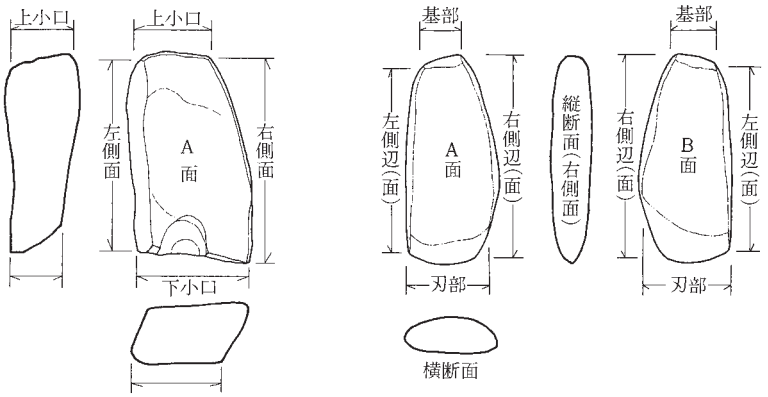
⑺　遺構番号は発掘調査中において検出した順に通し番号をふり、整理報告の段階において遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構略号として用いたのは、SA(柵跡)、SB(掘立柱建物跡)、SC(住居跡)、SD（溝状遺構）、SE（井戸、池状遺構）、SK（土壙）、SO（古墳）、SR（土壙墓、火葬墓）、SX（土器溜まりなど）、SP（柱穴）である。

⑻　本書に用いた遺物番号は、挿図・図版の遺物番号と一致させている。

⑼　本書に用いた方位は、磁北である。

⑽　本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センタ - に収蔵・保管する予定である。

⑾　本書の執筆は、第 91 次調査を松村が、その他を井澤が担当し、編集は井澤が行った。



本　文　目　次

第 1 章　はじめに……1
1.　調査に至る経過……1
2.　発掘調査組織……1
(1)　昭和 58 年度の発掘調査組織 ……1
(2)　昭和 59 年度の発掘調査組織 ……2
(3)　平成 12 年度資料整理組織 ……2
第 2 章　有田・小田部の歴史……9
1.　立地と歴史的環境……9
2.　文献資料……10
第 3 章　有田遺跡第 84 次調査 ……11
1.　地形と概要……11
(1)　立地……11
(2)　概要……11
2.　遺構・遺物説明……14
(1)　各遺構……14
(2)　出土遺物……14
3.　まとめ……20
第 4 章　有田遺跡第 85 次調査 ……31
1.　地形と概要……31
(1)　立地……31
(2)　概要……31
2.　遺構・遺物説明……31
(1)　各遺構……31
(2)　出土遺物……31
3.　まとめ……31
第 5 章　有田遺跡第 88 次調査 ……33
1.　地形と概要……33
(1)　立地……33
(2)　概要……33
2.　遺構・遺物説明……38
(1)　各遺構……38
(2)　出土遺物……38
3.　まとめ……50
第 6 章　有田遺跡第 89 次調査 ……53
1.　地形と概要……53
(1)　立地……53
(2)　概要……53
2.　遺構・遺物説明……57
(1)　各遺構……57
(2)　出土遺物……58
3. まとめ……58

第 7 章　有田遺跡第 90 次調査 …… 61
1. 地形と概要 …… 61
(1)　立地…… 61
(2)　概要…… 61
2. 遺構・遺物説明 …… 62
(1)　各遺構…… 62
(2)　出土遺物…… 62
3. まとめ …… 62
第 8 章　有田遺跡第 91 次調査 …… 67
1. 地形と概要 …… 67
(1)　立地…… 67
(2)　概要…… 67
2. 遺構・遺物説明 …… 68
(1)　各遺構…… 68
(2)　出土遺物…… 68
3. まとめ …… 68
第 9 章　有田遺跡第 92 次調査 …… 70
1. 地形と概要 …… 70
(1)　立地…… 70
(2)　概要…… 70
2. 遺構・遺物説明 …… 70
(1)　各遺構…… 70
(2)　出土遺物…… 72
3. まとめ …… 72
第 10 章　有田遺跡第 93 次調査…… 75
1. 地形と概要 …… 75
(1)　立地…… 75
(2)　概要…… 75
2. 遺構・遺物説明 …… 75
(1)　各遺構…… 75
(2)　出土遺物…… 80
3. まとめ …… 80
第 11 章　有田遺跡第 94 次調査…… 81
1. 地形と概要 …… 81
(1)　立地…… 81
(2)　概要…… 81
2. 遺構・遺物説明 …… 81
(1)　各遺構…… 81
(2)　出土遺物…… 81
3. まとめ …… 81
第 12 章　有田遺跡第 96 次調査…… 84

1. 地形と概要 …… 84
(1) 立地…… 84
(2) 概要…… 84
2. 遺構・遺物説明 …… 84
(1) 各遺構…… 84
(2) 出土遺物…… 84
3. まとめ …… 84
第 13 章　有田遺跡第 98 次調査…… 89
1. 地形と概要 …… 89
(1) 立地…… 89
(2) 概要…… 89
2. 遺構・遺物説明 …… 89
(1) 各遺構…… 89
(2) 出土遺物…… 89
3. まとめ …… 90
第 14 章　有田遺跡第 99 次調査…… 91
1. 地形と概要 …… 91
(1) 立地…… 91
(2) 概要…… 91
2. 遺構・遺物説明 …… 91
(1) 各遺構…… 91
(2) 出土遺物…… 94
3. まとめ …… 94

挿　図　目　次

Fig. 1　有田小田部周辺の遺跡（縮尺 1/25,000) ……3
Fig. 2　有田小田部台地と発掘調査地点位置図（縮尺 1/8,000） ……4
Fig. 3　昭和 58・59 年度発掘調査地点位置図（縮尺 1/8,000）……5
Fig. 4　第 84 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 11
Fig. 5　第 84 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）…… 12
Fig. 6　調査区東西方向断面図（縮尺 1/150） …… 12
Fig. 7　調査区北壁及び各遺構土層図（縮尺 1/80、1/60、1/40）…… 13
Fig. 8　住居跡 SC01、土壙 SK01、井戸 SE01 実測図（縮尺 1/40）…… 15
Fig. 9　井戸 SE01 出土遺物実測図 1（縮尺 1/4）…… 21
Fig. 10　井戸 SE01 出土遺物実測図 2（縮尺 1/4）…… 22
Fig. 11　井戸 SE01 出土遺物実測図 3（縮尺 1/4）…… 23
Fig. 12　井戸 SE01 出土遺物実測図 4（縮尺 1/4）…… 24

Fig. 13 井戸 SE01 出土遺物実測図 5（縮尺 1/3、1/2）…… 25
Fig. 14 溝 SD01 出土遺物（縮尺 1/3、1/2）…… 26
Fig. 15 近世遺構出土遺物 1（縮尺 1/3）…… 27
Fig. 16 近世遺構出土遺物 2、溝、Pit 出土遺物（縮尺 1/3、1/2）…… 28
Fig. 17 有田地域の中世後半期の溝配置図（縮尺 1/3,000）…… 29
Fig. 18 第 85 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 31
Fig. 19 第 85 次調査遺構配置図（縮尺 1/100）…… 32
Fig. 20 第 88 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 33
Fig. 21 第 88 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）…… 34
Fig. 22 調査区壁面及びトレンチ土層図（縮尺 1/60）…… 35
Fig. 23 住居跡 SC01 実測図（縮尺 1/40）…… 37
Fig. 24 掘立柱建物 SB01・02 実測図（縮尺 1/80）…… 39
Fig. 25 掘立柱建物 SB03 ～ 05 実測図（縮尺 1/80）…… 40
Fig. 26 溝 SD01 土層図（縮尺 1/30）…… 44
Fig. 27 土器溜まり SX01 実測図（縮尺 1/30）…… 45
Fig. 28 住居跡 SC01、溝 SD01 出土遺物（縮尺 1/4、1/3）…… 47
Fig. 29 土器溜まり SX01 出土遺物 1（縮尺 1/4）…… 48
Fig. 30 土器溜まり SX01 出土遺物 2（縮尺 1/4）…… 49
Fig. 31 土器溜まり SX01、包含層出土遺物（縮尺 1/3）…… 50
Fig. 32 有田地域の律令時代建造物配置図（縮尺 1/2,000）…… 52
Fig. 33 第 89 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 53
Fig. 34 第 85・89 次調査遺構配置図（縮尺 1/200）…… 54
Fig. 35 調査区北壁面土層図（縮尺 1/60）…… 54
Fig. 36 住居跡 SC01 実測図（縮尺 1/60）…… 56
Fig. 37 周溝墓 SO01 実測図・周溝土層図（縮尺 1/80、1/40）…… 57
Fig. 38 火葬墓 SR01 実測図（縮尺 1/30）…… 59
Fig. 39 住居跡 SC01 出土遺物（縮尺 1/3）…… 60
Fig. 40 第 90 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 61
Fig. 41 第 90 次調査遺構配置図（縮尺 1/100）…… 62
Fig. 42 調査区北・東壁面土層図（縮尺 1/80）…… 64
Fig. 43 第 91 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 67
Fig. 44 調査区壁面土層図（縮尺 1/80）…… 67
Fig. 45 第 91 次調査遺構配置図（縮尺 1/200）…… 68
Fig. 46 土壙 SK01 実測図（縮尺 1/40）…… 68
Fig. 47 第 92 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 70
Fig. 48 第 92 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）…… 71
Fig. 49 調査区壁面土層図（縮尺 1/80）…… 72
Fig. 50 土壙 SK01・02 実測図（縮尺 1/40）…… 73
Fig. 51 溝 SD01・02 土層図（縮尺 1/40）…… 73
Fig. 52 第 93 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 75
Fig. 53 第 93 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）…… 76

Fig. 54　各グリッド土層図（縮尺 1/40）…… 76
Fig. 55　土壙 SK01 実測図（縮尺 1/40）…… 79
Fig. 56　第 94 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 81
Fig. 57　第 94 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）…… 82
Fig. 58　第 96 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 84
Fig. 59　第 96 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）…… 85
Fig. 60　第 96 次調査出土石塔類拓本（縮尺 1/4）…… 88
Fig. 61　第 98 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 89
Fig. 62　第 98 次調査遺構配置図（縮尺 1/200）…… 90
Fig. 63　土壙 SK01 実測図（縮尺 1/40）…… 90
Fig. 64　第 99 次調査位置図（縮尺 1/1,000）…… 91
Fig. 65　第 99 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）…… 92
Fig. 66　土壙 SK01、掘立柱建物 SB01・02 実測図（縮尺 1/30、1/80）…… 93
Fig. 67　溝状遺構土層図（縮尺 1/40）…… 94

表　目　次

Tab. 1　有田遺跡昭和５８・５９年度発掘調査一覧表 …… Ⅷ
Tab. 2　有田遺跡第８４次調査遺構一覧表 …… 30
Tab. 3　有田遺跡第８８次掘立柱建物一覧表 …… 43
Tab. 4　有田遺跡第８８次調査遺構一覧表 …… 51

Tab. 1 昭和 58 年度・59 年度発掘調査一覧表

年度	調査次数	調査番号	遺跡略号	地番	開発面積	調査面積	調査期間	事業名	報告書	備考
58	76	8304	ART-76	福岡市早良区南庄三丁目 114-3	355	289	4/5 ～ 4/22	土地売却	有田・小田部 6	
58	77	8305	ART-77	福岡市早良区有田一丁目 30-1~3	1,703	1,703	4/8 ～ 6/20	共同住宅	有田・小田部 24	
58	78	8306	ART-78	福岡市早良区有田二丁目 20-2	411	389	5/23 ～ 7/21	専用住宅	有田・小田部 29	
58	79	8307	ART-79	福岡市早良区小田部一丁目 225-1・2	143	109	6/9 ～ 6/15	専用住宅	有田・小田部 29	
58	80	8308	ART-80	福岡市早良区小田部一丁目 168	885	764	6/22 ～ 7/26	土地売却	有田・小田部 30	
58	81	8309	ART-81	福岡市早良区有田一丁目	10,300	8000	7/1 ～ 12/10	市営住宅	福岡市報告書 129	公共事業
58	82	8310	ART-82	福岡市早良区有田一丁目 29-13・14	412	405	7/14 ～ 9/6	土地売却	有田・小田部 7	
58	83	8311	ART-83	福岡市早良区一丁目 127-3	378	300	8/24 ～ 11/11	共同住宅	有田・小田部 7	
58	84	8312	ART-84	福岡市早良区二丁目 7-66	303	196	9/13 ～ 10/18	専用住宅		
58	85	8313	ART-85	福岡市早良区南庄三丁目 261-1	576	93	9/27 ～ 10/5	建売り住宅		85・89 次調査は同一開発地
58	86	8314	ART-86	福岡市早良区小田部五丁目 143-3	247	220	10/11 ～ 11/7	専用住宅	有田・小田部 6	
58	87	8315	ART-87	福岡市早良区有田二丁目 12-6	248	230	10/7 ～ 12/1	専用住宅	有田・小田部 7	
58	88	8316	ART-88	福岡市早良区有田一丁目 8-7	259	221	11/2 ～ 12/24	専用住宅		
58	89	8317	ART-89	福岡市早良区南庄三丁目 261-1	576	230	12/1 ～ 12/20	建売り住宅		85・89 次調査は同一開発地
58	90	8318	ART-90	福岡市早良区小田部五丁目 149-1	286	226	12/9 ～ 1/28	専用住宅		
59	91	8319	ART-91	福岡市早良区小田部三丁目 153	282	282	4/25 ～ 5/11	共同住宅		
59	92	8320	ART-92	福岡市早良区有田一丁目 26-6	150	195	4/26 ～ 5/12	専用住宅		
59	93	8321	ART-93	福岡市早良区小田部三丁目 401	318	54	5/11 ～	専用住宅		
59	94	8322	ART-94	福岡市早良区南庄三丁目 172	453	279	6/8 ～ 7/5	専用住宅		
59	95	8323	ART-95	福岡市早良区有田一丁目 31-4	657	657	7/25 ～ 8/29	倉庫	有田・小田部 7	
59	96	8324	ART-96	福岡市早良区有田一丁目 20-7	446	426	8/16 ～ 9/28	駐車場		
59	97	8325	ART-97	福岡市早良区南庄三丁目 90・91・93	1,082	305	8/20 ～ 9/5	土地売却	有田・小田部 7	
59	98	8326	ART-98	福岡市早良区小田部五丁目 44	286	257	12/19 ～ 12/28	共同住宅		
59	99	8327	ART-99	福岡市早良区小田部一丁目 147・150	547	252	1/24 ～ 1/31	共同住宅		

第１章　はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市は、昭和 50 年までに一市三十町村が合併した都市で、面積は約 342km を図る。平野部は大きく分けると福岡平野と早良平野から成っている。今回報告する有田・小田部地域は、福岡市の西部に広がる早良平野のほぼ中央に位置し、台地状の面積は約 70 万㎡を測る。この地域は、かって福岡市近郊の農村地帯であった。

昭和 47 年に福岡市が政令指定都市に指定されて以降、福岡市は九州経済・文化の中心地として目覚ましく発展すると共に、福岡市西部地域は道路網の整備や地下鉄の開通によって住宅化が著しく進められているおり、有田・小田部地域も同様に過日の田園風景は失われている。

福岡市教育委員会では、昭和 50 年度より有田・小田部・南庄地区における開発に対処し、発掘調査を実施しており、平成 24 年度までの発掘調査件数は 246 カ所に及んでいる。

本書では、個人専用住宅、及び共同住宅など国庫補助対象事業として発掘調査を実施した昭和 58・59 年度の成果を報告するものである。

2. 発掘調査の組織

(1)　昭和 58 年度の調査組織

調　査　主　体　福岡市教育委員会

調　査　担　当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第 2 係

調　査　総　括　文化部文化課長　生田征生

埋蔵文化財第 2 係長　折尾学

発　掘　担　当　井澤洋一、松村道博

庶　務　担　当　岡嶋洋一

調　　査　　員　谷澤仁、辻哲也

協　　力　　者　海田龍生、川田初、合屋龍介、座親秀文、下野敏夫、高浜謙一、武田秀司、西原達也、松尾和雄、松尾正明、真子康次郎、結城繁巳、有富いつ子、伊庭秀子、江口洋子、緒方マサヨ、金子由利子、清原ユリ子、木村伸子、後藤ミサヲ、坂口フミ子、佐藤テル子、柴田勝子、柴田幸子、柴田春代、柴田タツ子、庄野崎ヒデ子、末松信子、土井崎初枝、砥綿千江子、砥上志華子、中村千里、西尾たつよ、平井和子、日野良子、堀川ヒロ子、松井フユ子、松井邦子、松尾玲子、宮原邦江、米嶋チズヨ、吉岡田鶴子、吉田祝子、原花千代、合屋文子、坂田まさ子、結城律子、渡辺武子、森みえ子、浜口由美子、川田久子、吉川タエ、佐藤ヒサエ、島田まり子

資　料　整　理　原秋代、池田洋子、深堀博子、元田明子、内尾トミ子、仲前智江子、永井和子、
友田妙子、小江英美子、太田けい子、久門美千代、山下仁美

⑵　昭和59年度の調査組織

調　査　主　体　福岡市教育委員会
調　査　担　当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係
調　査　総　括　文化部文化課長　生田征生
埋蔵文化財第２係長　折尾学
発　掘　担　当　井澤洋一、松村道博（前任）、米倉秀紀（後任）
庶　務　担　当　岡嶋洋一
調　　査　　員　谷澤仁、宮田昌之
協　　力　　者　岩本陽児、座親秀文、海田龍正、合屋龍介、武田秀司、西原達也、高浜謙一、廣方孝文、
蜂須賀六三、松尾和雄、松尾正明、吉村哲美、有富いつ子、板倉文代、内尾トミ子、
内堀弘子、緒方マサヨ、金子由利子、清原ユリ子、後藤ミサヲ、坂口フミ子、
佐藤テル子、柴田勝子、柴田幸子、庄野崎ヒデ子、土井崎初枝、西尾たつよ、
平井和子、堀川ヒロ子、松井フユ子、松尾玲子、日野良子、中村千里、吉岡田鶴子、
宮原邦江、吉田祝子、
学 生 参 加 者　中村昇平（國學院大學）、村田丈秀（別府大学）
資　料　整　理　児玉健一郎、池田洋子、深堀博子、元田明子、内尾トミ子、仲前智江子、永井和子、
小江英美子、太田けい子、久門美千代、山下仁美

⑶　平成24年度の資料整理組織

整理報告総括　福岡市経済観光文化局
文化財部埋蔵文化財調査課長　宮井善朗
整理報告担当　埋蔵文化財専門員（嘱託）　井澤洋一
庶　務　担　当　埋蔵文化財調査課調査１係長　常松幹雄
資　料　整　理　吉盛　泉、平井宏美

なお文化財部部は、組織改編のため平成２４年４月１日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、地権者をはじめとする関係者各位にはさまざまなご理解・ご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

1. 西新町遺跡　2. 藤崎遺跡　3. 原遺跡　4. 原談儀遺跡　5. 飯倉遺跡
6. 飯倉原遺跡　7. 千隈遺跡　8. 鶴丸遺跡　9. 原深町遺跡　10. 有田七田前遺跡　11. 橋本榎田遺跡

Fig. 1　有田小田部周辺の遺跡（縮尺１／25,000）

Fig. 2 有田小田部台地と発掘調査地点位置図（縮尺 1/8,000）

Fig. 3 昭和 58・59 年度発掘調査地点位置図（縮尺 1/8,000）

有田・小田部周辺航空写真（昭和 14 年撮影）

（国土地理院所蔵写真）

有田・小田部周辺航空写真（昭和 21 年米軍撮影）　（国土地理院所蔵写真）

有田・小田部周辺航空写真（昭和 50 年撮影）　（国土地理院所蔵写真）

第２章　有田・小田部の歴史

1. 立地と歴史的環境

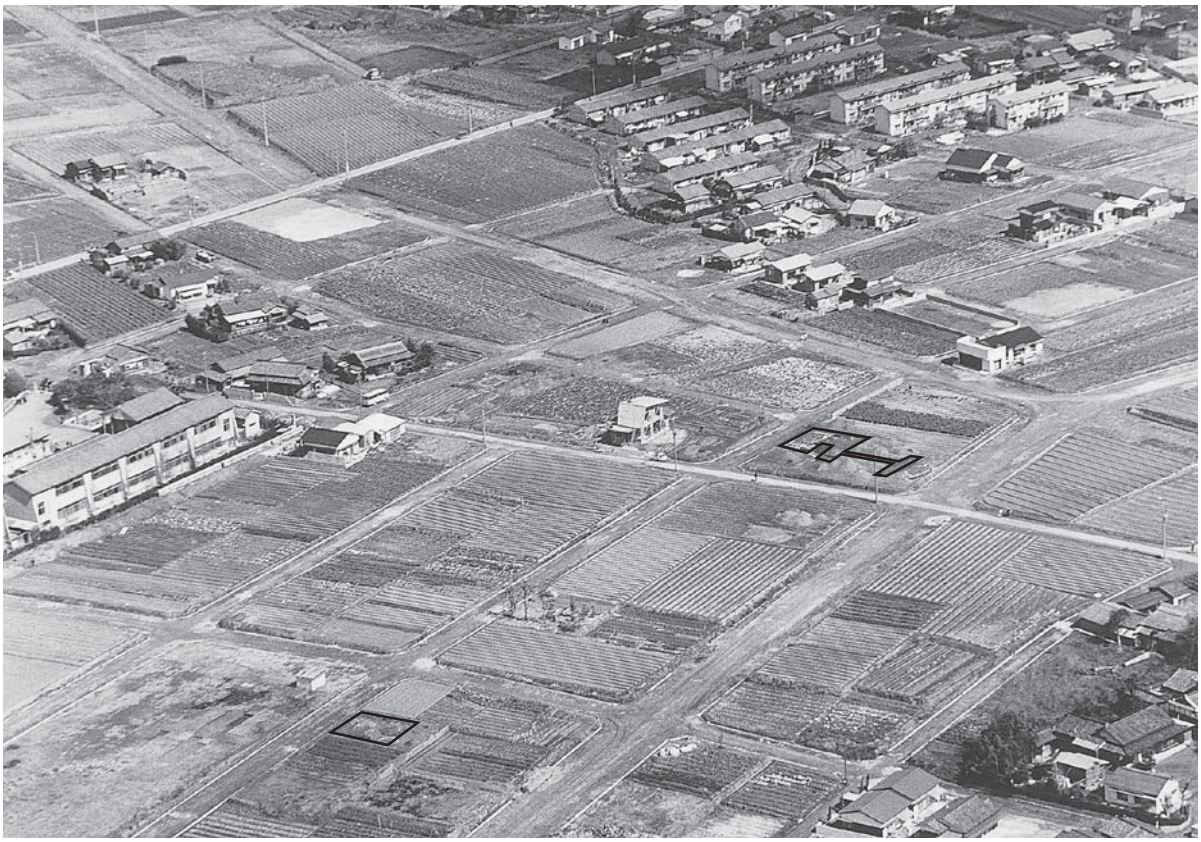
有田・小田部の立地環境、及び歴史的環境については、既刊の報告書の中で詳細に述べられているのでこれらの報告書を参考にされたい。ここでは、発掘調査に関連する有田・小田部・南庄地区の歴史的事項を「筑前續風土記拾遺」や「早良郡志」などの文献から抜粋し、転記した。

さて、福岡市早良区有田・小田部・南庄の位置する台地は、現状では室見川（旧早良川）の懐石によって形成された早良平野のほぼ中央に位置しているが、江戸の頃までは南庄周辺まで入り江となっており、博多湾に面した河口に位置していたといえる。

台地は、最高所の標高 15m 前後を測る独立中位段丘である。台地の形成は洪積世に位置づけられ、八女粘土、鳥栖ローム、新期ロームの層序をなしている。台地は主軸を南北方向に向け、北方向に緩やかに傾斜しており、南北の距離約 1km、最大幅約 0.7km を測り、旧地形では有田一丁目周辺を最高所として台地周辺の水田面との比高差は約 10m を測っていたが、現在では５～7m の比高差しかない。

台地の西側に室見川が、東側に金屑川が流下しており、台地縁辺は浸食を受けて小断崖を形成している。また台地内に深く切り込んだ開析谷が存在するため、台地は北方向に八つ手状に分岐している。

この台地上には、それぞれに歴史的な背景を継承している有田・小田部・庄の三つの集落が形成さ



昭和 42 年当時の有田一丁目付近航空写真　（九州大学考古学研究室所蔵）

れているが、近年の住宅化はその境界線を無くしている。その切っ掛けの一つが昭和40年代の初めに行われた有田・小田部地域の土地区画整理事業であるが、この事業において昭和42・43年の二カ年にわたる福岡市教育委員会及び九州大学考古学研究室によって有田遺跡が発見されたことや、今日にも継続的な調査研究が行われる契機となったのである。

2. 文献資料

「筑前國續風土記拾遺」

小田部村

和名鈔に此郡に田部郷あり。此村は其遺名なるへし。日本記景行天皇五十七年に諸国に田部を置れしよし見えたり。（是古へ屯倉の公田を耕す者の称なり。民の字を多美といふも此田部という事なり。）有田も本は此村より別れたり。（飯盛社領文永の坪付に小田部郷とあり。此村にも昔飯盛社領有りしと見えたり。飯盛社領有りしと見えたり。）村の西に室見川有。（此川の内に若宮 渡瀬 日渡し 渡瀬 柳川原 渡瀬等の名あり。）太閤道鳥飼村の南より荒江原村に入て、左に往還を行は肥前三ツ瀬越の道なり。右の小路を直に西に行は、此村の松尾原を下りて室見川を渡り、姪濱の南を經て下山門村に至る。是天正の比の往還也。秀吉公名護屋御陣の時、此道を經過し給いし故に今に太閤道といふ。

教善寺

村西口に在。真宗西博多万行寺末座元也。

吉塚　松浦殿塚　筑紫殿塚

松浦殿塚は松尾原に在。又丸山塚とも云。周四十間許高二間。上に古松あり。小田部氏の系圖を按るに、元祖は嵯峨源氏にて松浦黨也。左大臣源融公五代の孫を渡邉源次綱といふ。其子源太夫判官久始て肥前國松浦郡平戸に住す。次男松浦小源次正といふ。其後裔松浦隼人佐鎮隆の時、小田部城主木上何某と云者を討て、當所を領し初て小田部氏と号す。其子鎮俊（上総介宗雲）其養子を民部少輔俊之（後に入道して紹叱といふ。）と見えたり。しかれは此松浦殿塚と云は、かの隼人佐鎮隆を伝なるへし。筑紫殿塚は村の東北田間にあり。また大塚と伝。周四十間許高三間許三段に縁有。上の段に土手回れり。古松一本立。筑紫氏由来詳ならす。又村の西に山伏塚といふあり。又松尾原の内に立石三ツ有。中の篇石高六尺幅七尺厚一尺四五寸あり。左右の二石はや、低し。共に銘字なし。是も古墓なるへし。其由来傳らす。

有田村

民居一所に在。東に金屑川有。北に流る。（飯盛社應水中坪付に有田村あり。）

寶満寺

村南に在。産神也。所祭玉依姫命　神功皇后　應神天皇也といえり。由来未レ詳。

○天満宮（天神屋敷）小田部氏の鎮守として祭りし社といふ。其側にから堀址有。下に見えたる小田部氏の里城址なり。

西應寺

村内に在。真宗西博多万行寺末也。開基の僧を惠正といふ。

古宅

村内に在。堀内といふ。堀址殘れり。廣宅なりしと見ゆ。是小田部氏か里城なるへし。其邊に小田部氏墓といふもあり。塚上に切石二重を置り。銘字はなし。瘧を患ふる者祈願すれは必要ありとなん。又村南に築城といふ所あり。鎮西要略に小田邊城といふ見えたるは、是らをさしていふか。

「早良郡志」

村社寶満神社　当社は、有田字馬場にあつて、祭神は玉依姫命彦火火出見尊鸕鷀草葺不合尊である。例祭は九月十九日にして、境内五百二十二坪社殿約十三坪餘り明治五年十一月三日、村社に定められた。氏子六十五戸、境内の菅原神社は、明治十五年一月二十日字天神屋敷から遷したのであつて、小田部氏の鎮守として祭つた社と云つて居る。當社の西方に一反歩許りの宮田と云う所がある、往年本社の祭田であつたと言い傳へて居る。

眞宗教善寺　当山は、小田部字宮城にあつて、菩堤山と號し、眞宗西派に屬して居る。境内百七十九坪堂宇四十二坪にして、寺内にある二の觀音堂は字宮城と、字東屋敷とにあつたのを明治十四年七月當寺内に移したのである檀徒八十戸。

眞宗西應寺　當山は、有田字馬場にあつて、荒平山と號し眞宗西派に屬して居る。開基は僧惠正といふも、年月日は詳でない。境内百八十七坪堂宇二十五坪ありて、檀徒は三十五戸

小田部氏墓　小田部氏立石と謂ふ所に、小田部氏の墓と云ふのがある。二段切石を重ねてあるも銘の見るべきものがない、里人は甲塚とも謂つて居る。瘧を患ふるもの祈願すれば驗ありとて參詣者が多い。

第 3 章　有田遺跡第 84 次調査

1. 地形と概要

(1)　立　地

当該地は、台地の南端部に存在したとされる小田部城跡伝承地に在って、台地の東緩斜面に位置する。調査区の標高は、10m 前後を測り、東側は小断崖をなして比高差 2m を測る。字図によれば旧小字は「東」に属し、戦国期の小田部城の本丸跡地と考えられている「天神屋敷」に隣接する。

小田部城は、16 世紀後半に荒平城に居城した小田部氏の里城と伝承され、地元では「月城」と称されている。当該地の西側、台地の尾根筋に当たり、標高 13m を測る位置にある宝満宮に本丸が所在したとされ、周辺には土塁の一部が遺存している。また各所に宝篋印搭、板碑等の石塔類が集められており、当該地が小田部城の盛衰に関連した地域であることを想わせる。

(2)　概　要

敷地が通路及び住宅用地から成り、平面形がＬ字形をなしているため試掘調査は、調査区の東西方向、すなわち住宅用地において台地を横断する方向に設定した。トレンチ調査の結果、Fig. のとおり調査区が台地の縁辺に位置しているため台地が東側に向かって緩やかに傾斜し、東側に大きな崖が存在することや、台地に沿って堀や切り岸が存在することなどが明らかとなった。また、当該地は、著しい削平を受けており、鳥栖ロームが表出しており、遺構の遺存状態は悪い。

検出した遺構は、弥生時代の井戸 1、住居跡 1、土壙 1、L 字形に曲がる中世後半期の堀 1、切り岸遺構、江戸時代の溝 1、土壙 6 である。

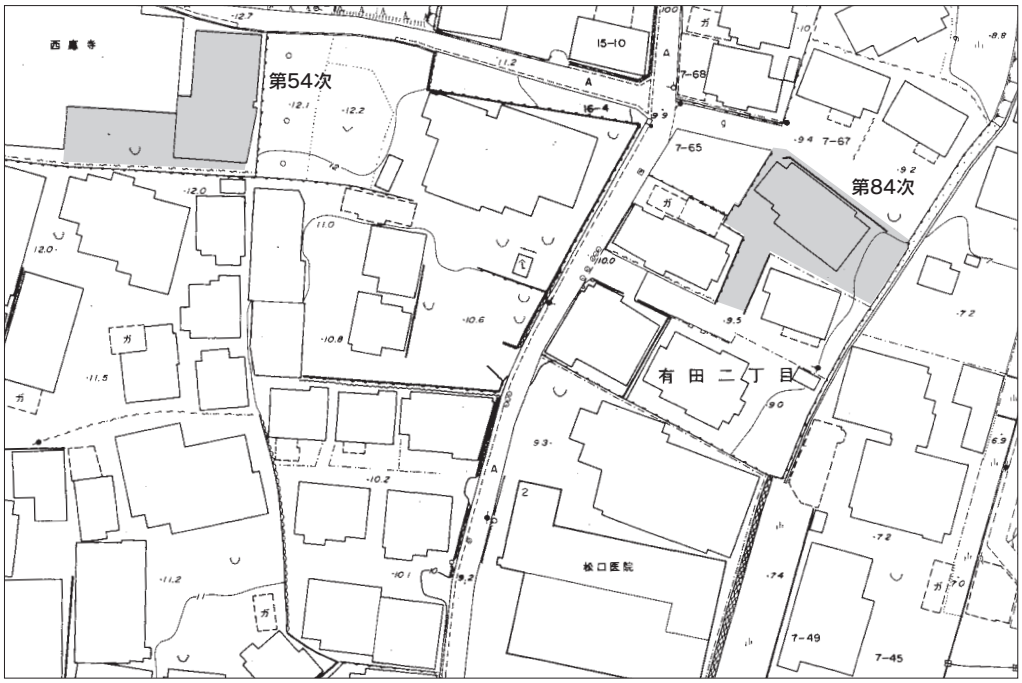


Fig. 4　有田遺跡第 84 次調査位置図（縮尺 1 ／ 1,000）

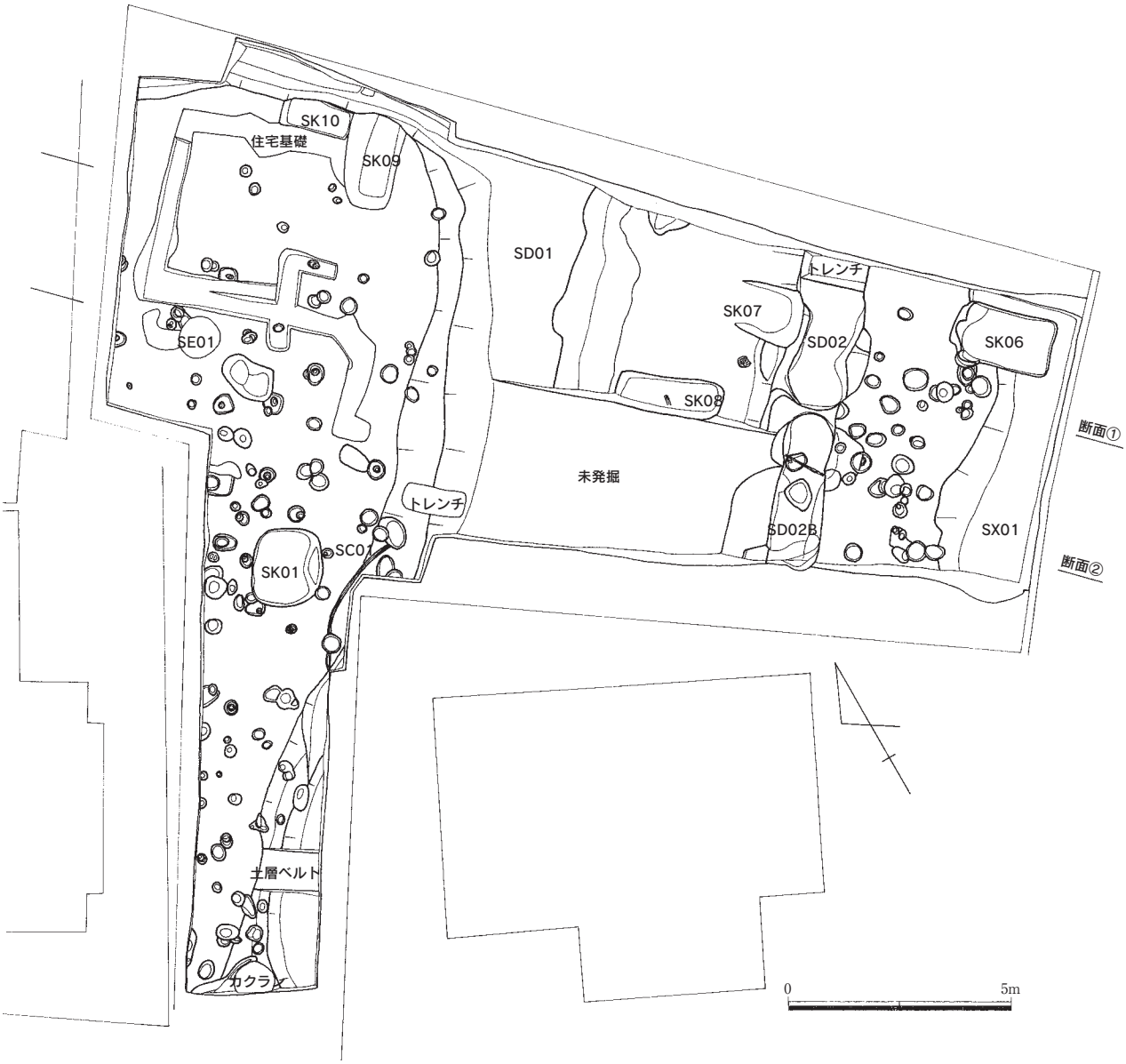


Fig. 5 第 84 次調査遺構配置図（縮尺 1 ／ 150）

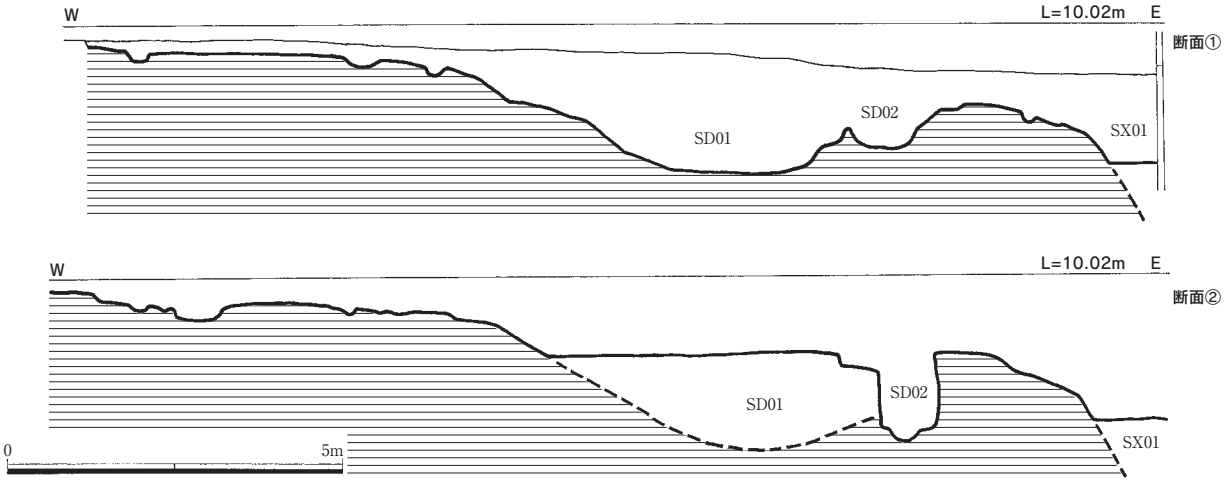


Fig. 6 調査区東西方向断面図（縮尺 1 ／ 150）

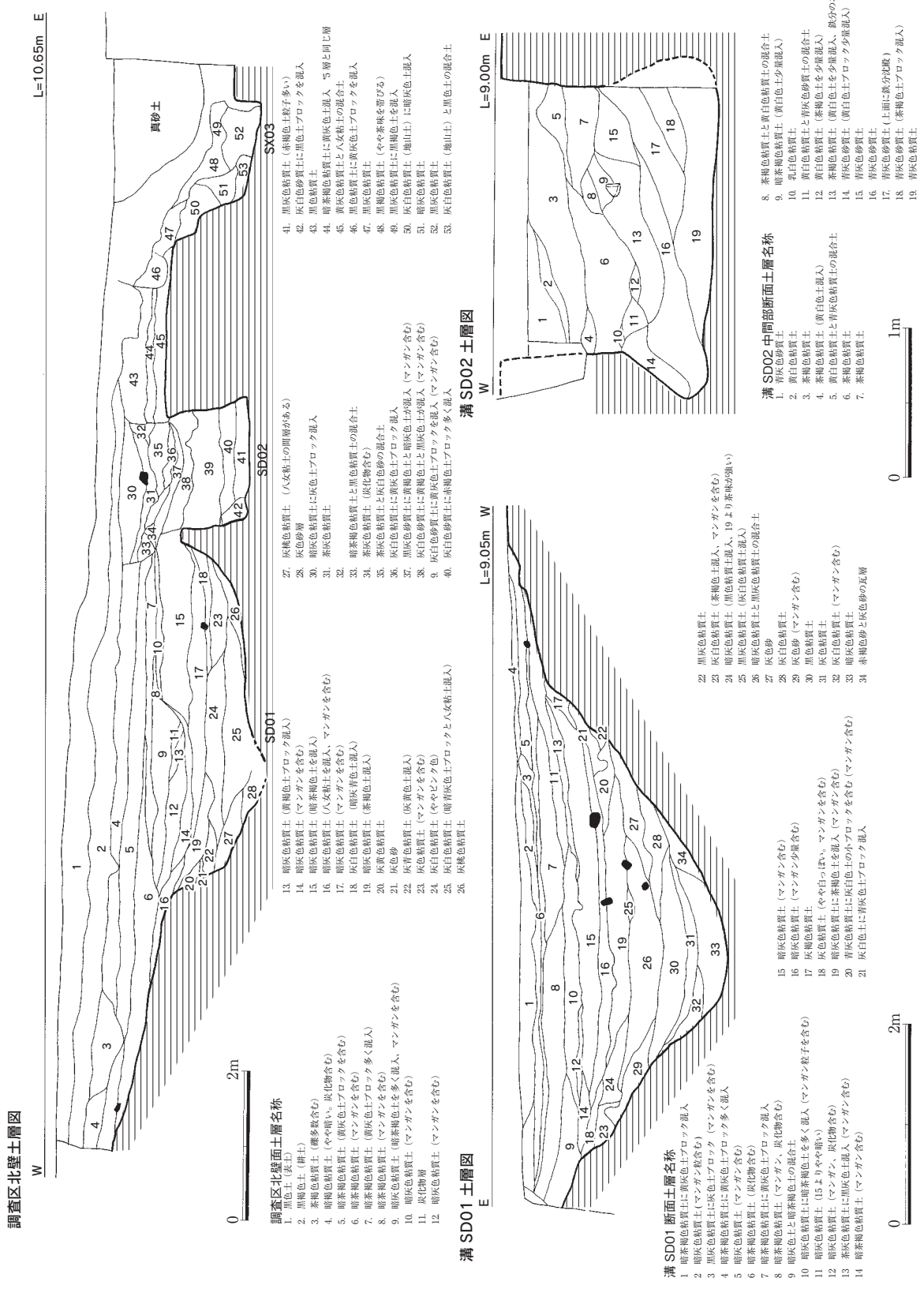


Fig. 7 調査区北壁及び各遺構土層図（縮尺1／80、1／60、1／40）

2.遺構･遺物説明

(1) 各遺構

井戸 SE01（Fig.8）平面形は不整円形を呈する。最大径 95cm、深さ 263cm を測る素掘りの井戸で、鳥栖ローム層から掘りこまれ、八女粘土層下の砂層まで達している。井戸中ほどに水位があった様で、壁面の崩落が著しく袋状を呈しているが、袋部に八女粘土を貼り付けて補修を行っている。井戸中頃に多くの土器が出土する。井戸底は楕円形を呈し、地山を掘り窪めて縦に半截した甕を上に向けて据えている。

遺物は、弥生時代中期末の甕・壷の他、自然木、種子なども出土した。

土壙 SK01（Fig.8）平面形は隅丸長方形を呈し、長さ 120cm、深さ 80cm を測る。東壁に段がついている。茶褐色粘質土を主体とする覆土である。遺物は、弥生土器小片が出土した。

土壙 SK02 ～ 06（Fig.8）いずれも平面形は隅丸長方形、断面は逆梯形を呈する。長さは 150 ～ 235cm、幅 70 ～ 125cm、深さ 20 ～ 66cm を測る。近世陶磁器が出土しているが、図示できなかった。江戸時代以降の時期と考えられる。

住居跡 SC01（Fig.8）上面を削平され、更に溝 SD01 に切られており、全体形は不明であるが、壁際の周溝が遺存しており、直径約 7m の円形住居跡と考えられる。周溝の幅は、約 0.8cm、深さ約 20cm を測る。

溝 SD01（Fig.7）調査区中央を南北方向から東西方向に矩形に曲がる大規模な溝であることから小田部城の東側の堀の一部と考えられる。規模は、幅約 8.2m、深さ 2.5m、現存長 19.5m を測る。南北方向の断面形は緩やかな箱薬研堀であるが、溝底は緩やかに平坦をなす。溝が東西に屈曲する部分は、土層図で観察する限り緩やかな U 字形をなしていることから東西方向への曲がり角に段差が付くものと考えられる。東西方向の溝底に幅約 40cm を測る陸橋が存在する。

溝下層から竹製の籠、木桶、明代の染付・白磁皿などが出土している。

溝 SD02（Fig.7）土層図 Fig.7 のとおり溝 SD01 の埋没後に掘削された南北方向の溝で、台地の崖線に沿っている。幅約 120cm、深さ約 80 ～ 130cm を測り、断面形は箱形であるが、一部の壁には袋状に浸食を受けている。溝の中央部に幅約 25cm の陸橋があり、溝は繋がっていない。南側溝には溝を横断する形に柵が設けられた。近世陶磁器が出土しており、江戸時代以降の時期が考えられる。

(2) 出土遺物

井戸 SE01 出土遺物（Fig.9 － 1 ～ 10、Fig.10 － 11 ～ 18、Fig.11 － 19 ～ 27，Fig.12 － 28 ～ 36，Fig.13 － 37 ～ 53）器種には甕、壺、高坏、器台、支脚、鉢、蓋、甑、石器（石包丁・砥石）、垂飾品がある。壺は鋤先口縁壺、袋状口縁壺があり外面は粗目のハケメ調整が行われている。１には丹塗りが施されている。3 の頸部と 5 の胴部には三角突帯を貼付している。6-1・6-2 は同一個体と考えられる。厚手の土器で内外面にハケメ調整痕がみられるが胴部外面下位に叩き痕がある。甕には大型と小型があり大型甕（１１～２３・２７）の作りや内外面調整は丁寧である。口縁部はくの字状を呈し、口縁端部が肥厚する。１７・１９・２１・２２のように跳ね上がり口縁状を呈するものもある。小型の甕（２４～２６，２８～３６）は、大型甕同様にくの字状口縁を呈するが総じて器壁が厚く作りが粗く３５のように器面に亀裂を生じたものもある。内面は指もしくは板状工具等により強いタテ、ナナメ方向のナデ調整を施している。外面は粗目のハケメ調整であるが３４には叩き痕がみとめられる。３７・３８は鋤先口縁の高坏で、坏部の内外面にはハケメがある。４０は支脚と考えられるが外面にいハケメを施す。４１は手づくね土器、４２～４７は小型の鉢であるが４２・４７の底部は丸底状を呈し安定しない。４９は甑で穿孔は焼成後の打ち欠きによる。８０は壺底と考えられるが外底部に布目の圧痕がある。５１は石包丁で二ヶ所に穿孔がある。石材は凝灰岩質で器面に気泡がある。５２は砥石片で泥岩整である。５３は飾品で先端を一部欠いている。上位に径０．４㎝の穿孔がある。全体に丹塗りを施す。

溝ＳＤ０１出土遺物（Fig.14 － 1 ～ 6）１・２ともに中国明代の磁器で１は白磁皿、２は染付皿で内底面に花押が書かれ外面にも文様が描かれている。３・５は瓦質土器で３は湯釜、５は摺鉢である。３の湯釜の下位には断面・コの字形の突帯を貼付し体部上位には渦文状の刻印を施す。外面に煤が厚

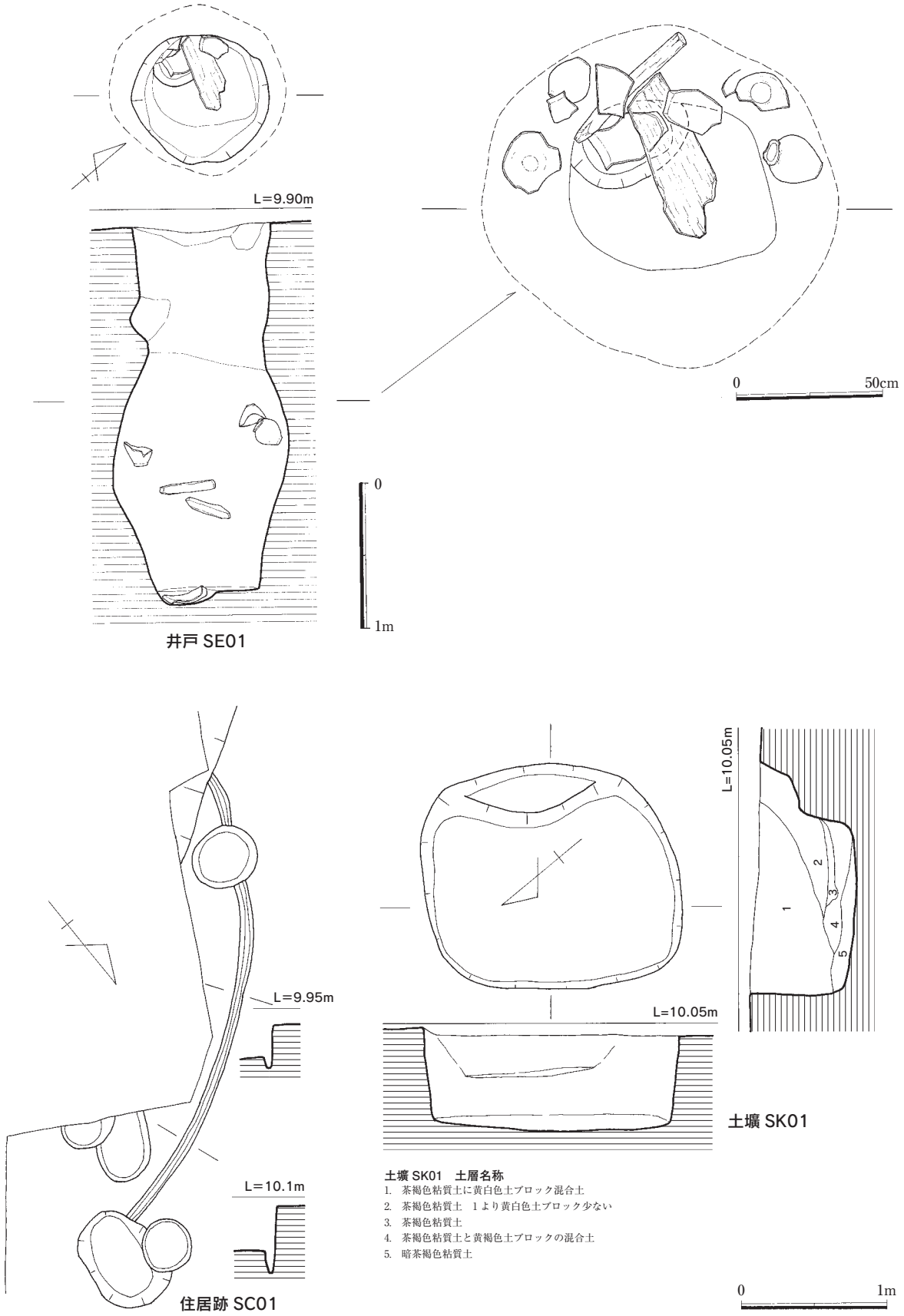


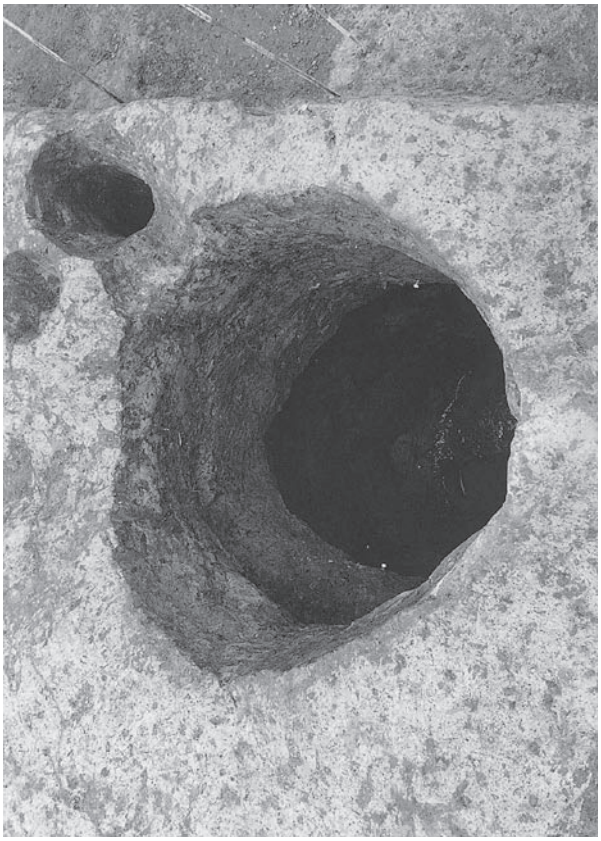
Fig. 8 住居跡 SC01、土壙 SK01、井戸 SE01 実測図（縮尺 1 ／ 40）

第 84 次調査区・北半分（北から）

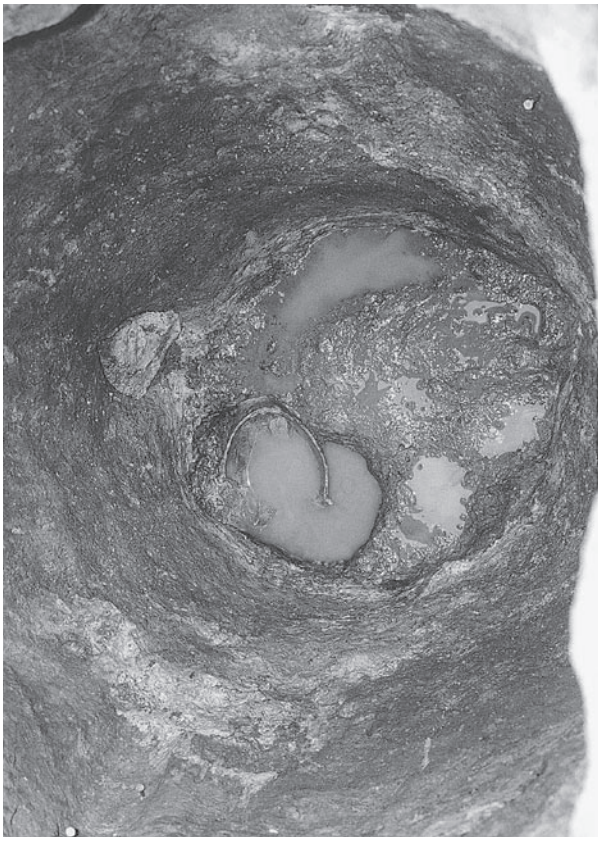
第84次調査区・南半分（北から）

住居跡 SC01（北から）

土壙ＳＫ０１（西から）



井戸ＳＥ０１（北から）



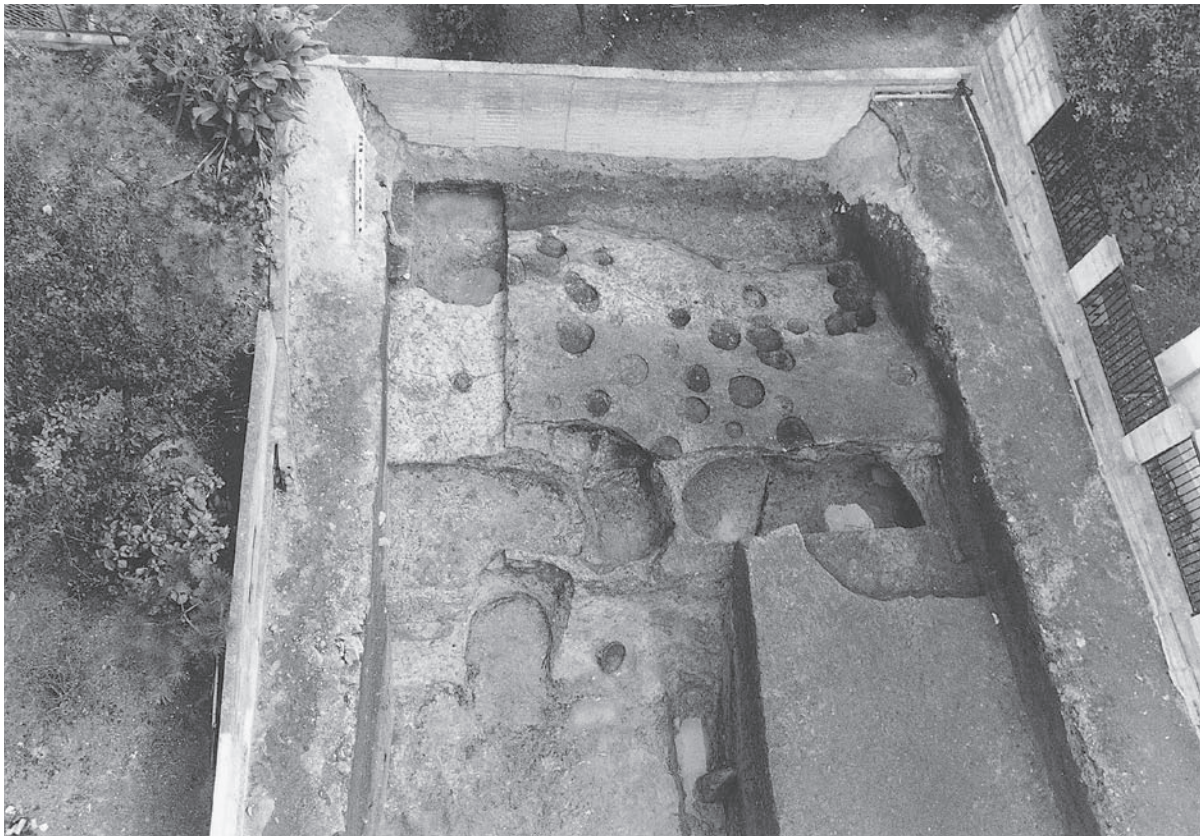
井戸ＳＥ０１底（東から）

溝ＳＤ０１（北から）

溝ＳＤ０１陸橋部（南から）

溝ＳＤ０１土層（南から）

溝ＳＤ０１出土竹製品（南から）



溝ＳＤ02、切岸ＳＸ０１（西から）

溝ＳＤ０２及び陸橋部（南から）

溝ＳＤ０２及び土層（南から）

く付着する。５は大内系の土器で内面及び内底面に６本単位の下ろし目を施している。４は須恵質土器の捏ね鉢である。６は茶臼の下臼である。石材は花崗岩で丁寧な磨きが行われている。

近世遺構及びトレンチ出土遺物（Fig.15 － 1 ～ 13，Fig.16 － 1 ～ 3）溝ＳＤ０１及び切岩状遺構埋土より出土した。高取焼、唐津焼、伊万里焼を主体としている。１・２は高取焼の灯明皿で口縁部に煤が付着している。３～５は陶器碗、６は高取焼の蓋である。７は高取焼の花入れで頸部に耳が付く。８は高取焼油壺で把手を欠失している。９は京風焼の陶器蓋で外面に松葉文と吉祥文字が配置されている。１０・１１は高取焼で１０は内外面に飴色の釉が施され外面の一部に白釉を掛ける。１２～１４は焼締めの陶器で１３・１４は摺鉢である。１５～１７は高取焼で１５の甕は全体に灰緑色釉を掛け、上位に黒釉掛けしている。１６は竹の節瓶で（徳利）で胴部に１２ヶ所一対のタテ長のヘコミを入れている。１７は焼締めの船徳利である。

溝ＳＤ０２出土遺物（Fig.16 － 21）２１は土錘で、長さ１０㎝最大径４．５㎝を測る。

Ｐ it 出土遺物（Fig.16 － 18 ～ 20・22）１８はＳＰ１７出土、１９はＳＰ１８出土、１９はトレンチ出土である。手づくね土器で底部は平底である。１９の内面には強いヨコナデ調整がみられる。２２はＳＰ６出土。鉄製品で、現存長８．５㎝、幅１.4cm、厚さ０．３cm を測る。一方の端部が曲がっており当初からの作りなのかは不明である。

3. まとめ

中世後半期に存在した「小田部（辺）城」については、規模や構造などの詳細な記録はなく、「早良郡誌」によると領国早良平野を掌握し、肥前国との交通要衝を押さえる重要な軍事拠点である荒平城に拠った大友氏被官の小田部氏の「里城」とする既述にすぎない。この「早良郡誌」の中には、「小田辺城」の他に「堀之内城」状の存在も伝えている。この「堀之内城」も又、詳細は不明であり、「小田部城」と同一のものを示すものなのか明らかではない。元来「堀之内」の呼称は、堀で囲まれた館を示すことが多い。これまでの発掘調査において幅３～ 5m、深さ 2m 以上を測る溝が、有田地域を中心にして検出されており、これらの溝が方形を呈した曲輪を形成し、しかも台地高所を中心にして台地全体に曲輪群が展開している状況からして、これらの曲輪群を「小田部城」跡と見做してきた。

しかし、「小田部城」の規模、構造は不明であり、また仮に小田部氏の里城としても小田部城の廃絶が、荒平城落城の 16 世紀後半の終わりの時期を想定すれば、その時期の遺物を特定しなければならない。この時期の城における構造的な課題は大きく、里城といえども、古代官衙や街道が発達し、玄界灘に面した交通の要所に立地しているため博多や糸島地方への連絡が容易く、荒平城の前衛を守護する位置にある有田・小田部の立地からして戦略的重要性は高く、また当時の戦略・戦術、特に戦国時代末期の鉄砲を用いた戦術の大変換を考えると溝と土塁で囲まれた館程度の構造を考えて良いのか検討を要する。

発掘調査で検出した溝は、矩形に区切られた曲輪を形成しているが、溝そのものにも切り合い関係があるので、曲輪の拡幅や変更などが常時為されていたと考えられる。これらの溝や関連施設から出土した土師器や瓦質土器のほか瓦類の時期についていえば 16 世紀の前半までが考えられ、それは、大内氏の筑前国支配における早良郡の拠点として有田・小田部の在り方に符合する。大内氏の譜代家臣で、早良郡代大村興景は、知行地の一部に小田部地域にあった「中薗屋敷」「中薗名」を得ているが、そもそも早良郡一円統治の拠点としての有田・小田部には中心的な城館が構築されていたものと考えられる。「堀之内城」と「小田部城」の両者が同一の城を指すのか、別物なのか、これまでの発掘調査で検出された曲輪群の築造と埋没の時期、出土遺物、そしてこの時期における城館の立地や構造・規模などについて併せて検討すべきであろう。「小田部城」の所在地は、伝承によれば有田二丁目に所在する宝満宮が中心とされている。事実この神社周辺には土塁も遺存してり、且つ切岸状の断崖も見受けられるが、この地域は丘陵最高所から南に下った狭い尾根地形に相当している。当該地調査では、切岸と考えられる遺構とその内側に堀と考えられる溝が存在するが、切岸の内側に堀が存在することに違和感を覚え、時期も構造も相違する構造物とみる。中世後半期の城館の構造的な変遷を踏まえながら検討していく必要がある。

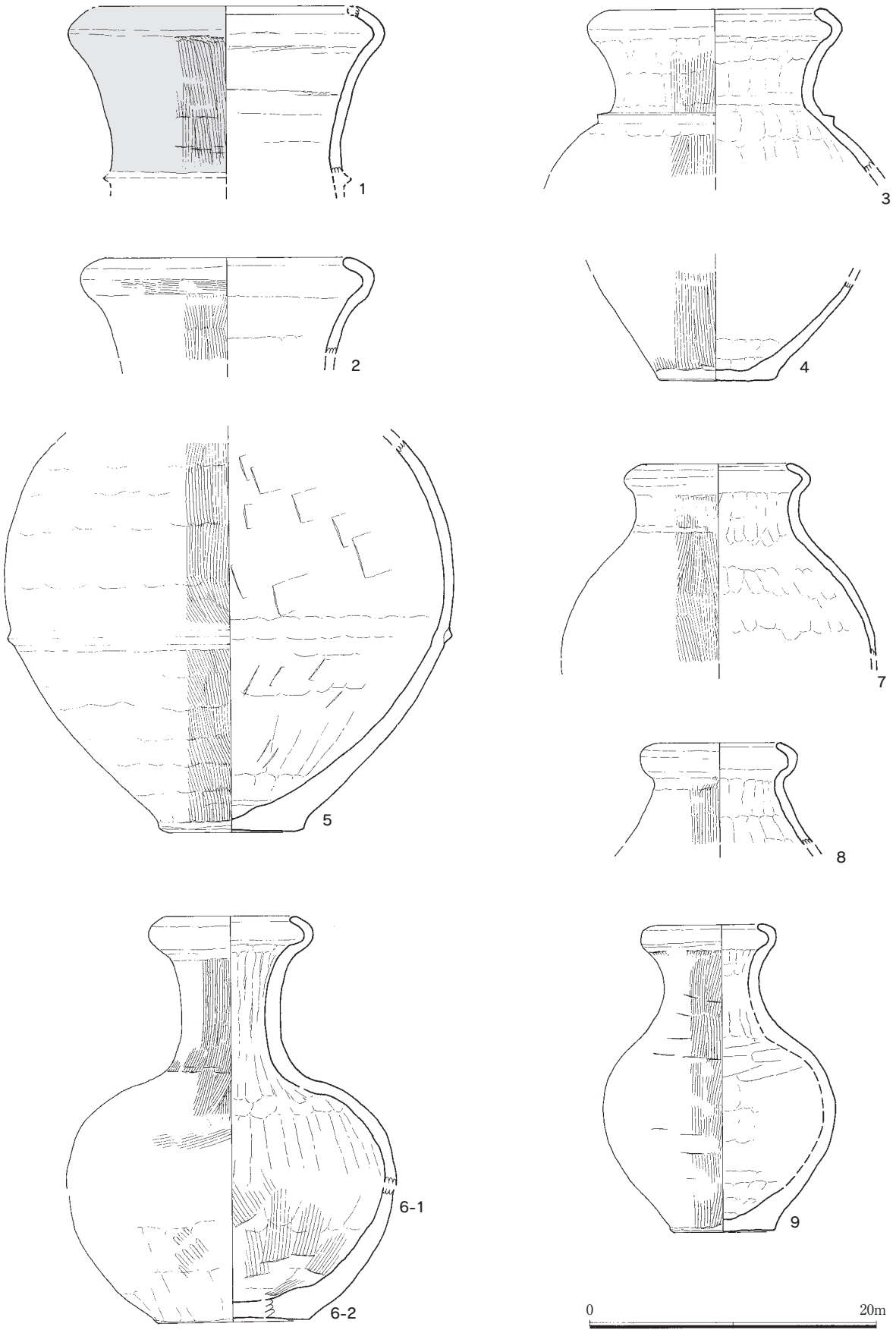


Fig. 9 井戸 SE01 出土遺物実測図 1（縮尺 1/4）

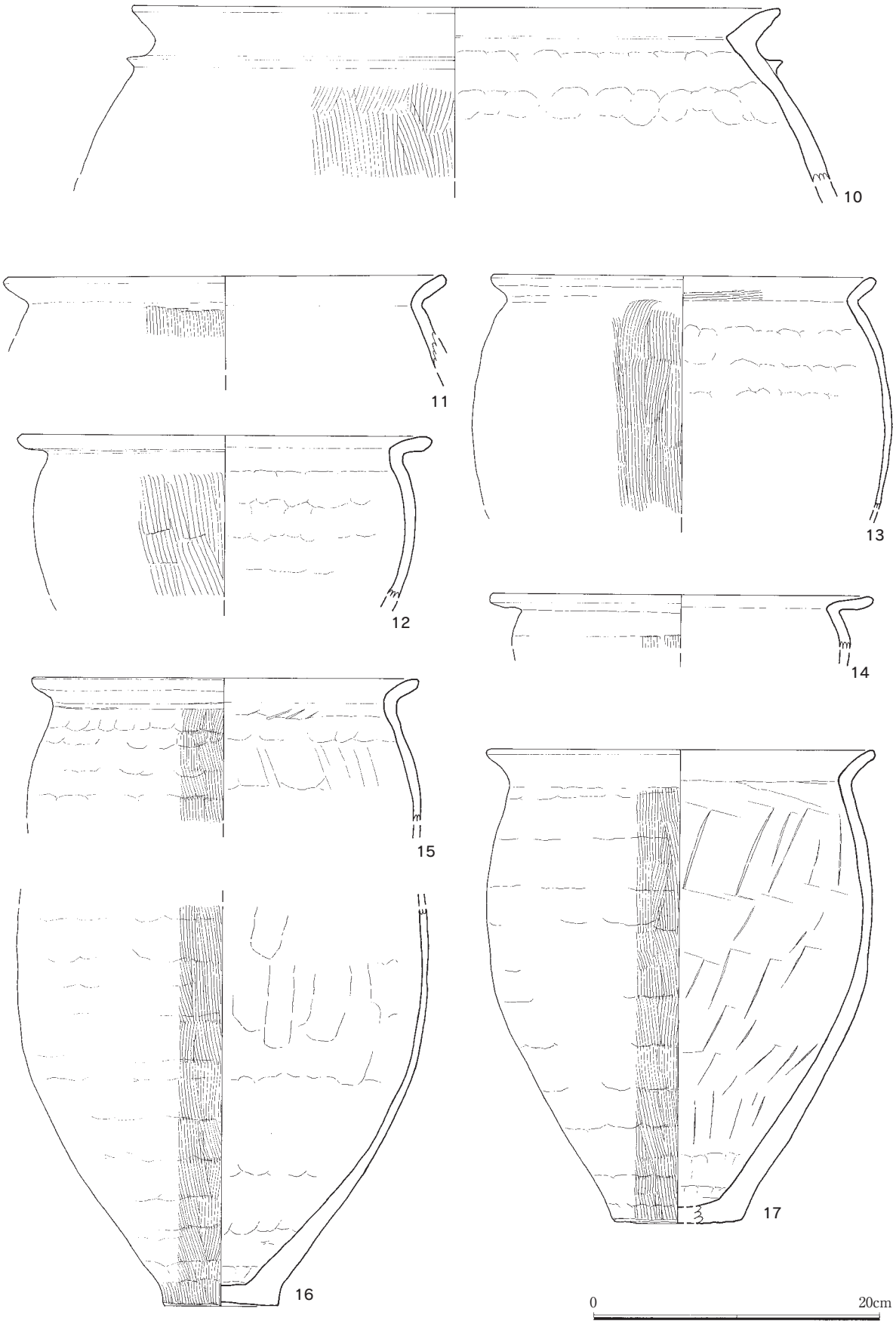


Fig. 10 井戸 SE01 出土遺物実測図 2（縮尺 1/4）

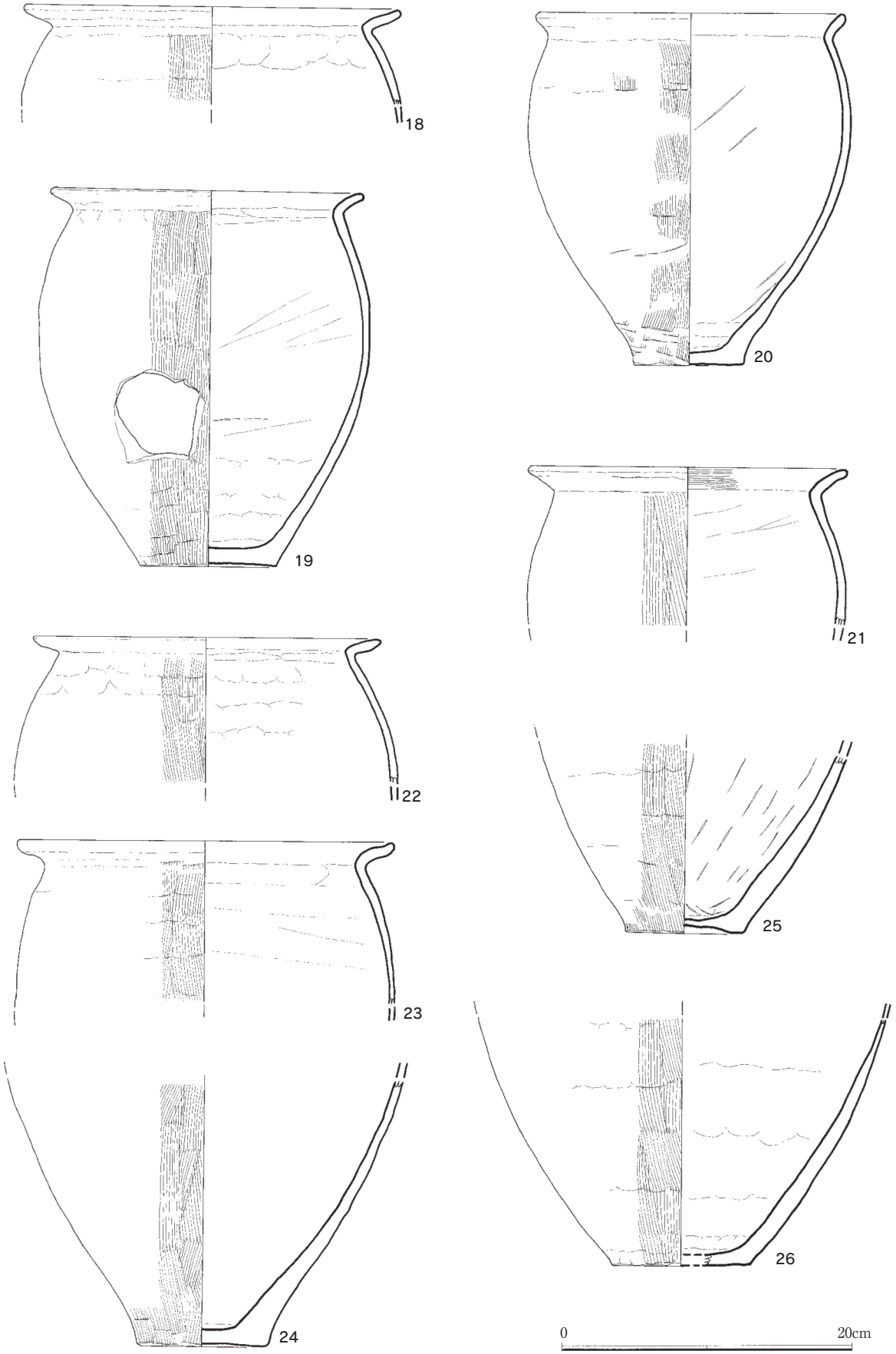


Fig. 11 井戸 SE01 出土遺物実測図 3（縮尺 1/4）

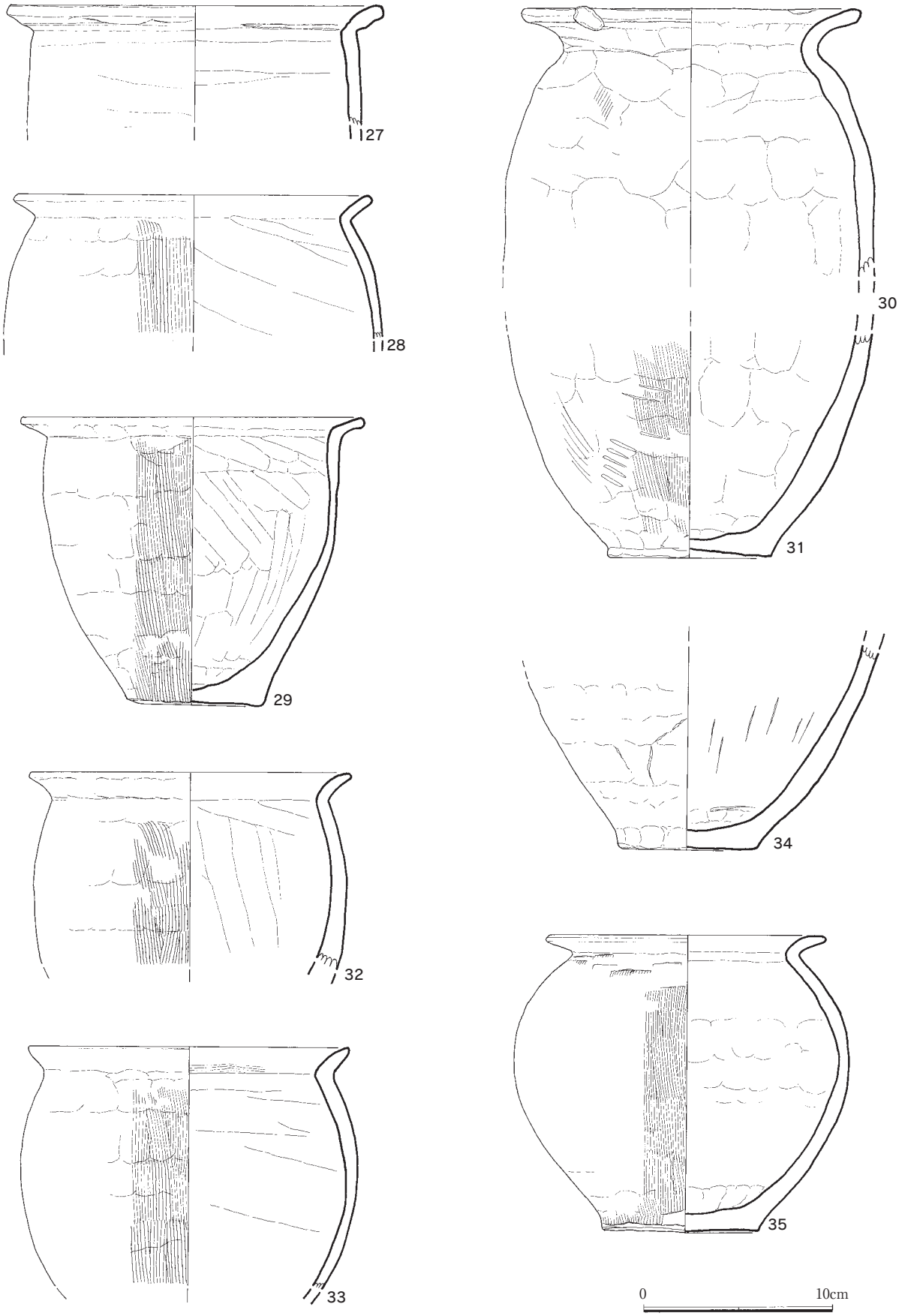


Fig. 12 井戸 SE01 出土遺物実測図 4（縮尺 1/4）

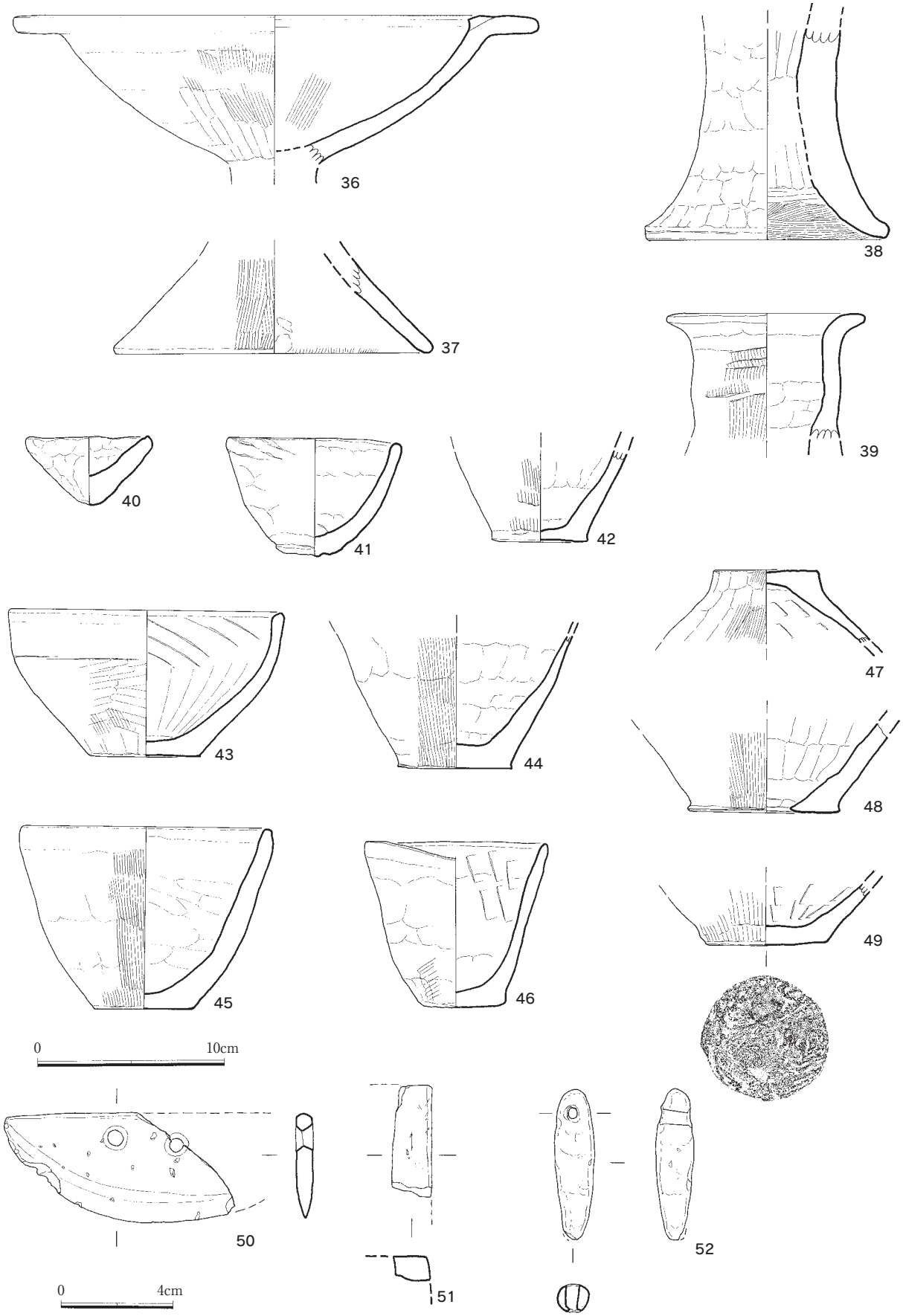


Fig. 13 井戸 SE01 出土遺物実測図 5（縮尺 1/3・1/2）

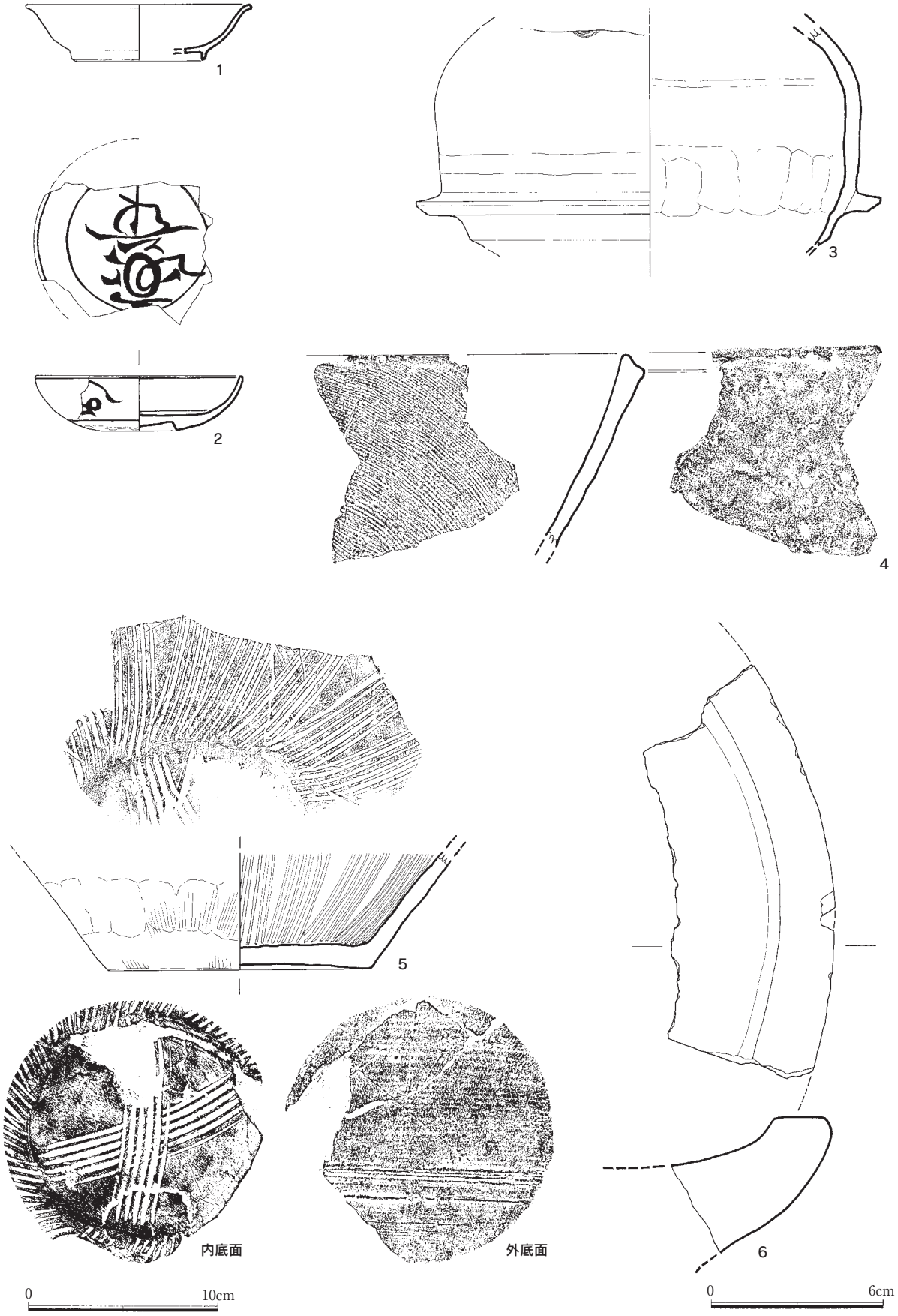


Fig. 14 溝 SD01 出土遺物（縮尺 1/3・1/2）

Fig. 15 近世遺構出土遺物 1（縮尺 1/3）

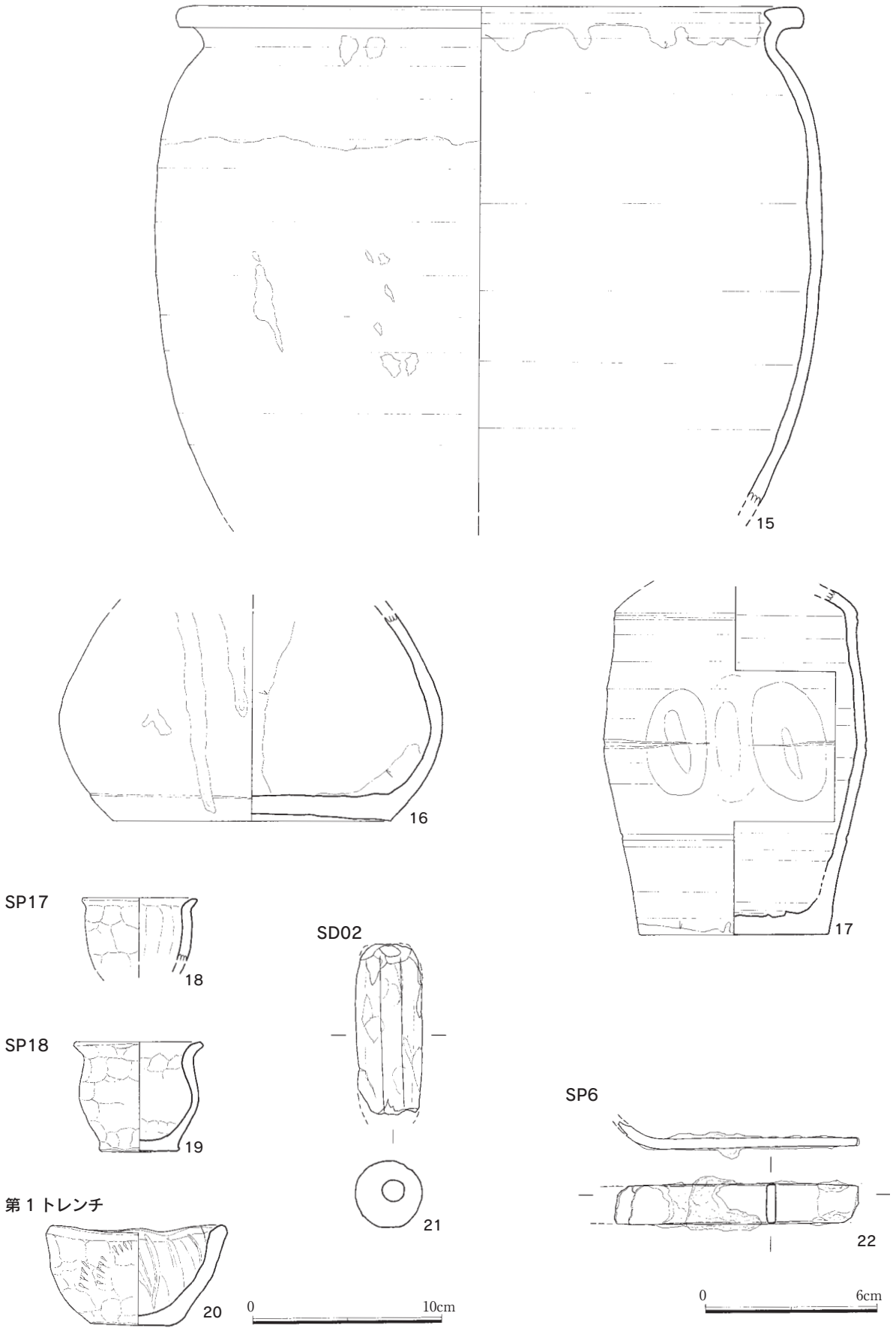
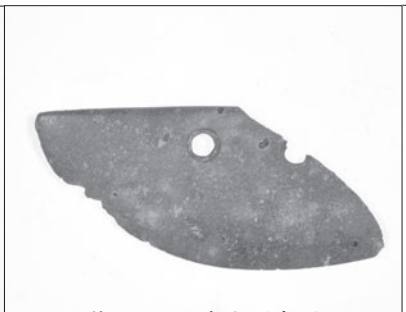


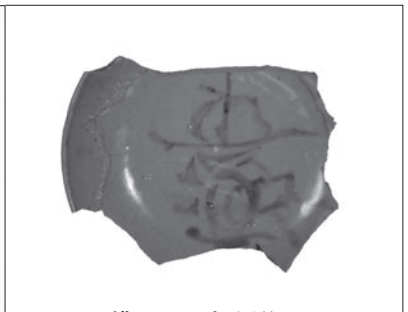
Fig. 16 近世遺構出土遺物 2、溝、Pit 出土遺物（縮尺 1/3、1/2）

Fig. 17 有田地域の中世後半期の溝配置図（縮尺 1/3,000）

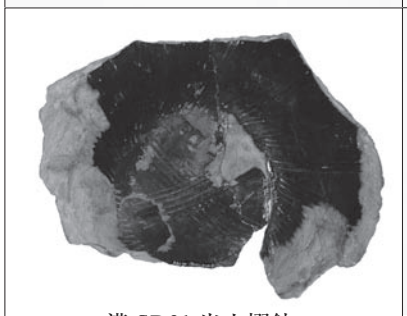
井戸 SE01 出土垂飾品



井戸 SE01 出土石庖丁



溝 SD01 出土明皿



溝 SD01 出土摺鉢

溝 SD01 出土土錘

SP6 出土鉄製品

出土遺物写真

Tab. 2 有田第８４次調査遺構一覧表

遺構名称	旧名称	遺構の種類	形　状		規　模	時　期	出土遺物	備　考
			平面形	断面形				
ＳＥ０１	Ｄ－１	井戸	不整円形	中間部袋状	最大径 0.95m、袋状部径 1.2m、深さ 2.6m	弥生時代中期末～後期初頭	壷、甕 石庖丁	
ＳＫ０１	Ｄ－２	土壙	隅丸長方形	逆梯形	長さ 1.2m、幅 0.8m、深さ 0.8m	弥生時代		
ＳＫ０６		土壙	隅丸長方形	逆梯形	長さ 2.2m、幅 1.25m、深さ 0.99m	不明		
ＳＫ０７		土壙	隅丸長方形	逆梯形	最大長 1.7m、幅 1.25m、深さ 0.9m	不明		
ＳＫ０８		土壙	隅丸長方形	逆梯形	長さ 2.4m、幅 0.9m、深さ 0.28m	不明		
ＳＫ０９		土壙	隅丸長方形	逆梯形	最大長 2.1m、幅 1.25m、深さ 0.9m	不明		
ＳＫ１０		土壙	隅丸長方形	逆梯形	長さ 1.6m、幅 1.2m、深さ 0.19m	不明		
ＳＤ０１	ＳＤ０３	濠		逆梯形	ＳＤ０１に同じ	中世末		
ＳＤ０２	Ｍ２ａ～ｃ	溝		Ｕ字形	幅 1.2 ～ 1.5m、深さ 1.7m、最大長 7m、陸橋部幅○ｍ	近世	陶磁器	ＳＤ０１を切る
ＳＸ０１	Ｍ３	切り岸		断面二段	高さ不明、犬走の幅 1.8m	中世末	陶磁器	小田部城関係遺構
ＳＣ０１	J-1	住居跡	円形		復元径 5.6m、現存の深さ 0.26m、周溝幅 0.8m、深さ 0.2m	弥生時代	土器片	

第 4 章　有田遺跡第 85 次調査

1. 地形と概要

(1)　立　地

当該地は、有田・小田部台地の最北部に位置する舌状台地に立地する。調査区の標高は、10.5m を測り、全体に平坦面を形成する。当該地は、既に宅地造成されており、この区画を二回に亘って発掘調査した。初回が第85次調査、二回目が第89次調査である。ここでは第85次調査の経過のみ報告する。

(2)　概　要

住宅区画は、進入路を中心に 4 区画に整地されており、その一区画を調査対象とした。調査区の表土層の厚さは、約 55cm を測るが、二次的な盛土である。遺構面は著しい削平を受け、また大きな攪乱壙が設けられているため遺構の遺存状態は悪い。柱穴考えられる小ピットが東西方向に並んでいるがピットの間隔が一定しておらず、柵と考えることに躊躇する。

詳細は、第 89 次調査とまとめて報告したい。

2. 遺構・遺物説明

先述したように遺構面は、著しい削平と攪乱を受けており、僅かに柱穴と考えられるピットを確認したに過ぎない。遺物も土器片がわずかであった。

3. まとめ

当該調査においては、遺構の遺存状態が悪いため詳細な説明は避けたい。周辺地域では、その後の調査にて成果がもたらされているので、隣接する第 89 次調査の報告の中で併せて説明をしたい。

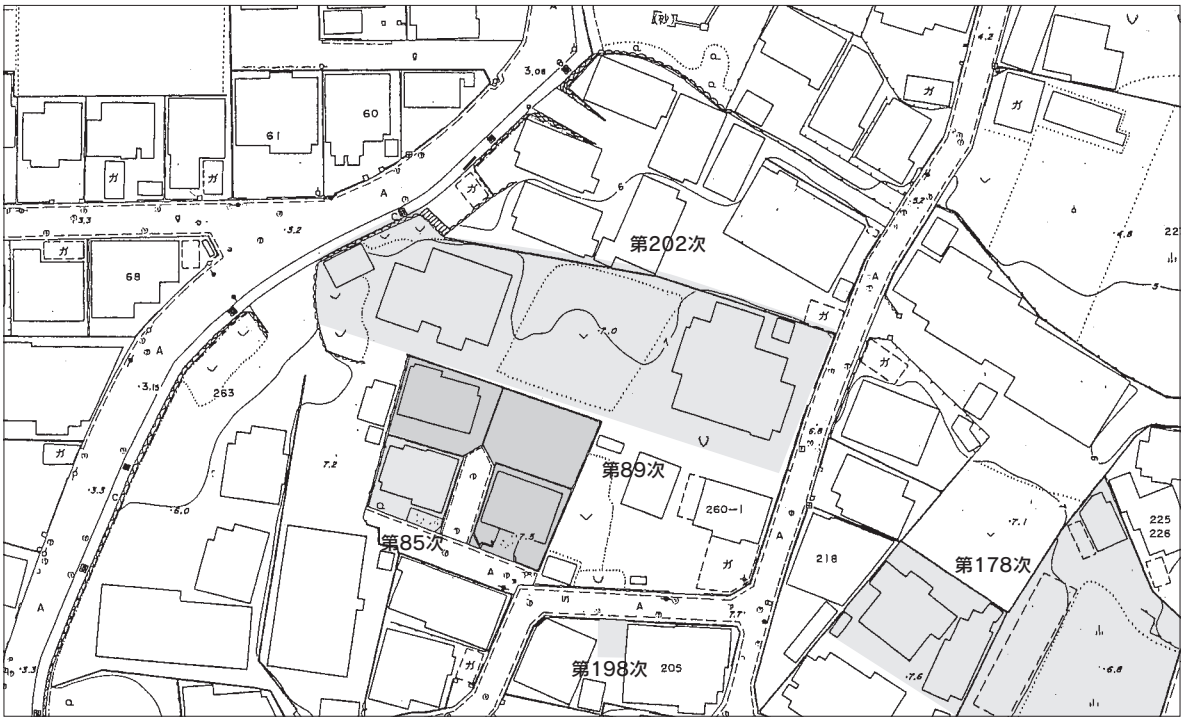


Fig. 18　第 85 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

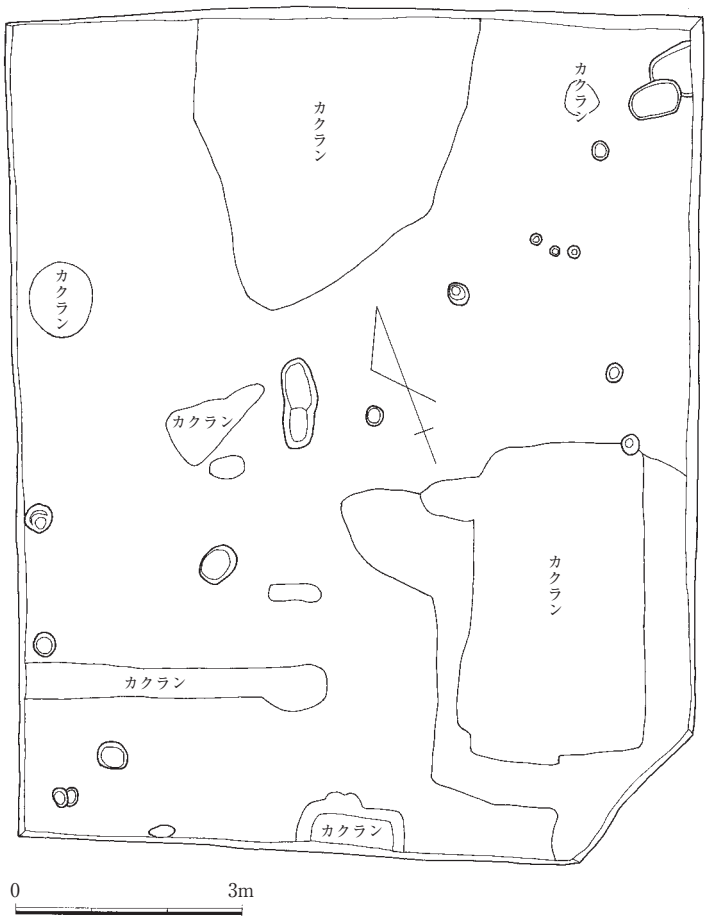


Fig. 19 第85次調査遺構配置図（縮尺1/100）

有田遺跡第85次調査　全景（南から）

第 5 章　有田遺跡第 88 次調査

1. 地形と概要

(1)　立　地

当該地は、有田地区の最高所から東へ下った標高約 9m を測る緩傾斜面に位置する。最高所との比高差は約 2m を測る。昭和 40 年代の区画整理によって東に向かって階段状の区画がなされ、さらに区画内は短冊状の宅地区画が造成されている。字図によれば旧小字は「東畑」に所在する。当該地の西側では、第 7 次・66 次調査が行われており、少なくとも律令期に台地緩斜面が階段状に造成されていた事が推測されている。

(2)　概　要

試掘調査に於いては、明確な遺構を検出することができなかったが、包含層から夥しい土器が出土したため遺構の存在を確信して発掘調査を実施することとなった。ただし遺構面が包含層、すなわち整地層であったがために、季節的に日中の光線が弱く、遺構の把握に手間取った。遺構面は、暗茶褐色粘質土や黒褐色粘質土を対象としたが遺構確認は困難を極めた。辛うじて住居跡の土器煙突を発見したことにより掘立柱建物やその他の遺構確認繋げることができたが、掘立柱建物の柱穴の把握に不完全さを否めない。遺構は、標高約 8.5m の高さより検出した。

土層は、盛り土された表土及び耕作土の厚さが約 20cm を測り、その下層の第 3 層から包含層（整地層）となる。第 4 層の暗褐色粘質土層が律令時代の整地層と考えられる。中世後半期の溝 SD02 は、第 4 層を切り込んでいるが、上面は後世の削平を受けている。

遺構は、弥生時代の土器溜まり、律令時代の掘立柱建物 7・住居跡 1、中世後半期の溝 1、時期不詳の溝 4 を検出した。

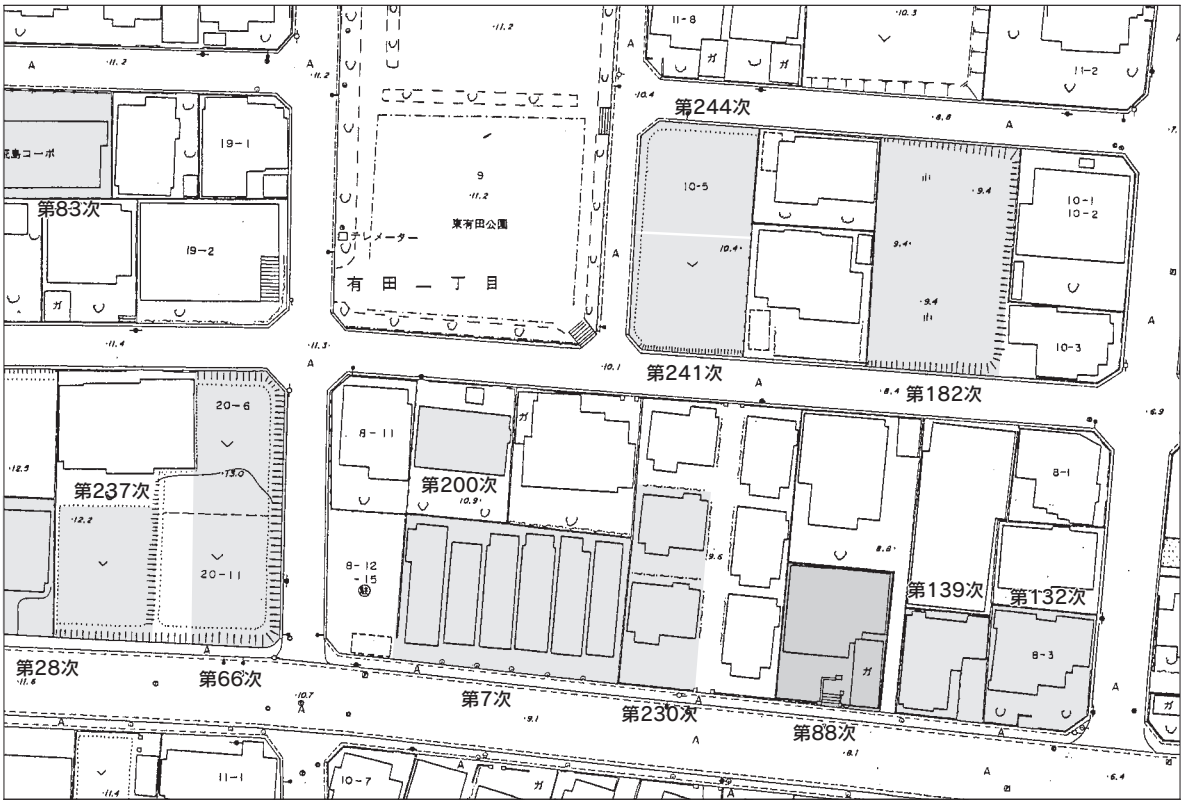


Fig. 20　第 88 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

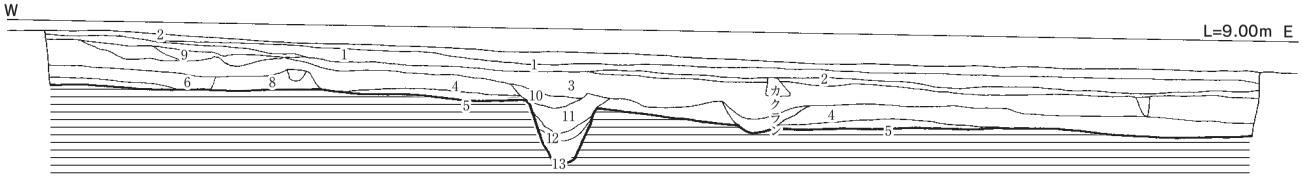
Fig. 21 第 88 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）

2. 遺構・遺物説明

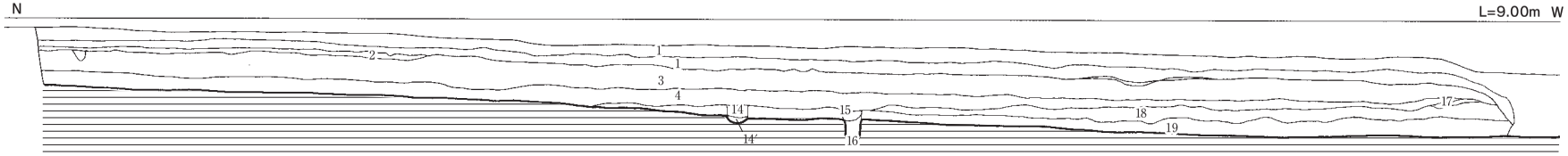
(1) 各遺構

住居跡 SC01（Fig.23）掘立柱建物 SB01・02 から切られており、また遺構確認のための掘り下げにより遺存状態は悪い。平面形はほぼ隅丸方形を呈し、一辺が 2.2m 程度の小型の住居跡である。住居跡の東壁面中央に馬蹄形の竈を設け、住居跡の外部に突き出した煙突には竈から土師器甕を四個連ね

北壁土層図



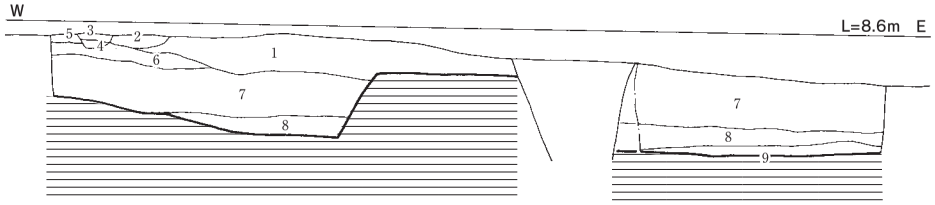
東壁土層図



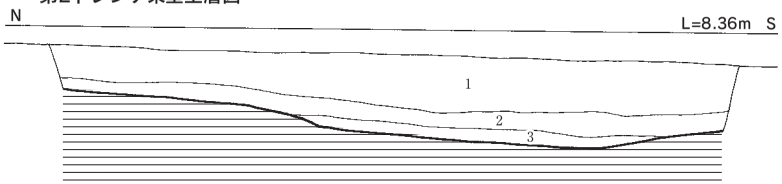
調査区北・東壁面土層名称

1-1. 砂利
1-2. 盛土（真砂土）
2. 暗灰褐色土（旧表土）
3. 茶褐色粘質土
4. 暗茶褐色粘質土（土器片多い）
5. 黒色粘質土（土器片多い）
6. 暗茶褐色粘質土
7. 黒褐色粘質土
8. 茶褐色粘質土（炭化物多く含む）
9. 暗茶褐色粘質土（黄褐色のローム粒子少量含む）
10. 灰色粘質土（茶褐色粒子含む）
11. 暗灰色粘質土
12. 黒灰色粘質土
13. 赤褐色砂質土
14. 茶褐色粘質土（柱穴）
15. 茶褐色砂質土（柱穴）
16. 黄褐色粘質土（柱穴）
17. 黄褐色粘質土　16よりやや黄（柱穴）

第1トレンチ北壁土層図



第2トレンチ東壁土層図



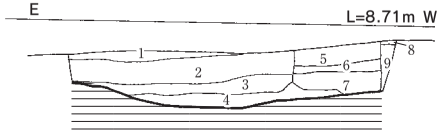
第１トレンチ北壁面

1. 暗茶褐色土（黄褐色土粒子多く含む）※壁面土層４層に同じ
2. 茶褐色粘質土（黄褐色土粒子多い）（柱穴）
3. 黒褐色粘質土（柱穴）
4. 茶褐色粘質土（黒褐色土ブロック含む）（柱穴）
5. 茶褐色粘質土（黄褐色土粒子多い）（柱穴）
6. やや暗茶褐色粘質土（柱穴）
7. 黒灰色粘質土（黄褐色土粒子多く含む）
8. 黒褐色粘質土
9. 暗灰色砂質土（地山）

第２トレンチ東壁面

1. 黒灰色粘質土（黄褐色土粒子を含む）
2. 黒褐色粘質土（黄褐色粒子少量含む）
3. 暗灰色砂質土（地山）

第3トレンチ南壁土層図

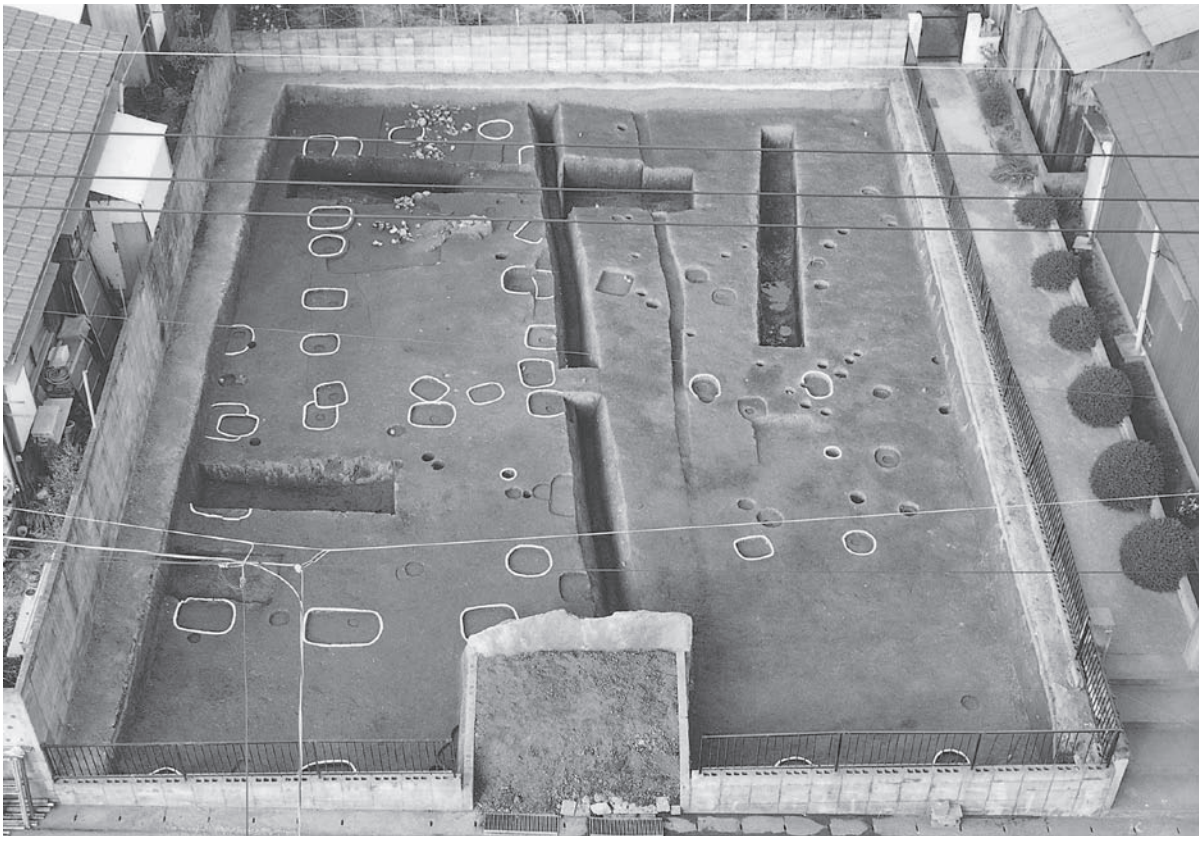


第３トレンチ南壁面土層名称

1. 暗茶褐色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土（黄褐色土粒子多く含む）
3. 黒灰色砂質土（黄褐色土粒子多く含む）
4. 黒褐色粘質土
5. 茶褐色粘質土（マンガン黒色土ブロック多く含む）（柱穴）
6. 暗茶褐色粘質土（灰色土も多く含む）（柱穴）
7. 茶褐色粘質土と灰色土ブロックの混合土（柱穴）
8. 暗褐色粘質土（柱穴）
9. 黒灰色粘質土（黄褐色土粒子多く含む）（柱穴）

0　2m

Fig. 22 調査区壁面及びトレンチ土層図（縮尺1/60）



第 88 次調査全景（南から）

グリッド調査の状況（南から）

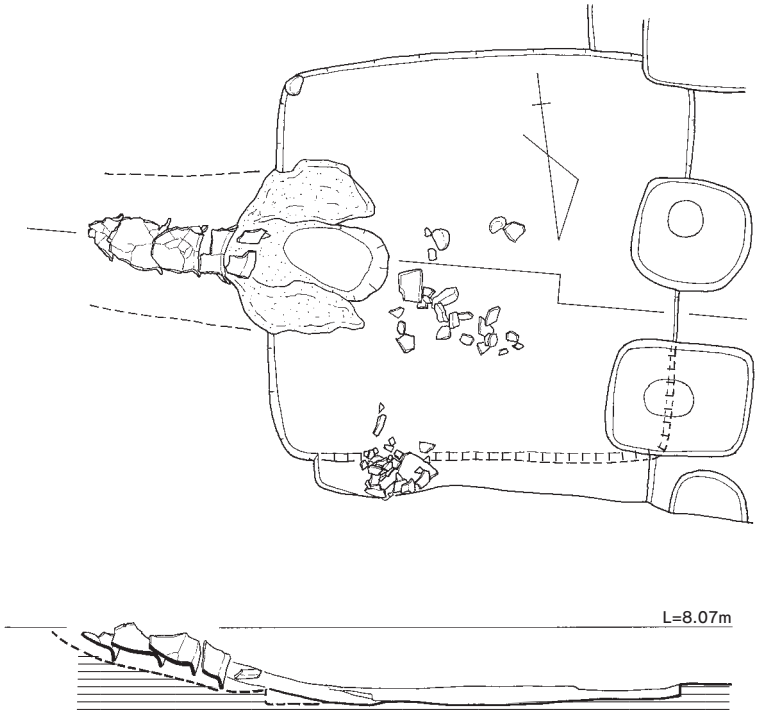


Fig. 23 住居跡 SC01 実測図（縮尺 1/40）

住居跡ＳＣ０１（南から）

住居跡ＳＣ０１煙出し（南から）

て煙り出しとしている。竈は、青灰色粘土を混ぜた土でつくられている。柱穴は発見できなかった。

掘立柱建物（Fig.24・25）建物として全容を把握できたのは5棟であるが、他に柱穴が並び、建物の可能性があるもの二カ所である。

掘立柱建物 SB01（Fig.24）南北方向の建物で、掘立柱建物 SB02 と切り合い関係にあり、掘立柱建物 SB02 に後出する。身舎の梁行2間、桁行3間の建物で、東側に1間の庇が付いている。桁行柱間の平均は約 260cm である。柱穴堀方は平面形が隅丸長方形を呈しているが、全体に規模がばらついている。

掘立柱建物 SB02（Fig.24）SB01 建物に先行する。身舎規模は、梁行2間、桁行4間の建物であるが、桁行の柱間隔が一定ではない。また、北側の梁行の間柱が検出できておらず、建物が北へ延びる可能性もある。建物の南側梁行と西側桁行に庇が付くと考えられる。

掘立柱建物 SB03（Fig.25）主軸を東西方向においた建物である。梁行2間、桁行3間を測り、柱穴堀方平面形は、隅丸長方形を呈する。

掘立柱建物 SB04（Fig.25）主軸を南北方向においた建物と考えられるが、南側境界地にあるため全体形は不明である。梁行は2間以上の規模と考えられる。柱穴堀方は、一辺 80cm 以上を測るもので、平面形は隅丸長方形を呈する。

掘立柱建物 SB05（Fig.25）南北方向の建物で、東側境界地に在るため全体形は不明である。梁行は1間以上、桁行は4間である。桁行柱間平均は約 270cm を測る。柱穴堀方は全体に規模が小さく、平面形は不整円形又は、隅丸長方形を呈する。

掘立柱建物 SB06・7（Fig.21）いずれも全体形が把握できなかった。SB06 は SB02 建物と一部の柱穴堀方が斬り合っており、SB02 に先行する建物であるが規模が不明である。柱穴堀方平面形は隅丸方形を呈する。

SB07 は、SB02 建物の東側庇の柱穴堀方に切られており、SB02 建物に先行するものと考えられるが、西側境界地に在るため2間異境の規模を把握したにすぎない。柱穴堀方平面形は隅丸長方形を呈する。

溝（Fig.21）5条の溝状遺構と暗渠を検出した。溝状遺構については、溝 SD02 を除いて時期・機能を判断することができない。

溝 SD01（Fig.26・26）南北方向の溝で、上面を客土の暗茶褐色粘質土が覆っており、土層図から見ても溝上部が後世に削平されている事が分かる。

断面形は箱薬研堀を呈しており、溝幅は、約 80cm、深さ約 75cm を測る、最下層には若干の砂質土も見られたが排水を目的とした溝ではなく、屋敷区画の溝と考えられる。

出土遺物には、李朝の碗、土師器鍋などがある。

溝 SD02（Fig.26）遺構確認作業にて検出した溝であるが、遺存状態が悪く、規模・機能が不明である。溝の最大幅 120cm、深さ約 2cm を測る。

溝 SD03 ～ 05（Fig.21）溝機能・時期が不明である。SD03・04 は東西方向、SD05 は南北方向である。断面形は V 時形を呈し、溝幅は 30 ～ 35 cm、深さ 5

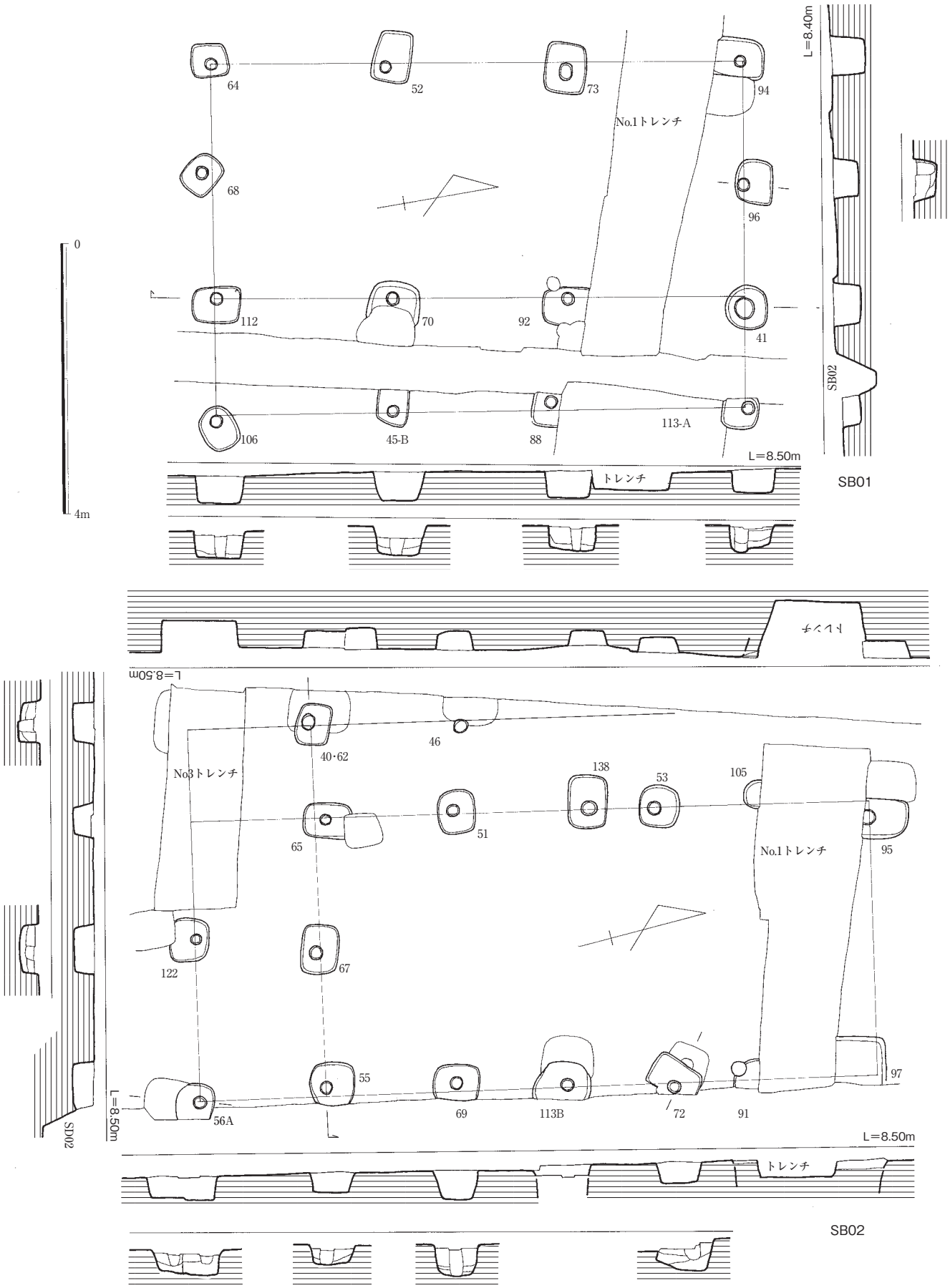


Fig. 24 掘立柱建物 SB01・02 実測図（縮尺 1/80）

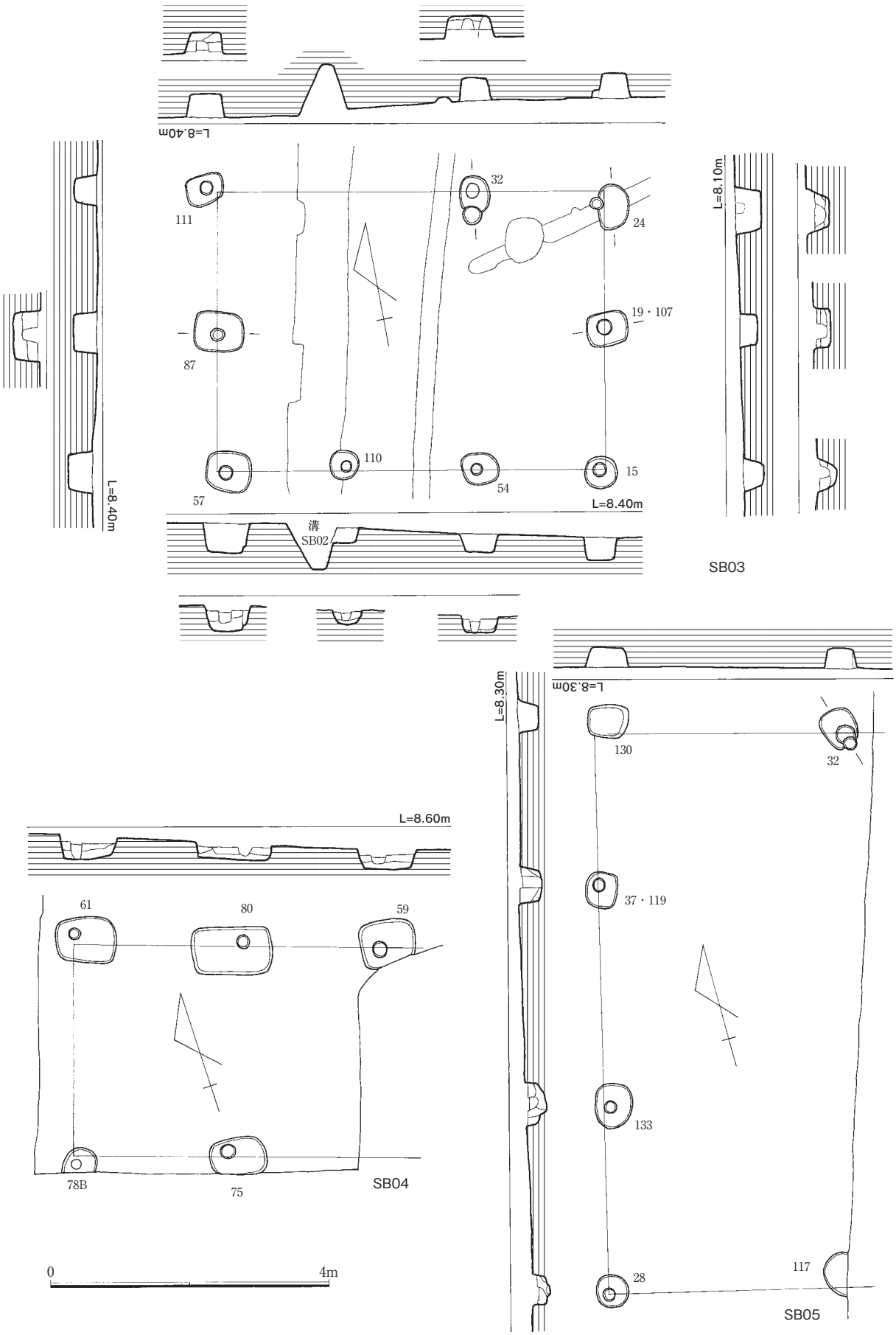
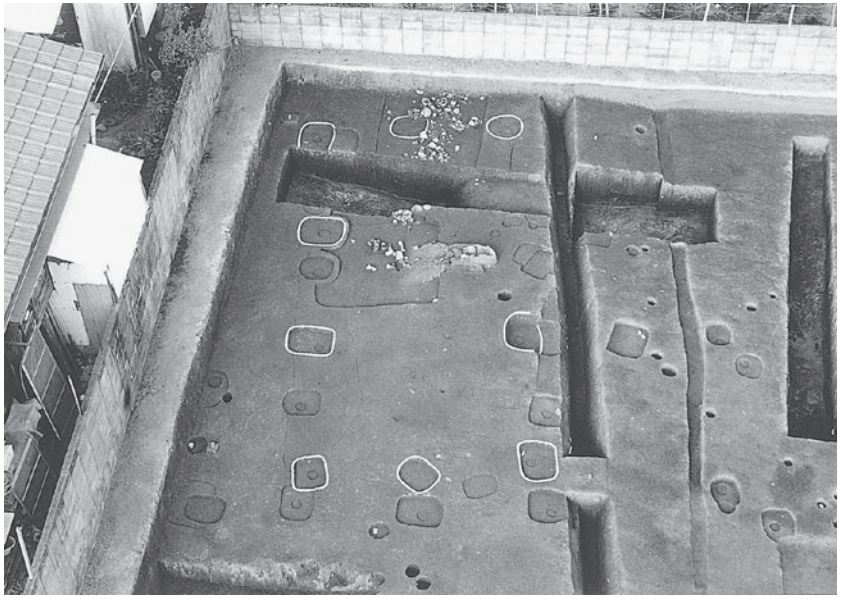


Fig. 25 掘立柱建物 SB03 ～ 05 実測図（縮尺 1/80）

堀立柱建物ＳＢ０１・０２（東から）

堀立柱建物ＳＢ０２（東から）

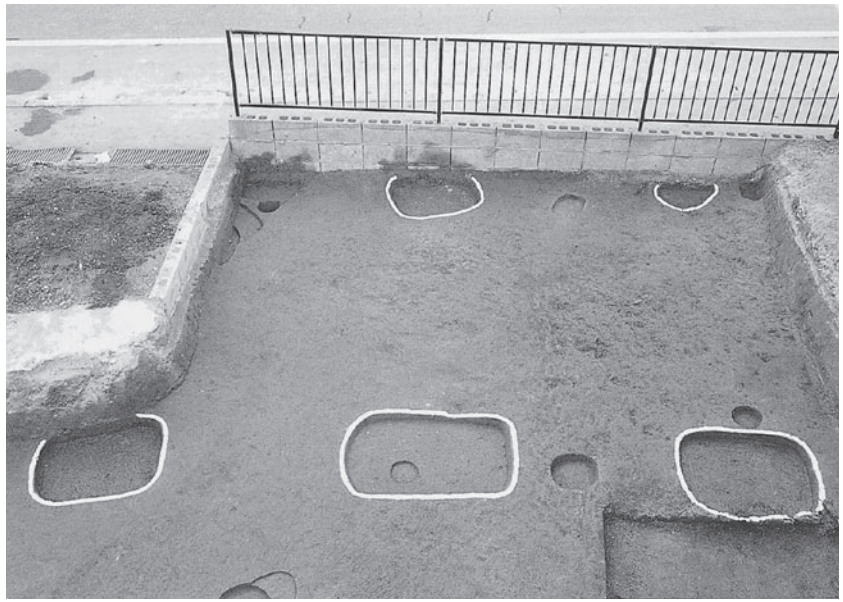


堀立柱建物ＳＢ０１（南から）

堀立柱建物ＳＢ０３（北から）

堀立柱建物ＳＢ０３　柱穴57土層

No.３トレンチ土層（北から）



堀立柱建物ＳＢ０４（北から）

堀立柱建物ＳＢ０６（東から）

～ 10cm を測る。

土器溜まり SX01（Fig.22）先述したように整地層内には多種、大量の遺物が含まれているが、特に弥生時代中期後半から末の土器が多い。土器溜まりについては明確な遺構を確認できた訳ではないが、№1トレンチの北側に於いて完形に近い土器が纏まって出土したので土器溜まりとして取り上げた。

土器群は、南北の幅約 2m 以上、東西の幅約 1.5m の範囲に分布するもので、中央付近には、丹塗りの袋状口縁壷が起立し、周辺に二重の山形突帯を巡らした甕や丹塗りの高坏などの祭器と考えられるが土器が多数散布していた。

整地地行の際に一括して廃棄されたものなのか、或いは元来弥生時代の生活面が存在し、遺構として原位置を留めているのか判然としない。遺物は、土器が主体で、時期は中期後半から後期初頭までであるが、後期初頭の土器が主体である。

（２）出土遺物

住居跡出土遺物（Fig.28―1 ～ 4）住居跡床面からは土師器片が出土した他、かまどの煙出しとして使用された土師器４点がある。煙出し使用の土師器甕は４点で、口縁部がくの字形に
外反し、１～３は口縁端部が若干跳ね上がる。４の口縁端は大きく外反する。胴部内面は、タテ、ナナメ方向のヘラケズリが施されている。８世紀後半代の時期が考えられる。

溝ＳＤ０１出土遺物（Fig. 28―5 ～ 9）５・６は小型の土師器皿で口径は７．５㎝程度である。７の土師器坏は体部が大きく開いている。８は李朝陶器碗で一部を欠いている。内面と高台畳付に目痕がある。９は須恵器坏蓋である。

土器溜まり SX01 出土遺物（Fig.29―1 ～ 12, Fig.30―13 ～ 23、Fig.31―24 ～ 28）器種には甕、壺、高坏、蓋、鉢、支脚がある。甕は長胴形と短胴形がある。口縁部はくの字状を呈し端部がわずかに跳ね上がり気味のものもある。底部は平底またはわずかに上げ底である。
壺には長頸壺、無頸壺、直口縁壺、袋状口縁壺がある。８～１０は鋤先口縁丹塗り壺である。９～１１は鋤先口縁で外面には丹塗りを施す。１２・１３・１４は丹塗りの直口縁の壺で、１２は頸部外面に三角突帯を貼り付け、その下位に径１．５㎝の穿孔がある。１３・１４は同一個体で外面に粗いハケメを施す。１５～２０は袋状口縁壺で丹塗りであるが１６は胎土の上半下半に変化がみられ上半は桃色を呈していることから頸部以上の胎土に顔料が練り込まれている可能性がある。１４・１５・

Tab. 2 有田遺跡第 88 次調査掘立柱建物一覧表

建物名称	方位	身舎規模	桁行（m）	梁行（m）	庇（cm）	床面積（㎡）	柱穴堀方形状	長径（ｃｍ）	短径（ｃｍ）	柱径（ｃｍ）	出土遺物	備考
ＳＢ０１	N 10° E	2 × 3	7.86	3.5	東西 1.7	27.51	隅丸長方形	78	54	18 ～ 20		
ＳＢ０２	N 15° E	2 × 5	8.04	3.96	東西 1.9	31.8	隅丸長方形	65 ～ 76	50 ～ 60	18 ～ 20		
ＳＢ０３	N 10° E 40	2 × 3	5.6	4	―	22.4	隅丸長方形・不整円形	48 ～ 72	48 ～ 58	16 ～ 20		
ＳＢ０４	N 17° E	2 以上× 1 以上	3.14 以上	4.4 以上	―	―	隅丸長方形	80 ～ 114	60 ～ 70	18 ～ 20		南側境界地に在り。全体形不明
ＳＢ０５	N 14° E	1 以上× 4	8.24	3.6 以上	―	―	隅丸長方形・円形	46 ～ 68	40 ～ 52	18		東側境界地に在り。全体型不明
ＳＢ０６	―	1 以上× 1 以上	2.5 以上	1.7 以上	―	―	隅丸長方形・隅丸方形	75	50 ～ 72	18 ～ 20		遺構検出に課題あり
ＳＢ０７	―	2 以上	4.5 以上	―	―	―	隅丸長方形	78 ～ 95	―	20		西側境界地に在り。全体形不明

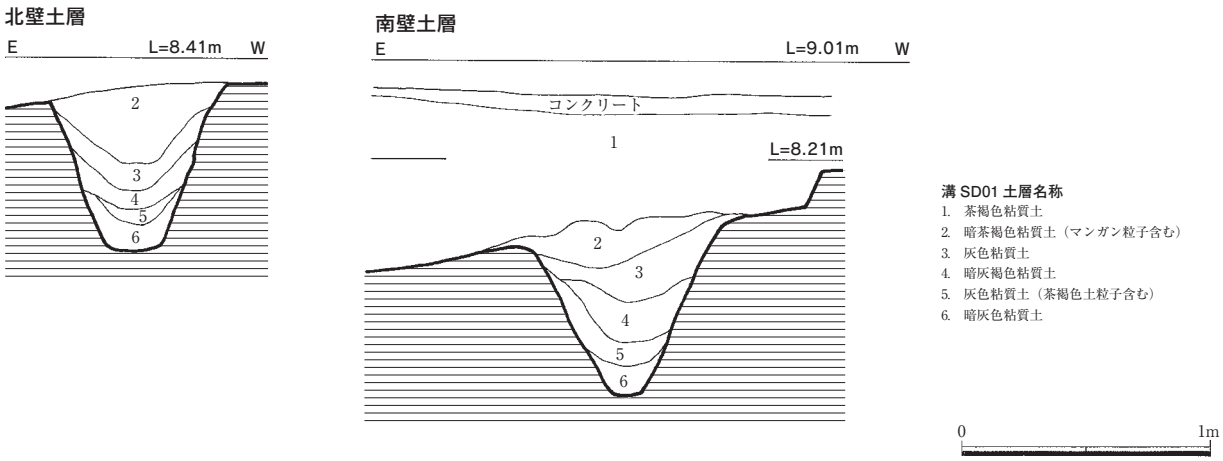


Fig. 26 溝 SD01 土層図
（縮尺 1/30）

２０の外面にはヘラミガキがみられる。２４は土師溜まりの中央付近に鎮座していた丹塗り壺で口縁を欠いている。頚が非常に細い壺で外面は丁寧にヘラミガキが行われている。２１～２３は丹塗りの高坏で鋤先口縁部を有している。２４は蓋形土器で口縁部付近に径０.５㎝の穿孔がある。２５の鉢は上げ底気味で体部は丸みをもっている。

包含層出土遺物（Fig.31―33 ～ 36）２９～３２は弥生時代前期の土器で黒色土層から出土した。２９・３０は口唇部に刻目がある。３１は甑で焼成後に底部穿孔を行っている。

３３・３４は須恵器坏蓋で３３には擬宝珠のつまみが付く。３４の天井部外面は三条のヘラ刻みが施される。３５は須恵器高坏で脚部に４ヶ所の透かしがある。３６は把手付小鉢と考えられ頚部に三角

溝ＳＤ０１（南から）

溝ＳＤ０１南側土層（北から）

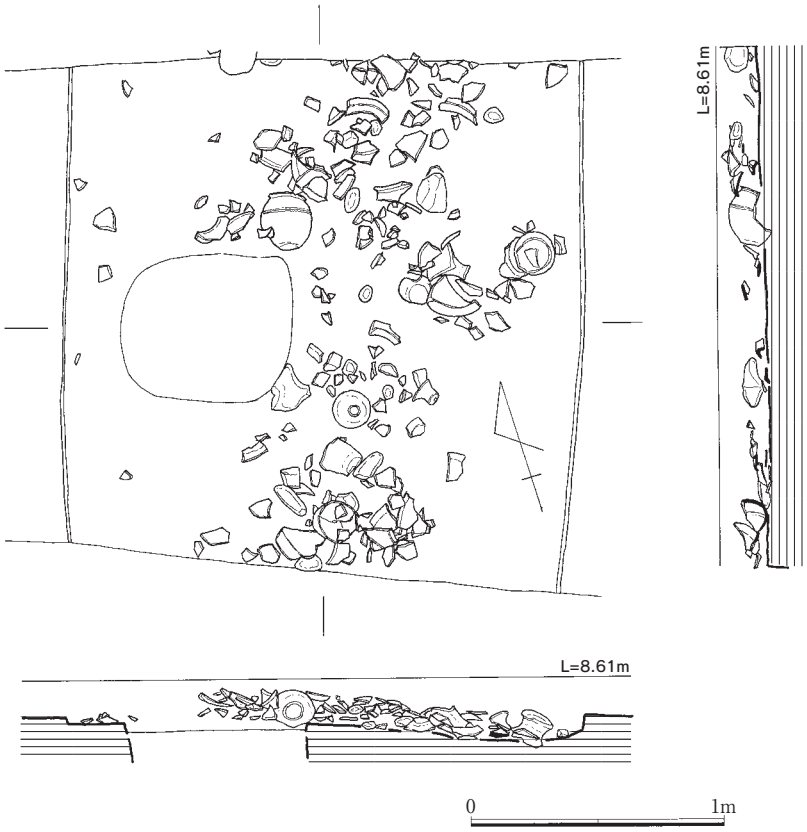


Fig. 27 土器溜まり SX01 実測図（縮尺 1/30）

突帯を貼り付け胴部上位に 6 条の波条文を施す。

3. まとめ

律令時代の掘立柱建物群は、有田一丁目の最高所を中心として展開しており、三本柱の柵、区画溝によって囲繞された側柱建物や、正倉と考えられる総柱建物が存在するが、これらは早良郡衙に関係する建物として認識されているが、建物や柵等に方向の違いがあることから時期的変遷があったと捉えられている。

今回の調査地点は、台地東側緩傾斜地にあり、標高は 8.8 mである。西側から第 6 次調査地点の標高は、約 14 m、第 66 次調査地点は約 13 m、第 7 次調査地点は約 11 mを測り、いずれの地点も区画整理によって削平を受けていたと云えども、各地点それぞれに掘立柱建物等の遺構を検出している。区画政以前の旧地形や等高線分布でみると第 6 次調査は 14 mライン、第 66 次調査は 13 mライン、第 7 次調査は 12 mライン、第 88 次調査は 10 ～ 9 mラインに位置していることから律令期に於いて既にこの緩斜面を階段状に造成して関連施設を構築していたものと推測できる。中世後半期に至っては、第 7 次調査で検出した池状遺構や区画溝などを考慮するとこの段々に造成された敷地を踏襲して、屋敷地として転用されてきたと考えられる。

土器溜まりＳＸ０１（西から）

土器溜まり遺物出土状況（東から）

土器溜まり土器出土状況（北から）

作業風景（南から）

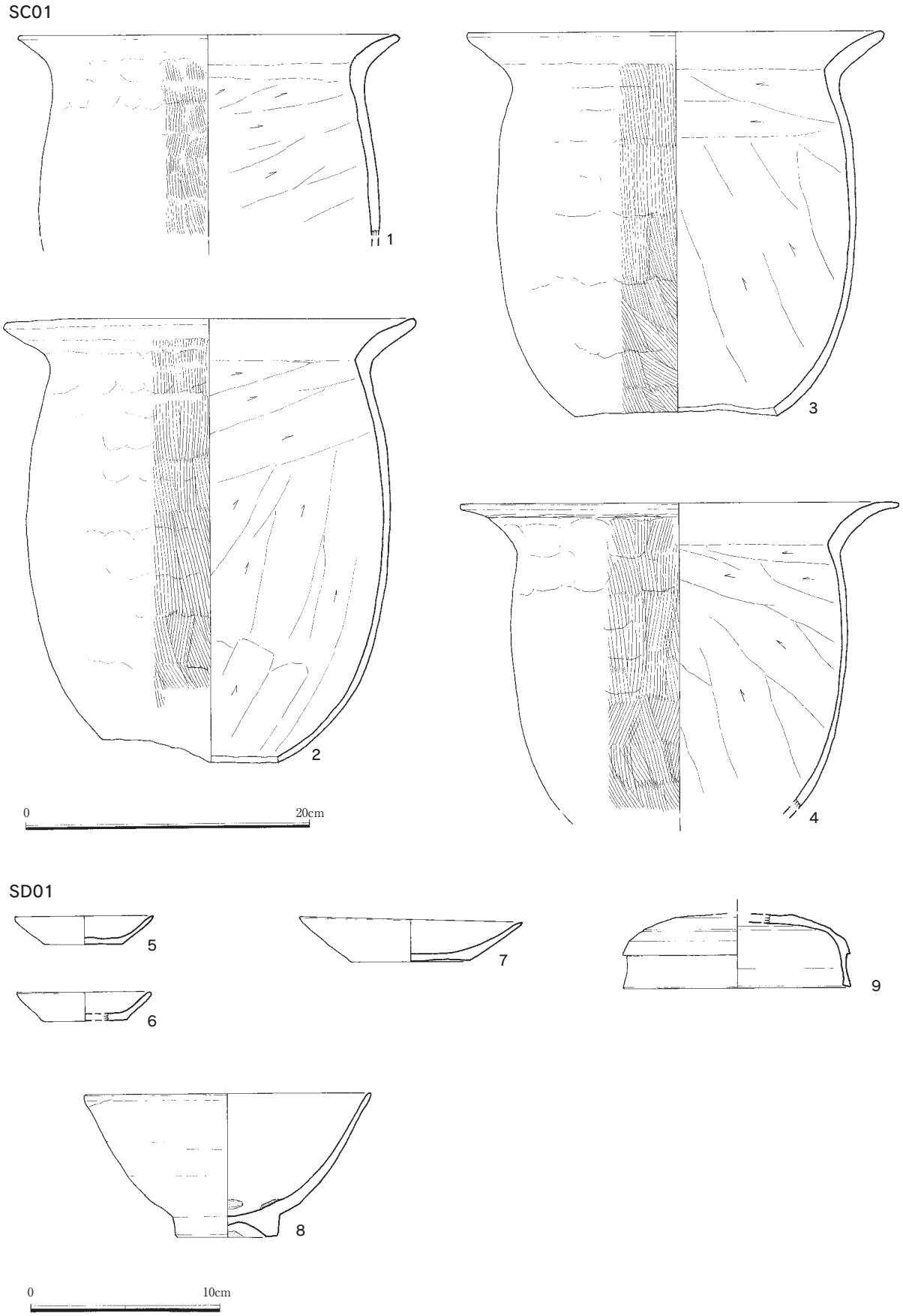


Fig. 28 住居跡 SC01、溝 SD02 出土遺物（縮尺 1/4、1/3）

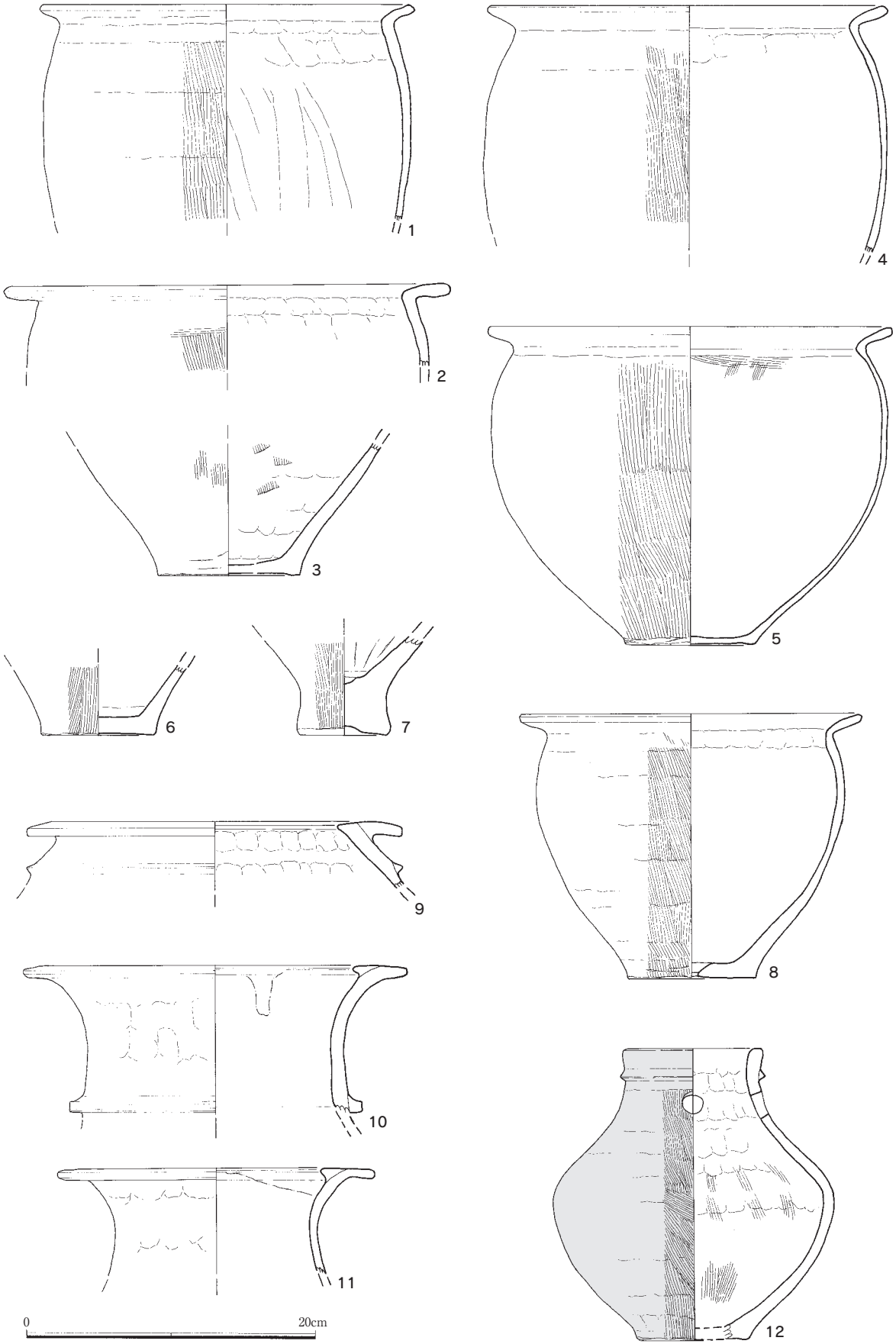


Fig. 29 土器溜まり SX01 出土遺物 1（縮尺 1/4）

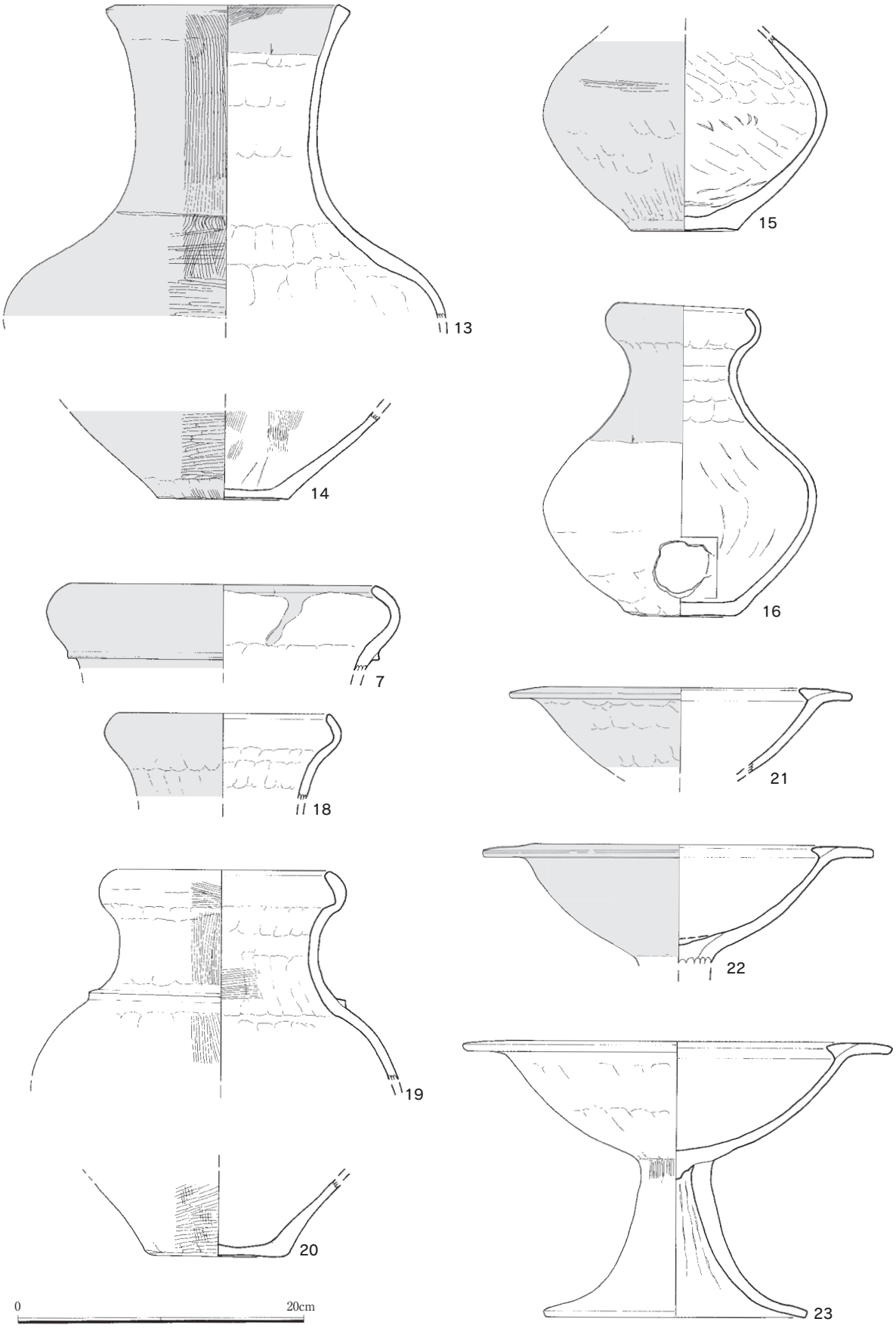


Fig. 30 土器溜まり SX01 出土遺物 2（縮尺 1/4）

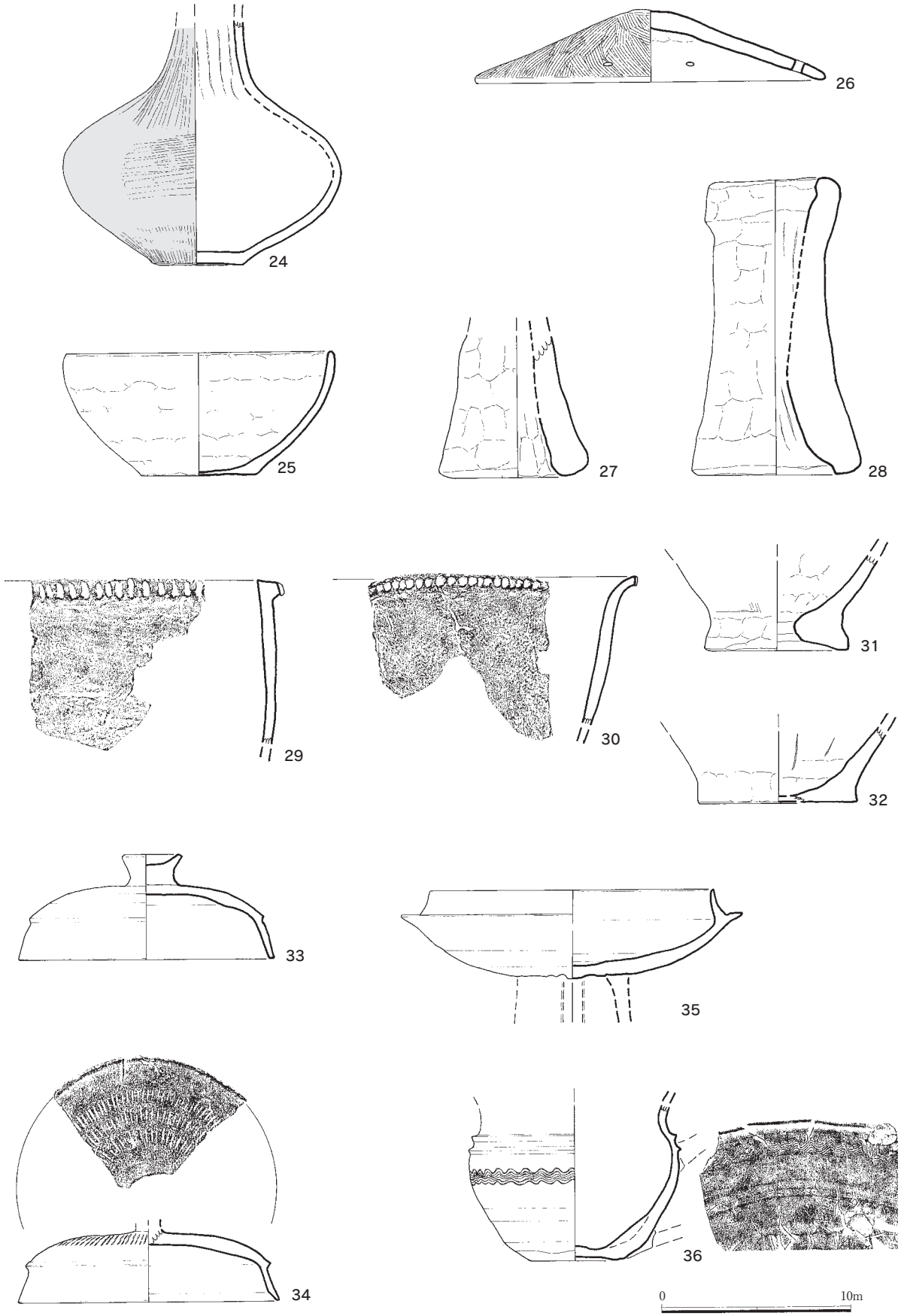


Fig. 31 土器溜まり SX01、包含層出土遺物（縮尺 1/3）

Tab. 4 有田遺跡第８８次調査遺構一覧表

遺構名称	旧名称	遺構の種類	形状		規模	出土遺物	時期	備　考
			平面形	断面形				
暗茶褐色粘質土	包含層	整地層	—	—	厚さ３０cm	弥生土器、土師器、須恵器		
黒色粘質土	包含層	整地層	—	—	厚さ１０cm	弥生土器甕	弥生時代前期	
溝ＳＤ０１	Ｍ２	溝	—	箱薬研堀	幅８０ｃｍ、深さ７５ｃｍ	瓦質土器、土師器皿・坏、李朝碗	中世末	
溝ＳＤ０２	Ｍ１	溝	—	レンズ状	最大幅１２０ｃｍ、深さ２ｃｍ	土師器片	不明	
溝ＳＤ０３	Ｍ３	溝	—	Ｕ字形	最大幅２８ｃｍ、深さ５ｃｍ	土器片	不明	
溝ＳＤ０４	Ｍ４	溝	—	Ｕ字形	最大幅３０ｃｍ、深さ１０ｃｍ	土器片	不明	
溝ＳＤ０５	Ｍ５	溝	—	Ｕ字形	最大幅３５ｃｍ、深さ１０ｃｍ	土器片	不明	
住居跡ＳＣ０１	J1	住居跡	隅丸方形	逆梯形	長さ２２０ｃｍ、幅２１０ｃｍ、深さ９ｃｍ	土師器甕	奈良時代	
土器溜ＳＸ０１	土器溜まり	土器溜まり	不明	不明	東西方向１８０ｃｍ、南北方向２００ｃｍ以上	弥生土器甕・壺・高坏・鉢	弥生時代中期末～後期初頭	
掘立柱建物ＳＢ０１	—	建物	長方形	—	２間×３間		奈良時代	庇付
掘立柱建物ＳＢ０２	—	建物	長方形	—	２間×５間		奈良時代	庇付
掘立柱建物ＳＢ０３	—	建物	長方形	—	２間×３間		奈良時代	
掘立柱建物ＳＢ０４	—	建物	長方形	—	２間×１間以上		奈良時代	
掘立柱建物ＳＢ０５	—	建物	長方形	—	１間以上×３間		奈良時代	
掘立柱建物ＳＢ０６	—	建物	長方形	—	１間以上×１間以上		奈良時代	
掘立柱建物ＳＢ０７	—	建物	長方形	—	１間以上×１間以上		奈良時代	

Fig. 32 有田地域の律令時代建造物配置図（縮尺 1/2,000）

第 6 章　有田遺跡第 89 次調査

1. 立地と概要

(1)　立　地

第 2 章の第 85 次調査報告の項で述べた通り、当該地は有田小田部台地の最北端の舌状台地上に位置する。標高は 10.5m を測り、旧字名は「松尾原」である。台地の両側には狭長な開析谷が存在する。この地域では、これまで 12 カ所の発掘調査が行われているが、全体的に台地削平が著しい地域でもある。北側に隣接して平成 13 年度に第 202 次調査が行われおり、当該地と関連する遺構が発見されている。

(2)　概　要

先述したとおり、当該地は既に 4 区画の宅地造成が行われており、その一区画については第 85 次調査として発掘調査を実施した。第 89 次調査は、残り三区画について発掘調査をおこなったものである。当該地の標高は約 10m を測り、表土の盛土は、厚さ約 60cm であった。遺構面は住宅基礎や大規模な廃棄物壙が存在するため遺構の遺存状態は悪い。検出した主な遺構は、古墳時代住居跡 1、周溝遺構 1、火葬墓 1 である。第 85 次調査において検討課題であった柵遺構については、連続性が見られないことが判明した。

2. 遺構・遺物説明

(1)　各遺構

住居跡 SC01（Fig.36）大きな攪乱壙に削平を受けて遺存状態は悪い。平面形は方形を呈し、周壁

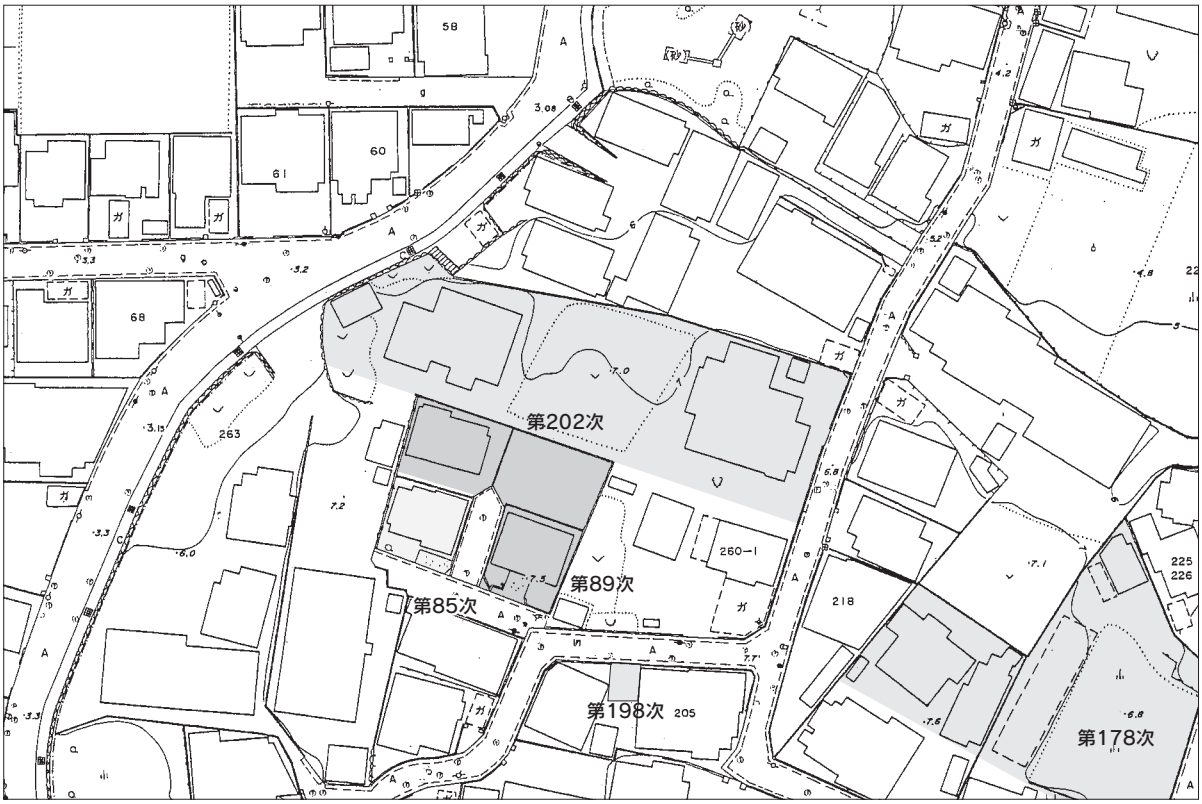
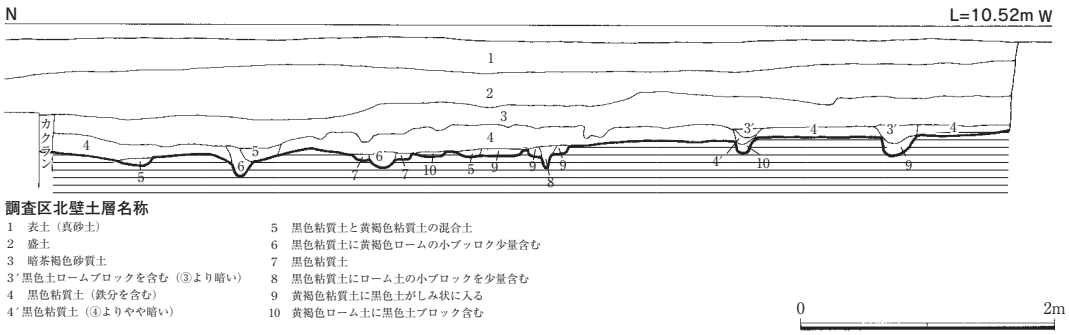


Fig. 33 第 89 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

Fig. 34 第 85・89 次調査遺構配置図（縮尺 1/200）



調査区北壁土層名称

1　表土（真砂土）
2　盛土
3　暗茶褐色砂質土
3′黒色土ロームブロックを含む（③より暗い）
4　黒色粘質土（鉄分を含む）
4′黒色粘質土（④よりやや暗い）
5　黒色粘質土と黄褐色粘質土の混合土
6　黒色粘質土に黄褐色ロームの小ブロック少量含む
7　黒色粘質土
8　黒色粘質土にローム土の小ブロックを少量含む
9　黄褐色粘質土に黒色土がしみ状に入る
10　黄褐色ローム土に黒色土ブロック含む

Fig. 35 調査区北壁面土層図（縮尺 1/60）

第 89 次調査全景（東から）

の一部に周溝が巡る。南北長は、約 3.9m、東西の現存長は 2.5m を測る。壁の高さ約 50cm、周溝幅 14cm、深さ 0.8cm を測る。主柱は 4 本と考えられ、内 P1・P2 の 2 本を確認した。堀方平面形は円形を呈し、直径 30 ～ 35cm、深さ約 30cm を測る。出土遺物には、土師器甕･壷･高坏、須恵器坏身･蓋･高坏・壷などがある。

周溝墓 SO01（Fig.37）大規模な攪乱土壙及び削平のため周溝のみが存在した。当初は古墳の周溝と考えていたが、先述した様に第 202 次調査に於いて周溝墓が 3 基発見されており、その内の SO06 と称する周溝墓の一部が当該調査の周溝に接続することが判明した。

周溝全形は楕円形に近い不整円形をなし、主体部は不明である。周溝の最大幅は、160cm、深さ約 50cm を測り、断面形は船底状を呈する。周溝内部の直径は、最大径で約 12m である。第 202 次調査検出の周溝を接合して観察すると周溝全体形は楕円形状を呈している。

火葬墓 SR01（Fig.38）境界地にあり、しかも攪乱を受けており、全容は不明である。平面形が不整形な土壙底面に須恵器杯蓋が置かれ、その上部には蓋に用いられたと考えられる土師器の甕が伏せられた状態で出土した。甕は口縁部しか遺存していないが、内部に炭化物などが存在したため火葬墓とした。

(2) 出土遺物

住居跡ＳＣ０１出土遺物（Fig.39―1～11）住居跡床面から須恵器･土師器が出土した。1 ～ 4 は須恵器の坏蓋、6 は高坏、7 ～ 9 は壺で 7 は短頸壺である。7・9 の外面にはカキ目が施されてい

住居跡SC01（東から）

住居跡SC01遺物出土状態（南から）

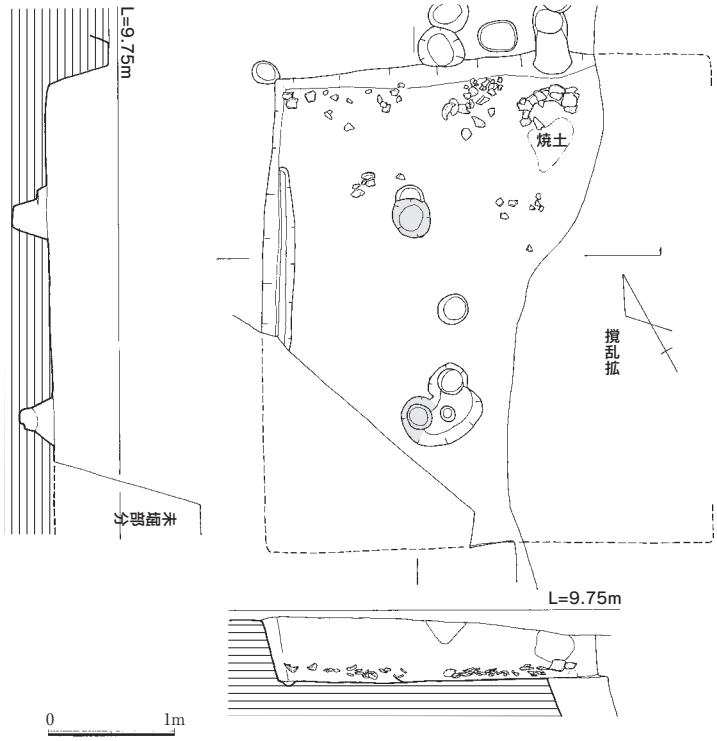


Fig. 36 住居跡 SC01 実測図（縮尺 1/60）

る。９の肩部には耳が付いている。１０・１１は土師器で10は短頸壺、１１は甕である。内面はタテ方向のヘラケズリが施されている。

火葬墓ＳＲ０１出土遺物（Fig.39―12･13）１２は須恵器の蓋であるが、天井部を欠失している。肩部に稜をもち、口縁端部は断面がコの字状に近い。１３は土師器甕で、胴部内面はタテ方向のヘラケズリを施す。８世紀後半代の時期が考えられる。

３．まとめ

当該地及び同じ区画内の第８５次調査地点は、建売住宅用地として宅地区画されていたため解体処理の残滓を埋めた撹乱壙掘削などにより著しく削平を受けて、遺構として多くの情報を得ることができなかったが古墳時代の住居跡と墳丘墓などを検出することができた。墳丘墓については、当初は円墳の周溝と判断していたが当該調査以降に周辺地域の発掘調査が進行し、墳丘墓の発見が相次いでいる。第１７５次調査では、墳丘墓ＳＲ１２１、ＳＲ１３０の主体部石棺から人骨とともに副葬品として勾玉や小型仿製鏡一面が出土している。当該地の北側に隣接した第２０２次調査では、墳丘墓が３基検出されており、そのうちの円形周溝墓ＳＯ０６が当該地の周溝ＳＯ０１の一部であることが判明した。第２０２次調査の方形周溝墓ＳＯ

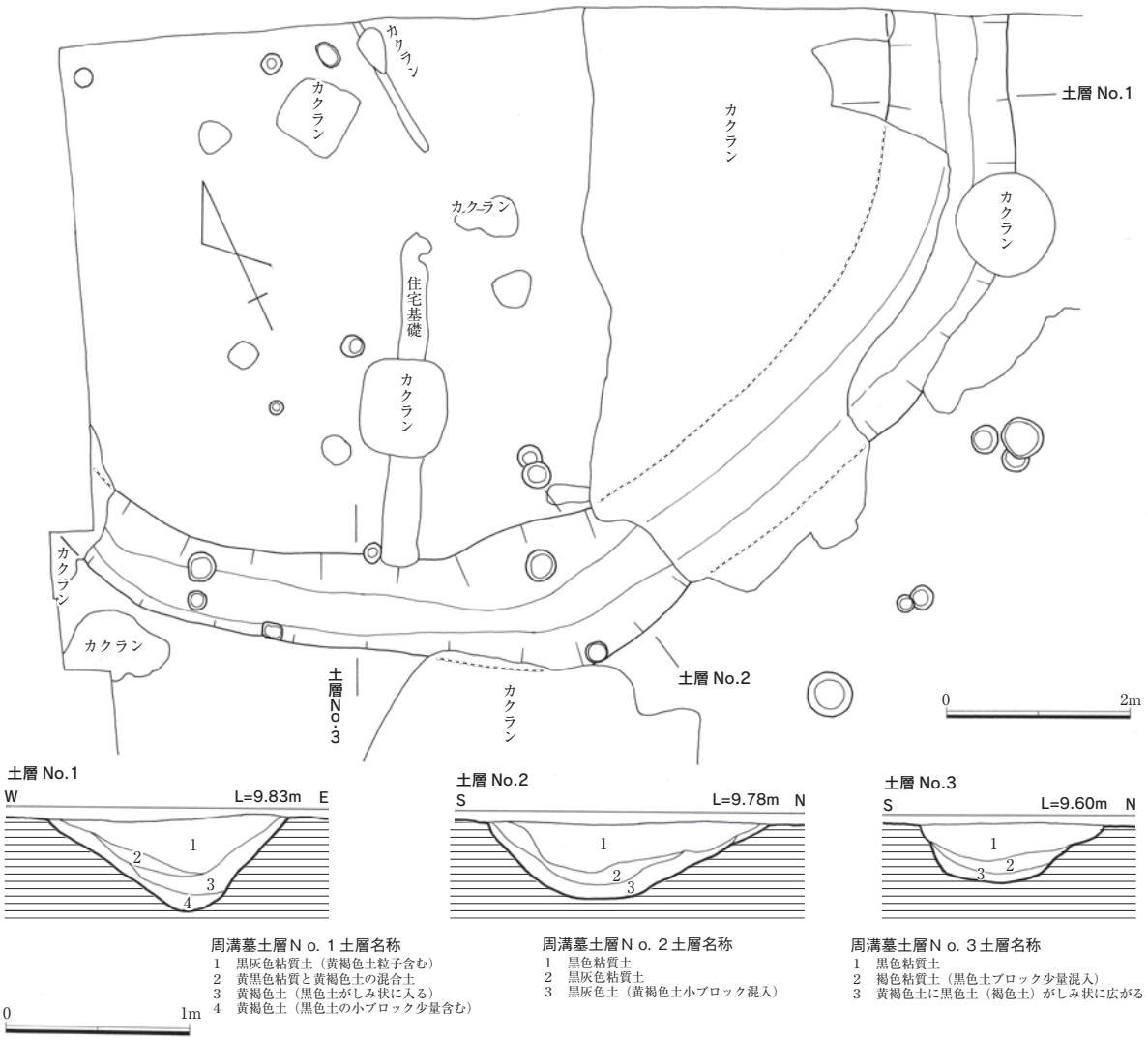
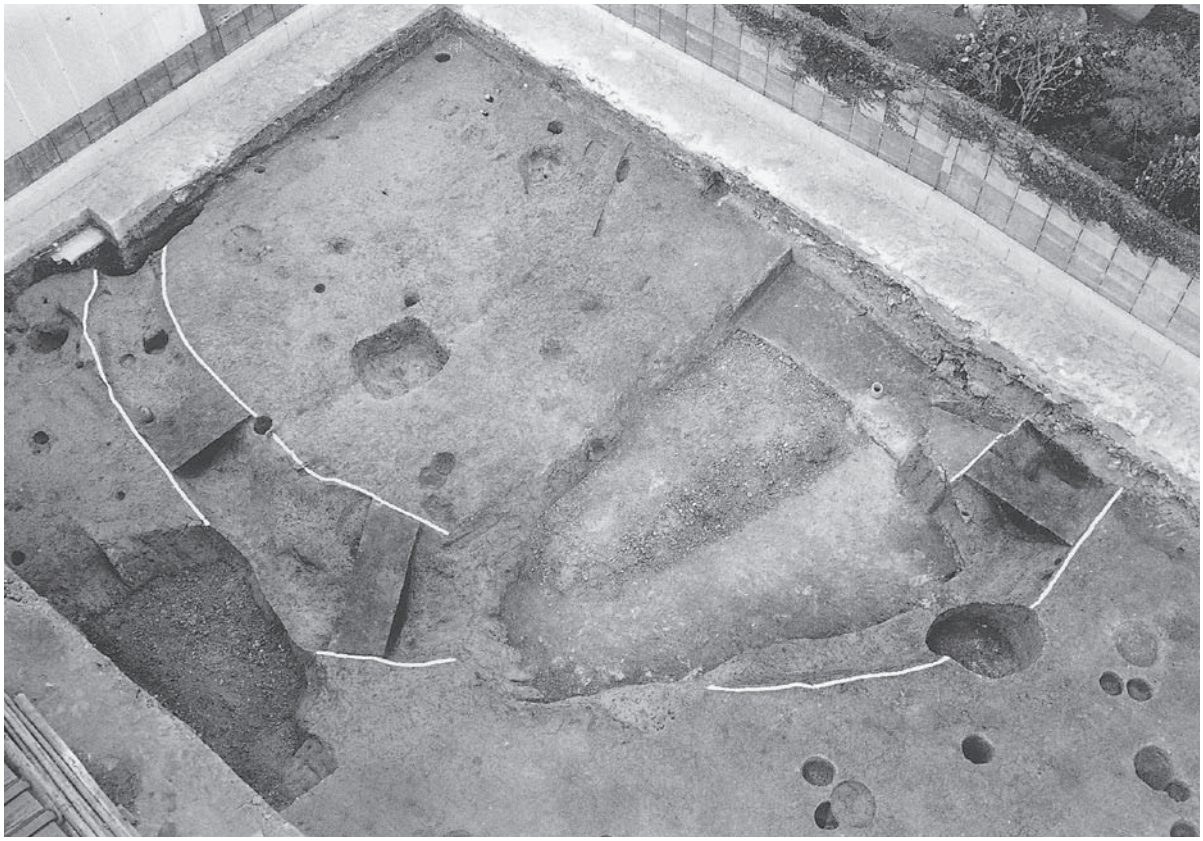


Fig. 37 周溝墓 SO01 実測図・周溝土層図（縮尺 1/80、1/40）



周溝墓 SD01（南東方向から）

周溝ＮＯ１土層（南から）

周溝ＮＯ２土層（東から）

周溝ＮＯ３土層（東から）

０１主体部の箱式石棺からも小型仿製鏡が出土している。これまでの調査において、墳丘墓の主体部には箱式石棺の他、木棺、土壙墓、石蓋土壙墓などもあるようであるが、石棺については、昭和４０年代の終わりにこの地域に１基発見されている。当時、石棺を原北中学校に移築保存した様であるが、現状は所在が知れない。実測図が残されており、機会を見て紹介したい。

この地域における周溝墓の分布状況は、現状では太閤道から北側に分布している。太閤道の南側には、松浦殿塚や筑紫殿塚などの有田古墳群が存在しており、これらとの相関関係についても検討していく必要がある。

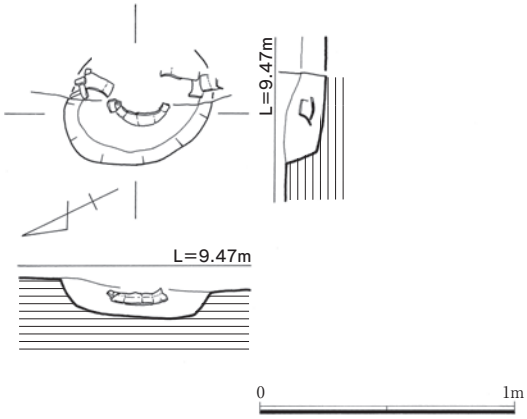


Fig. 38 火葬墓 SR01 実測図（縮尺 1/30）

火葬墓 SR01 上甕

火葬墓 SR01 完掘状態

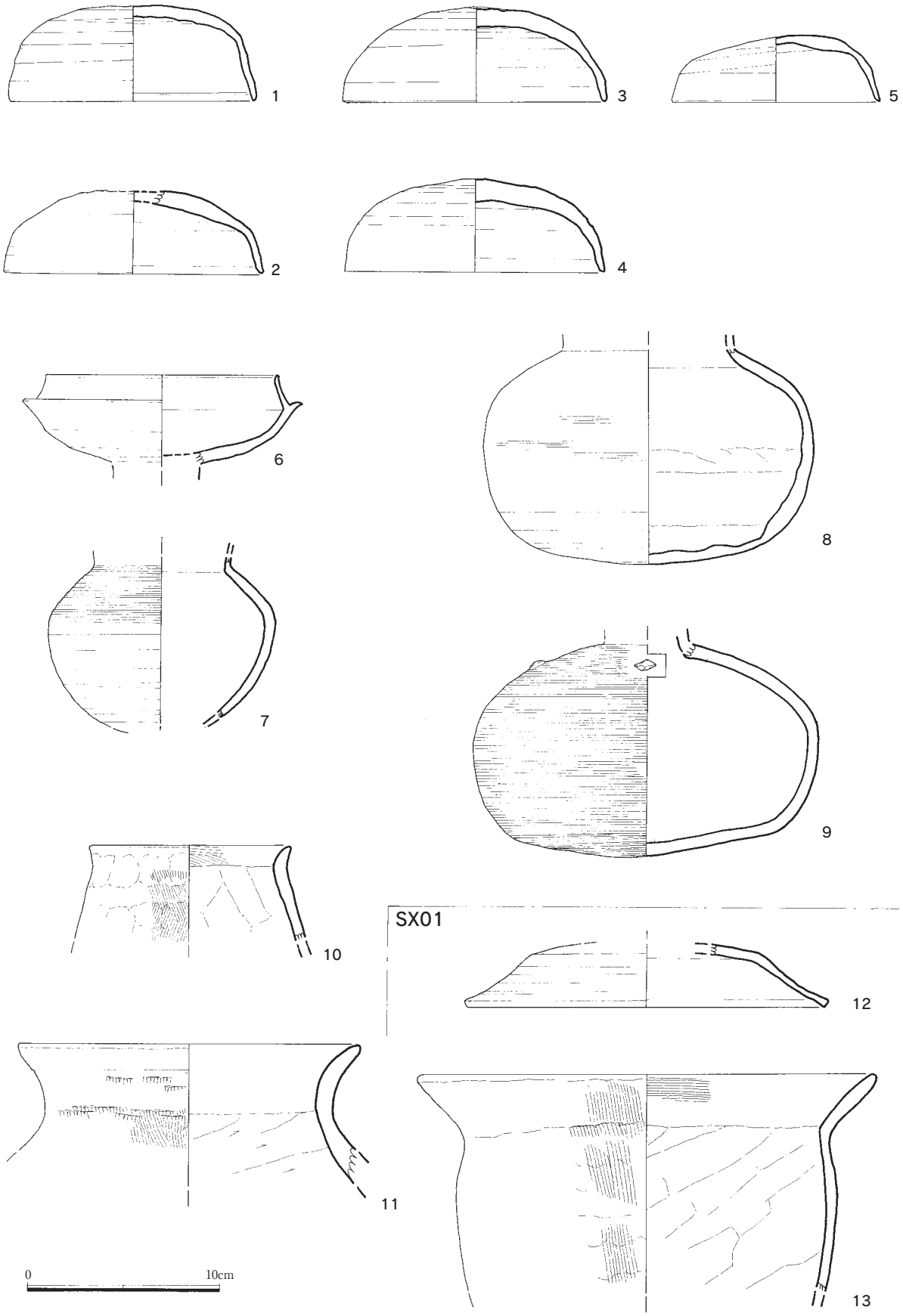


Fig. 39 住居跡 SC01 出土遺物（縮尺 1/3）

第 7 章　有田遺跡第 90 次調査（概報）

1. 立地と概要

(1)　立　地

当該地は有田小田部台地北側の八つ手状に分岐した舌状大地の西端台地上に位置する。当該地の東側には開析谷が接している。標高約 6m を測り、旧字名は「中薗」である。中世「牛尾文書」には「中薗」、「中薗屋敷」を大内氏郡代の大村興景が知行地として宛がわれており、この旧字名の「中薗」が相当するものと考えられる。

昭和 40 年代に区画整理によって削平を受けている。この地域では、発掘調査が集中的に行われており、一区画が丸ごと調査されるなど、この舌状大地における遺構構成の全容が明らかになりつつある。

(2)　概　要

既述したとおり、当該地周辺の発掘調査が進んでおり、これまでの調査では、弥生時代から戦国期までの遺構が発見されている。台地中央部では、弥生時代甕棺墓の他、中世屋敷跡を物語る区画溝や濠跡が存在する。また、東側緩斜面面では区画整理の削平を免れた古墳時代の住居跡群や、早良郡衙に関連する正倉と考えられる律令時代の総柱建物、それを囲繞する柵などが存在する。当該調査でも同様に古墳時代から中世後半期の遺構・遺物を発見した。

先述したとおり調査区東側に谷が接しており、調査においても谷およびそれを埋め立てた整地層を

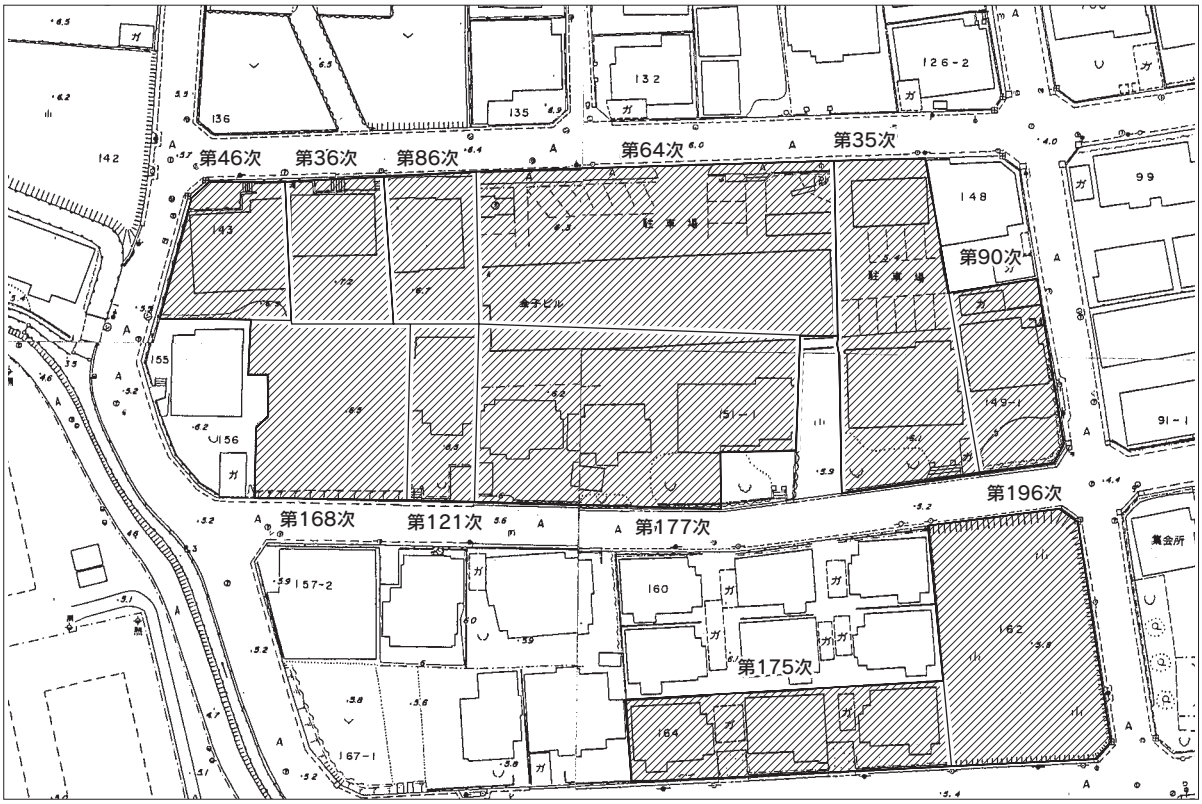


Fig. 40　第 90 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

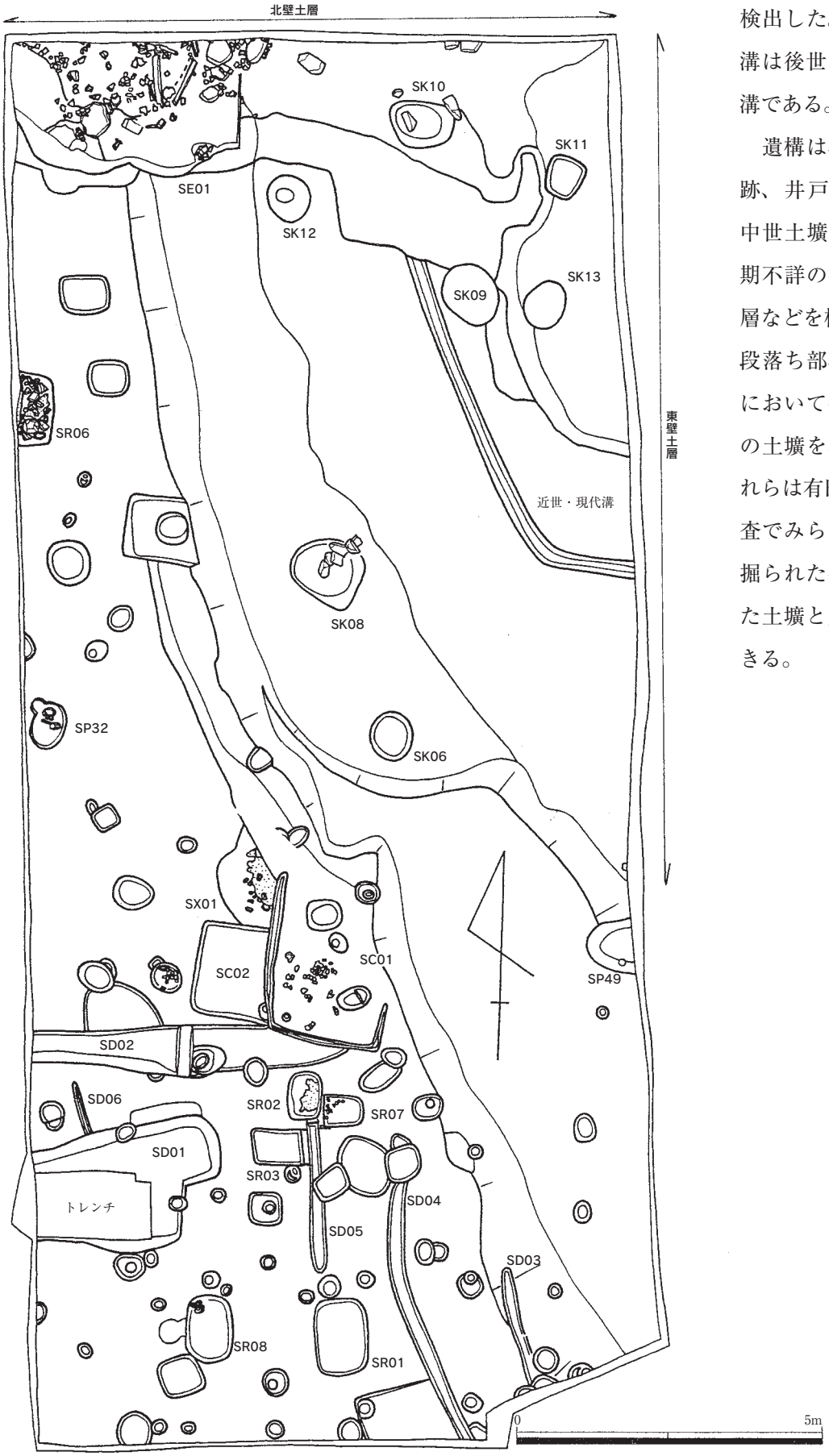
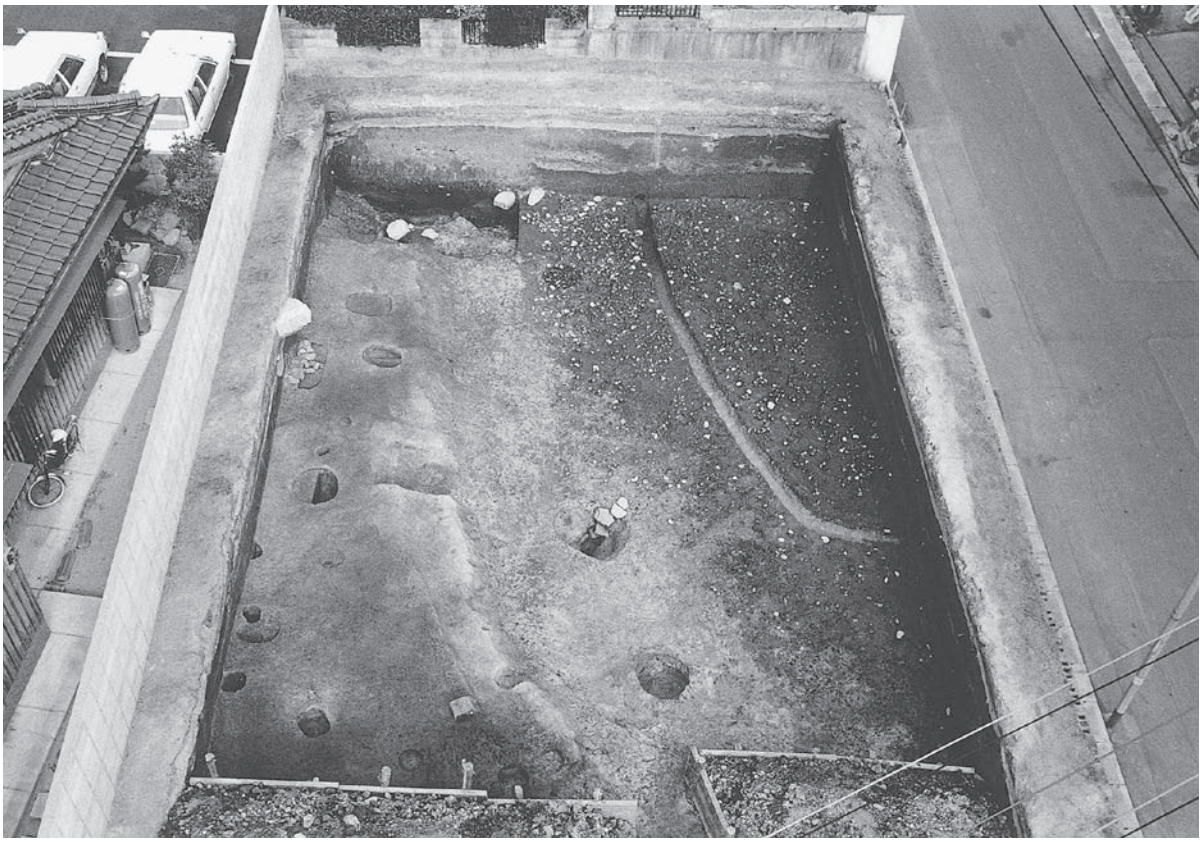


Fig. 41 第 90 次調査遺構配置図（縮尺 1/100）

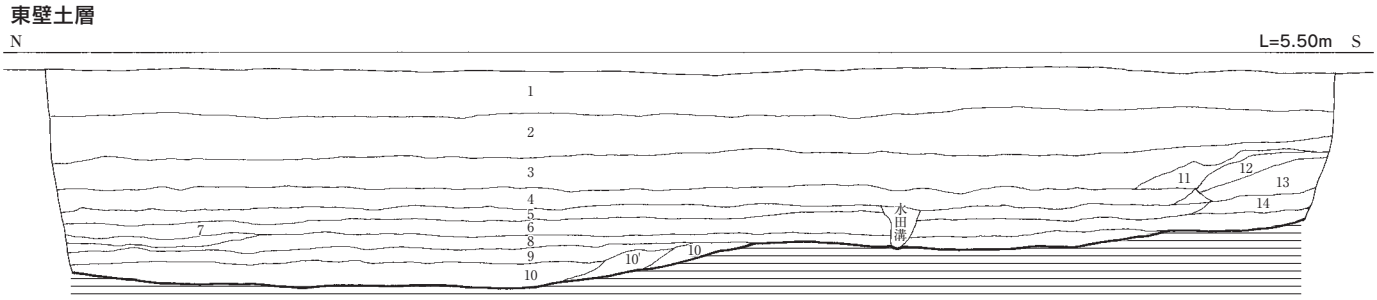
検出した。矩形に曲がる溝は後世の水田の給排水溝である。

遺構は、古墳時代住居跡、井戸又は池状遺構、中世土壙墓、火葬墓、時期不詳の溝跡、中世整地層などを検出した。また、段落ち部、すなわち谷部において多くの不整円形の土壙を検出したが、これらは有田遺跡第 81 次調査でみられた様に谷部に掘られた井戸機能を有した土壙と見なすこともできる。

第 90 次調査南側（北から）

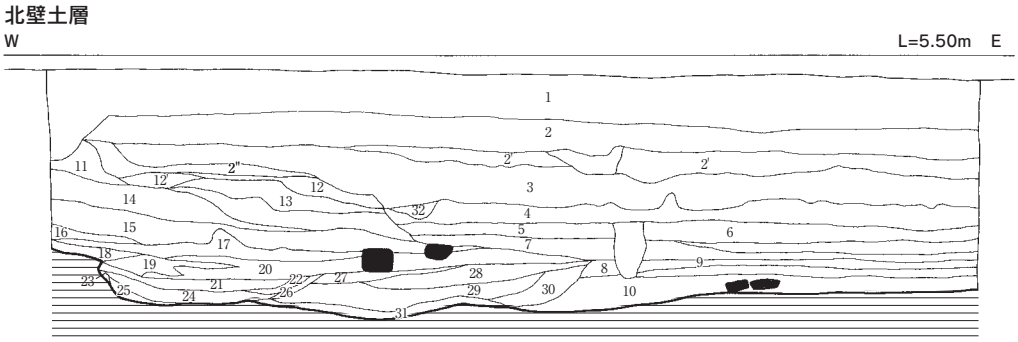


第 90 次調査北側（南から）



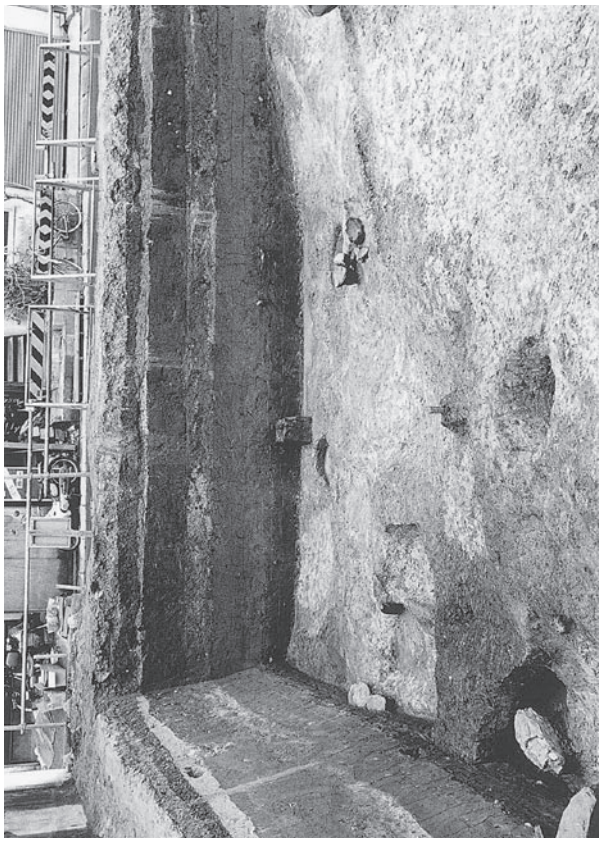
有田遺跡第９０次調査調査区
壁面土層名称

1 表土
2 客土 ＊2′2″も同じ
3 客土
4 暗灰色粘質土（旧耕作土）
5 黄灰色粘質土（旧耕作土床土）
6 灰色粘質土
7 黒灰色粘質土
8 黒褐色粘質土
9 黒色粘質土
10 茶褐色粘質土
11 赤褐色粘質土
12 茶褐色粘質土
13 灰色粘質土
14 黒褐色粘質土
15 淡黒褐色粘質土
16 黒褐色砂質土
17 黒色粘質土
18 茶褐色砂
19 灰白色～青灰色砂
20 黒灰色粘質土
21 黒褐色粘質土
22 黒色粘質土
23 灰色砂
24 黒灰色砂質土
25 青灰色砂質土（青灰色粘土ブロック混入）
26 黒褐色砂質土
27 灰白色砂
28 灰褐色粘質土
29 黒灰色粘質土
30 黒灰色砂
31 青灰色粘土と黒色砂の混合土



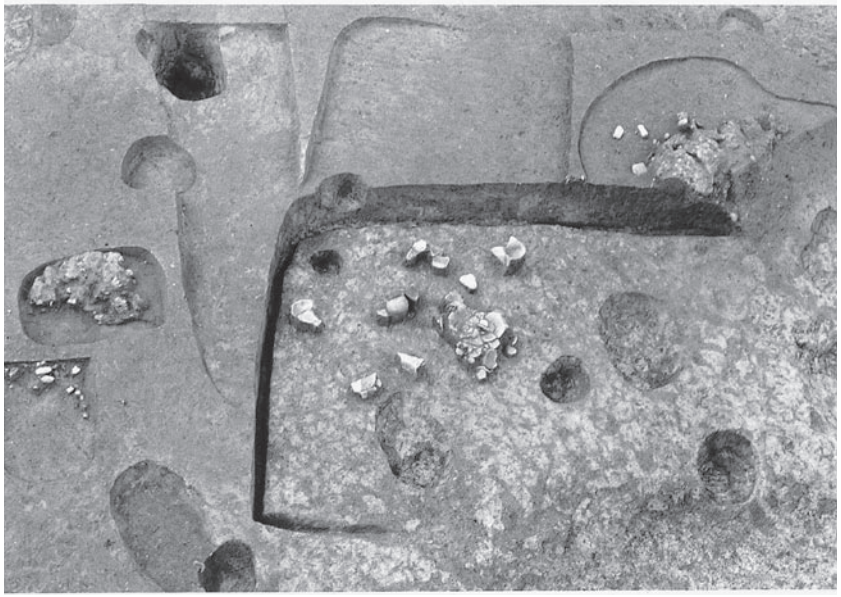
0 2m

Fig. 42 調査区北・東壁面土層図（縮尺 1/80）



調査区東側壁面土層①（西から）

調査区東側壁面土層②（西南方向から）



住居跡ＳＣ０１（東から）

土壙墓ＳＲ０８（東から）

土壙墓ＳＲ０１

土壙墓ＳＲ０８　副葬品出土状況

井戸SE01（南から）

井戸SE01土層（南から）

火葬墓SR06（東から）

火葬墓SR02（西から）

第８章　有田遺跡第 91 次調査

１．地形の概要

(1)　立　地

調査対象地は福岡市早良区小田部３丁目に所在する。調査は昭和 59 年４月 25 日～昭和 59 年５月 11 日まで実施し、調査面積 186㎡を測る。有田・小田部台地の縁辺は幾つもの谷が複雑に入込む樹根状の複雑な地形を示し、調査地は室見川を望む西向きの傾斜面端部に立地する。周辺では 59 次･60 次･150 次調査が実施され、弥生時代の集落と中世の溝などが確認されている。

(2)　概　要

現在１ｍ弱の盛土がなされ平坦になっているが遺構面は標高 5.25 ｍを測る。現況では西側の道路との差は 65 ｃｍで、この道路付近で川に向かって大きく地形が変化すると思われる。土層は第１層－ 50cm 弱の盛土、第２層－層厚 20 ｃｍを測る黒灰色粘質土で上部は耕作土である。第３層－層厚 10cm 前後を測る茶褐色土、第４層－数ｃｍの茶褐色粘質土で東側では第３層と第４層が分離できない。遺構はこの４層から掘り込まれている。第５層－鳥栖ローム と八女粘土の境界が基盤層となる。４層

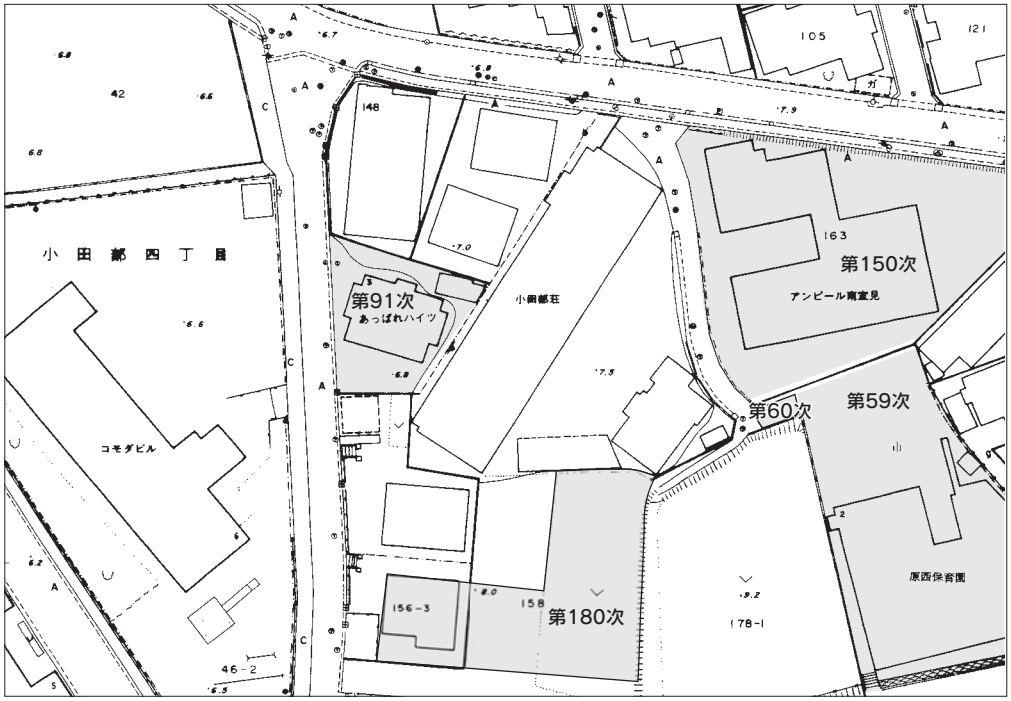


Fig. 43　第 91 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

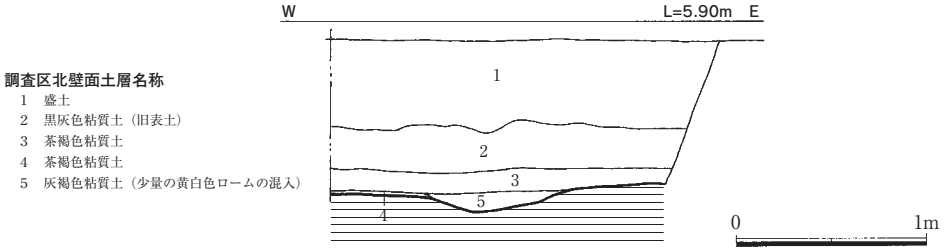


Fig. 44　調査区壁面土層図（縮尺 1/80）

が欠如する箇所はこの層から遺構が掘り込まれる。遺構は溝と土坑、ピットであるが遺構密度は低く疎らである。

2. 遺構と遺物

遺構は北東から南西方向に伸びる溝１条と径 1.0 ～ 1.1 ｍを測る円形土壙、小ピット 15 個である。溝は幅 60 ～ 80cm、深さ 10cm、現存長 12.8m を測り、断面は浅い皿状を呈する。床面はほぼ平坦である。覆土は茶褐色粘質土で少量の黄白色ローム層を含んで全体に締りは無い。覆土には 5cm 前後の小礫を多く含み、弥生式土器、須恵器、青磁、白磁、備前焼製品などの破片が少量混在している。土坑は径 1.0 ～ 1.1 ｍ、深さ 0.5 ｍ弱を測る。覆土は上層が黒褐色粘質土、下層が黒色、黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。ピットは深さ５ｃｍ前後のものが多く、規則的な配列は無く柱穴とは思えない。

3. まとめ

今回の調査は有田・小田部台地の先端部に位置することから遺構は極めて少なく、その密度は希薄であった。溝からは小礫に混在して青磁、白磁、備前陶器等も出土していることから中世の所産と考えられる。円形土坑はその形状から井戸の可能性がある。遺物は出土していないが溝と同時期と思われる。

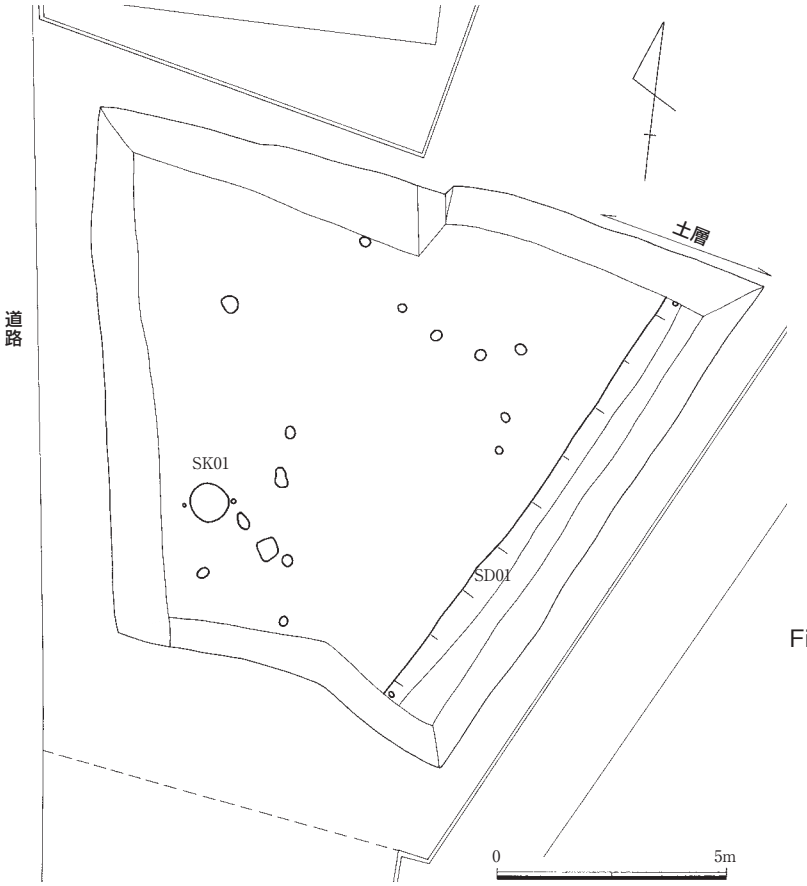


Fig. 45 第 91 次調査遺構配置図（縮尺 1/200）

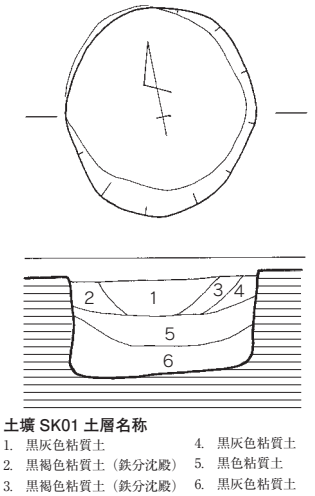


Fig. 46 土壙 SK01 実測図（縮尺 1/40）

第91次調査全景（西から）

土壙ＳＫ０１

北壁面土層（南から）

溝ＳＤ０１（北から）

第９章　有田遺跡第 92 次調査

1. 立地と概要

(1)　立　地

当該地は有田小田部台地の最高所から北側に下った旧小田部集落にあって、標高約１１ｍを図る地域に所在する。当該地の西方向からは谷が切り込んでおり、谷頭の上位に位置する。

昭和３０年代には住宅が存在したようであるが、区画整理によって畑に変更されている。旧字名は「下後」に相当する。

この地域では、これまで６カ所の発掘調査が行われており、弥生時代から中世後半期の遺構・遺物が発見されているが、とくに当該地の北側では東西方向の古代幹道が確認されており、当該地は額田駅に向かうために南北方向に折れて南下する道筋に当たっている。

(2)　概　要

土層を観察すると第１層は客土、第２層の暗褐色土が耕作土である。第３層は暗茶褐色土又は黒褐色粘質土で、この層は東から西方向に、すなわち谷方向に厚く堆積しており、元来の表土と考えられる。遺構は、ローム層上面にて検出した。主な遺構は、溝２条、土壙３である。２条の溝は北北西方向に平行しており、一対をなすものと考えられる。

2.　遺構・遺物説明

(1)　各遺構

土壙（Fig.48）は、溝に付属するものを含めて４か所検出した。そのうち三か所を報告する。

土壙ＳＫ 01（Fig.50）平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は舟底状である。覆土は暗茶褐色土を主体とする。長さ 180 ｃｍ、幅 78 ｃｍ、深さ 42 ｃｍを測る。

土壙 SK02（Fig.50）溝 SD02 に切られている。平面形は楕円形、断面形は二段掘りになっており、

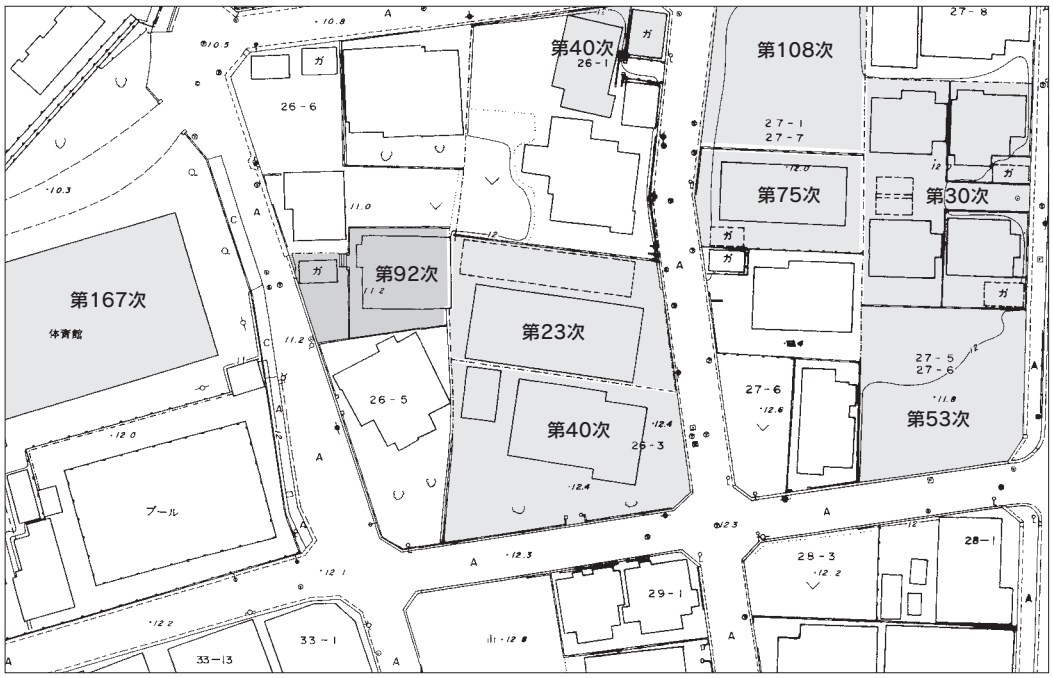


Fig.　47　第 92 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

Fig. 48 第 92 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）

第 92 次調査全景（北から）

一段目は擂り鉢状で、二段目は筒状である。中央部分の平面形が円形であることや、中央が最も深いことから柱穴の可能性がある。

土壙 SK03（Fig.48）溝 SD01 と切りあい関係にあるが、先後関係は不明である。平面形は隅丸長方形を、断面形はレンズ状を呈する。覆土が同一であることから溝 SD01 に付属することも考えられる。長さ約 20m、幅約 82m、深さ 15m を測る。

溝状遺構（Fig.48）は 2 条検出した。北北西方向に平行して設けられており、一対をなすものである。それぞれの溝間は、内側で 4m を、中心線からの間隔では、約 4.5m を測る。

溝 SD01（Fig.48･51）最大幅 80cm、深さ約 20cm を測る。断面形は舟底状又は、レンズ状を呈しており、底面に流水があったことを示す切れ込みがある。覆土は黒色粘質土である。

溝 SD02（Fig.48･51）最大幅 90cm、深さ約 20cm を測る。断面形は溝 SD01 同様である。覆土は黒色粘質土を主体としている。

(2) 出土遺物

全体に遺物の出土量が少なく、又、細片のため時期を決めることできない。

3. まとめ

当該地は、北側の第 3 次調査や第 216 次調査で検出した古代官道の額田駅に至る南北方向の道筋に接する位置にあるが、それに関連する遺構は発見できなかった。

溝 SD01・02 は、約 4m の間隔をおいて並行して構築されており、一対を為すことから道路側溝と判断した。この道は概ね南北方向で、古代官道と同じ方向を示しているが、古代官道そのものは、規模において当該地の道路規模を上回っていることから現道に重複して存在しているものと考えられる。官道の変遷をも含めて今後の調査に期待したい。

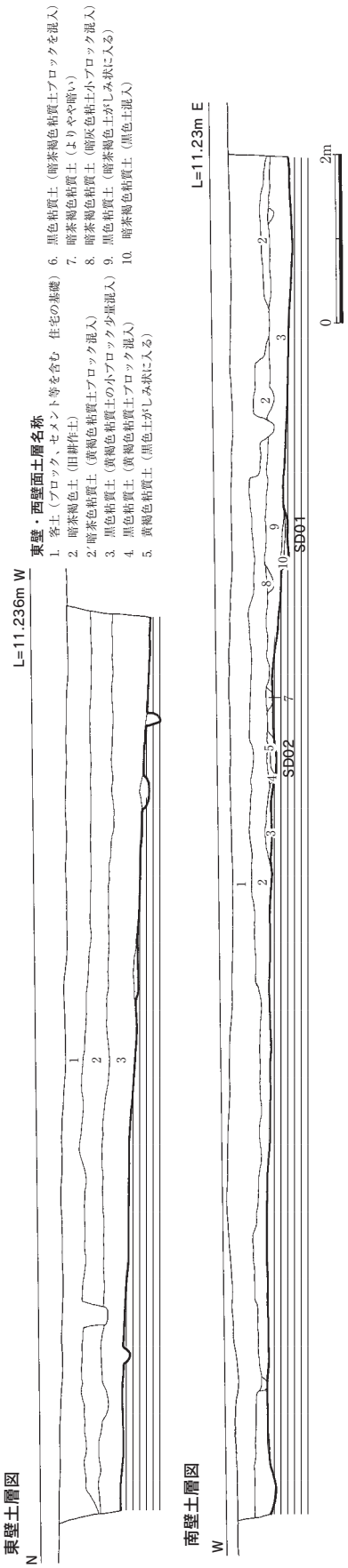


Fig. 49 調査区壁面土層図（縮尺 1/80）

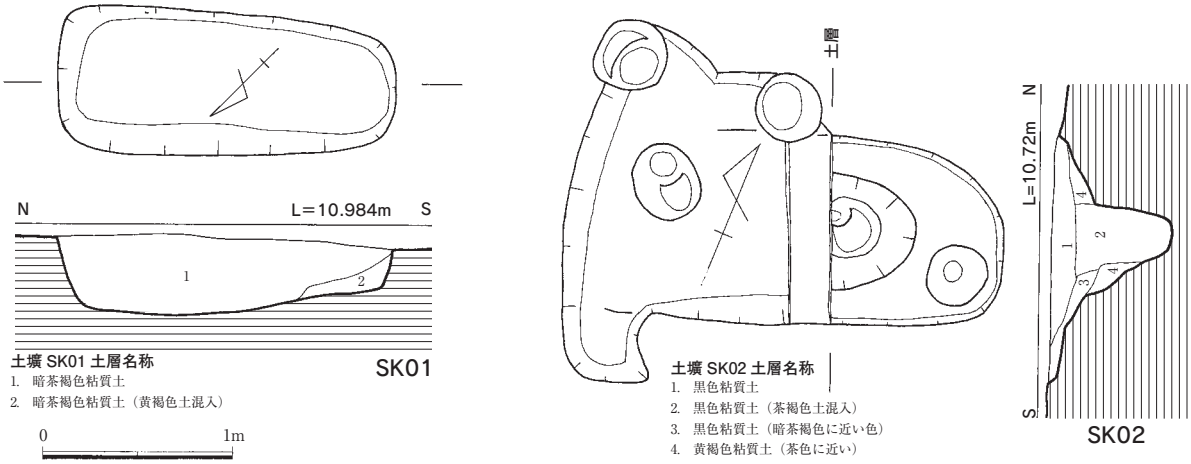


Fig. 50 SK01・02 実測図（縮尺 1/40）

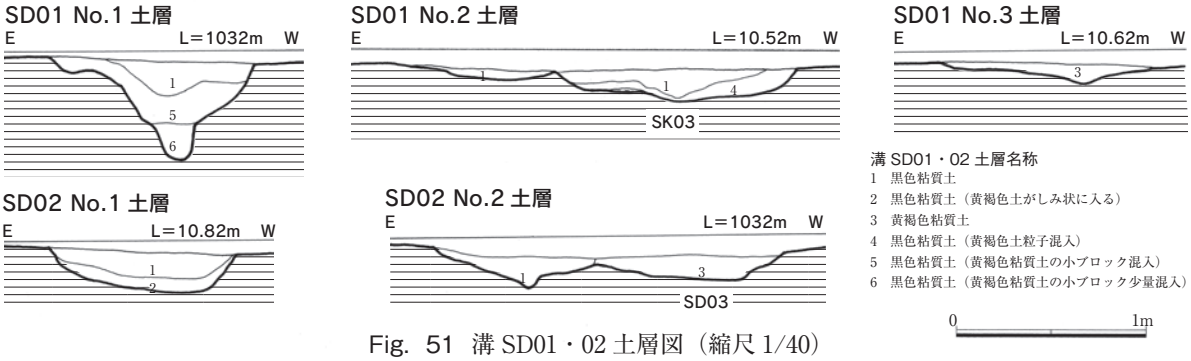
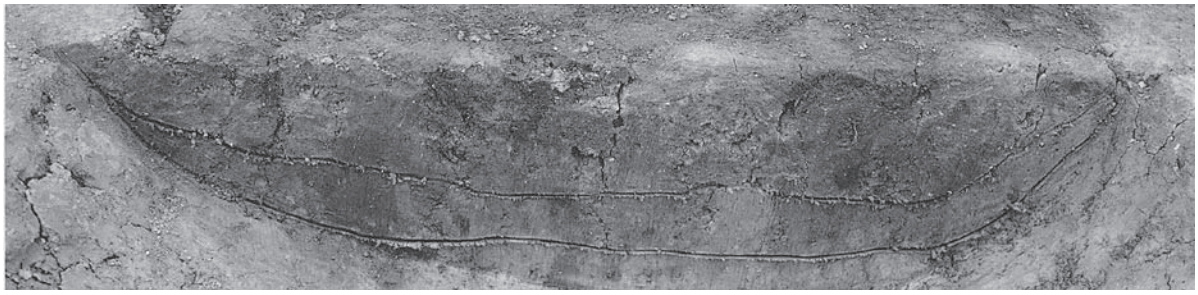


Fig. 51 溝 SD01・02 土層図（縮尺 1/40）

溝 SD01 土層



溝 SD02 土層

溝 SD01・02（南から）

土壙ＳＫ０１（西から）

土壙ＳＫ０１土層

第 10 章　有田遺跡第 93 次調査

1. 立地と概要

(1)　立　地

当該地は、旧小田部集落の北側の国道 202 号線沿いに在る。有田小田部台地の中央部で、北側に向かって八つ手状に分岐した舌状大地の付け根部分に相当するため西北に谷頭が存在する。標高は 10 mを測り、旧字名は「宮城」である。

この地域では、国道 202 号線を挟んでこれまで 8 カ所の発掘調査が行われている。

(2)　概　要

当該地の調査の経緯について説明すると、建築確認申請許可が下りる前に基礎工事が行われており、市民からの通報によって情報を得たため、開発関係者と急遽協議の上、工事を一時的にストップして発掘調査を実施することとなった。調査は、当然のごとく基礎部分を避けて調査区を設定したため遺跡の全容を確認することはできず、遺構の分状況を把握することを目的とした調査となった。

調査では、各調査区にグリッド名称を与えた。表土は耕作土で、遺構はローム層上面にて把握できる。今回の調査で発見した遺構は、溝状遺構 4、土壙 1 である。

2.　遺構・遺物説明

(1)　各遺構

溝状遺構（Fig.43）東西、南北方向の溝 4 条を検出したが、機能は不明である。

溝ＳＤ０１（Fig.43）グリッド 7 で検出した。南北方向の溝で、溝幅１２５ｃｍ、深さ２５ｃｍを測り、断面形は逆梯形を呈する。

溝ＳＤ０２（Fig.43）グリッド 6 にて検出した。南北方向の溝で、溝幅４５～７０ｃｍ、深さ約 16 ｃｍを測る。断面形はレンズ形である。

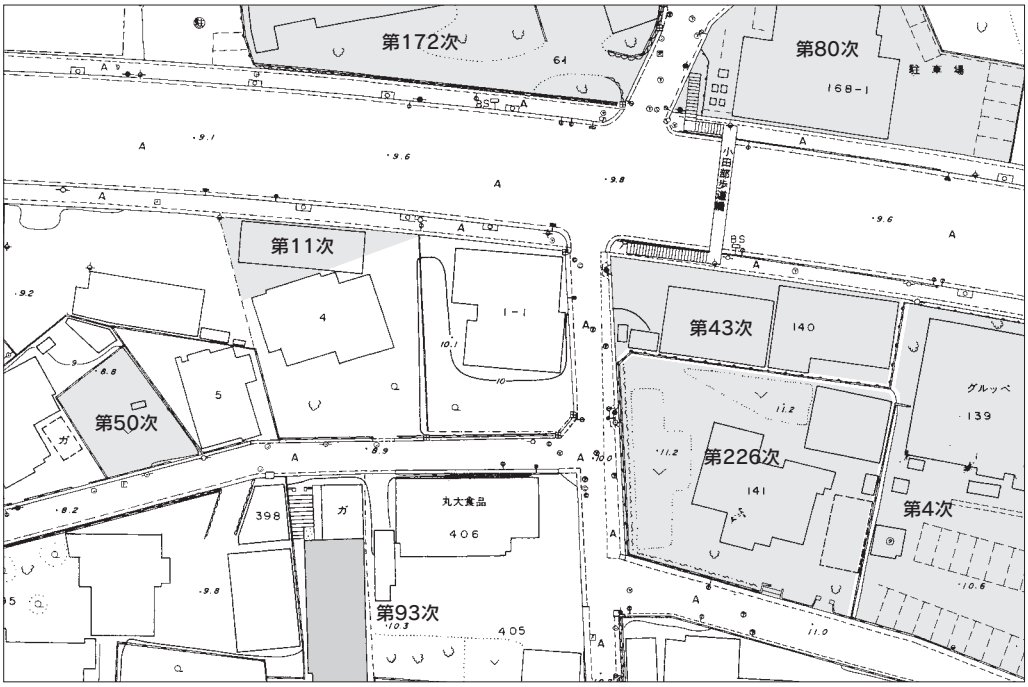


Fig. 52　第 93 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

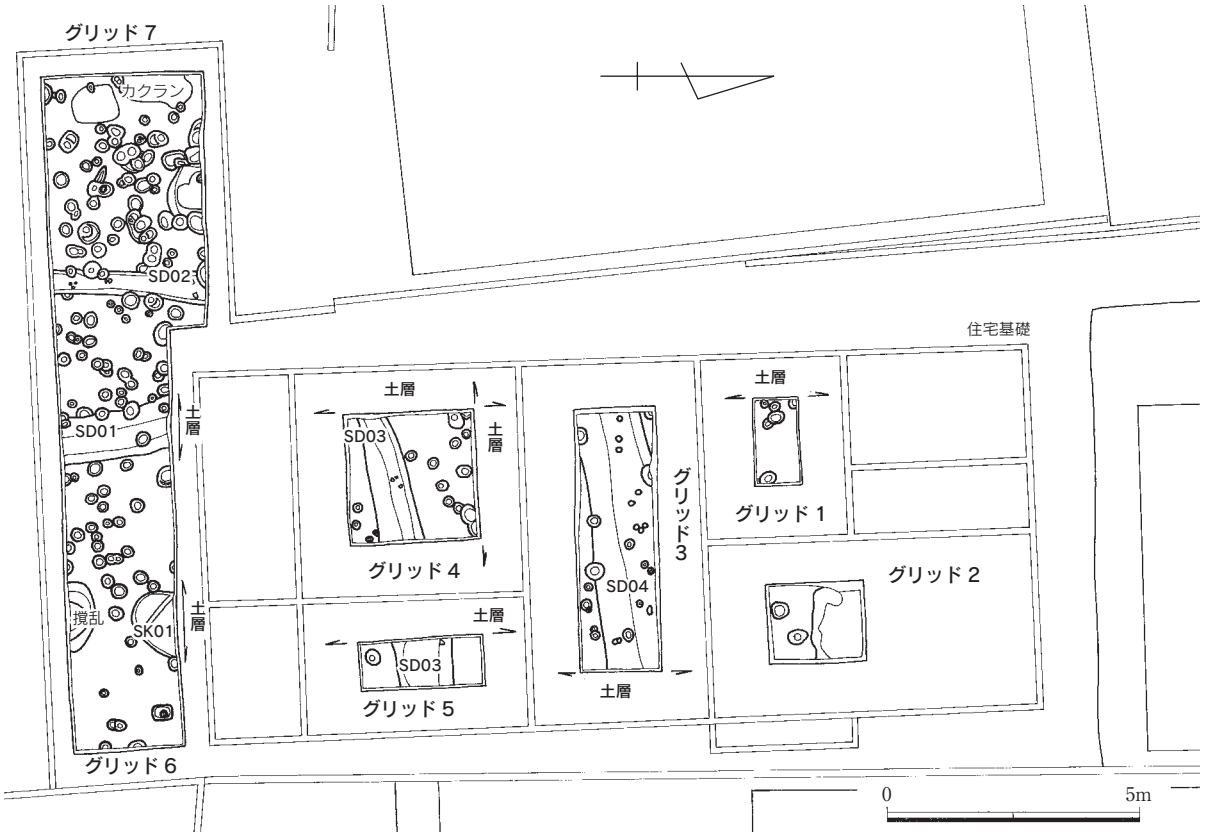


Fig. 53 第 93 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）

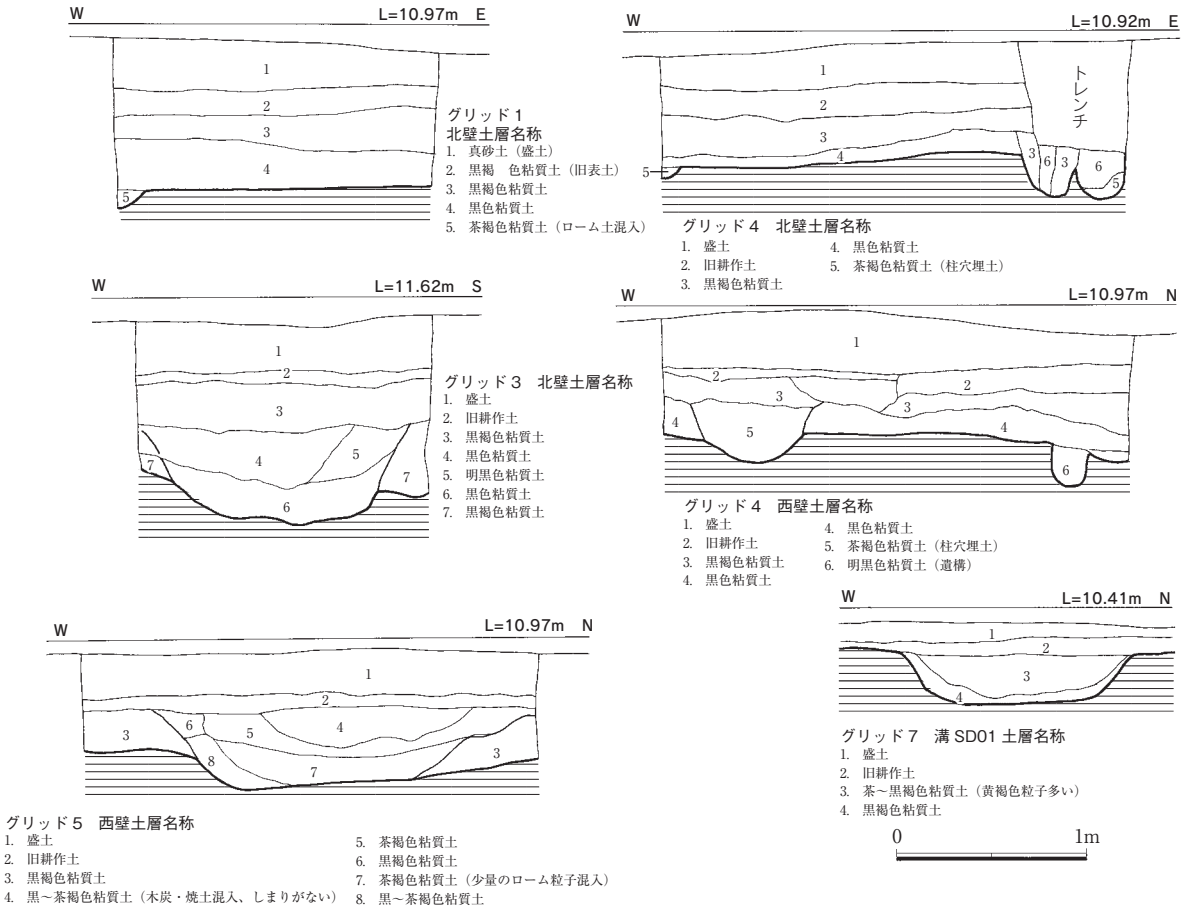


Fig. 54 各グリッド土層図（縮尺 1/40）

第 93 次調査全景（南から）

作業風景

グリッド 1（東から）

グリッド2（西から）

グリッド3（東から）

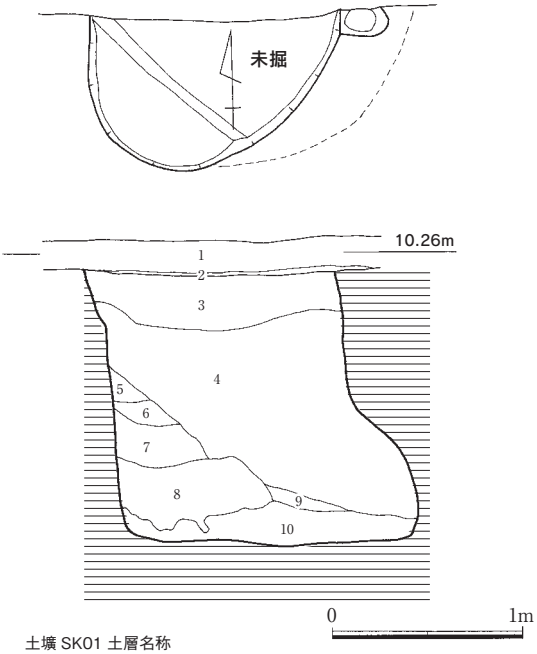
グリッド4（東から）

グリッド5（東から）

グリッド6・7（西から）

グリッド6（南から）

土壙SK01（東から）



土壙 SK01 土層名称

1. 盛土
2. 旧表土
3. 茶褐色粘質土（黄色ブロック混入）
4. 3と同じだが黄色ブロックが小さい
5. 黒褐色粘質土
6. 黄褐色ローム土
7. 茶褐色粘質土
8. 黒色粘質土
9. 黄褐色粘質土
10. 茶褐色～黄褐色を帯びた粘質土

Fig. 55 土壙 SK01 実測図（縮尺 1/40）

グリッド3SD04

溝 SD04

溝ＳＤ０３（Fig.53）グリッド４・５で検出した。溝幅は、グリッド４では約 66 ｃｍ、深さ 30 ｃｍ、グリッド５では、幅約 200 ｃｍ、深さ約 30 ｃｍを測り、西方向に溝幅を狭めている。断面形は舟底状を呈する。

溝ＳＤ０４（Fig.53）グリッド３にて検出した。溝幅約 150 ｃｍ、深さ 50 ｃｍを測り、断面形は逆梯形状を呈する。

土壙ＳＫ０１（Fig.55）グリッド７にて検出したが、北側境界地にあるため全形は不明である。平面形は楕円形を呈すると考えられる。断面形は箱状であるが、底面付近の壁面が袋状になっている。最大幅 110 ｃｍ、深さ約 145 ｃｍを測る。

(2) 出土遺物

全体的に遺物の出土量は少ないが、近世陶磁器を・瓦質土器を主体にして出土している。溝ＳＤ０２～０４からは、高取焼・伊万里焼などの近世陶磁器の他、焙烙・土師質土器・瓦質土器などが出土している。溝ＳＤ０１から出土した土師器皿・坏の小片は、中世の時期まで遡る可能性がある。土壙ＳＫ０１からは、中国玉縁白磁碗や陶器捏鉢・瓦質土器などが出土しており、中世前半期の時期が考えられる。

3. まとめ

当該地には住宅基礎が既に構築されており、調査は、基礎部分を避けてグリッド方式による限られた調査範囲を設定したため遺構全体の様子を窺い知ることができなかった。今回検出した主な遺構は溝であるが、これらは屋敷区画、排水機能を有したものと考えられ、遺物は主に高取焼の甕や鉢などが出土している。高取焼に関しては、第 84 次調査の他からも出土しているが、江戸時代に城下町福岡において高取焼の日用雑器を生産する窯は、西新の西皿山に寛保元年（1741）に開かれたことを始まりとしているから、これらの高取焼の供給もそれ以降とことである。ただし、高取焼を生活用品として利用することができるのは、百姓の中でも有力な名請人であったと考えられることからこの地域における農家屋敷の存在が考えられる。江戸時代は、百姓といわれる人々には、田畑を所有する名請人や、自立できずにその下で農業を営む名子、小作人などと区別されており、今回の遺構や高取焼の出土は、この地域においても屋敷地を構えることができる百姓が存在したことを示している。

当該地周辺は、旧小田部集落内に在り、調査件数も少なく、情報が不足しているのが実態である。

第 11 章　有田遺跡第 94 次調査

1.立地と概要

(1)　立　地

当該地は有田小田部台地の最北端の舌状台地上に位置する。南側を太閤道が接しており、街道を挟んで、南側に有田古墳群1号墳、2号墳(松浦殿塚)が存在する。標高は約7mを測り、台地の両側には狭長な開析谷が存在する。旧字名は「松尾原」である。

この地域では、これまで12カ所の発掘調査が行われているが、全体的に台地削平が著しい地域でもある。

(2)　概　要

当該地の表土は、盛り土で、約85cmを測る。遺構面は削平を受けており、遺存状態は悪い。

2. 遺構・遺物説明

(1)　各遺構

遺構は、ローム層上面で検出したが、攪乱、削平のため小ピットのみであった。これらが柱穴として建物を構成するものであるのかを検討したが把握することができなかった。

(2)　出土遺物

遺構の保存状態が悪いため出土遺物も少なかった。SP02より土師器が出土している。

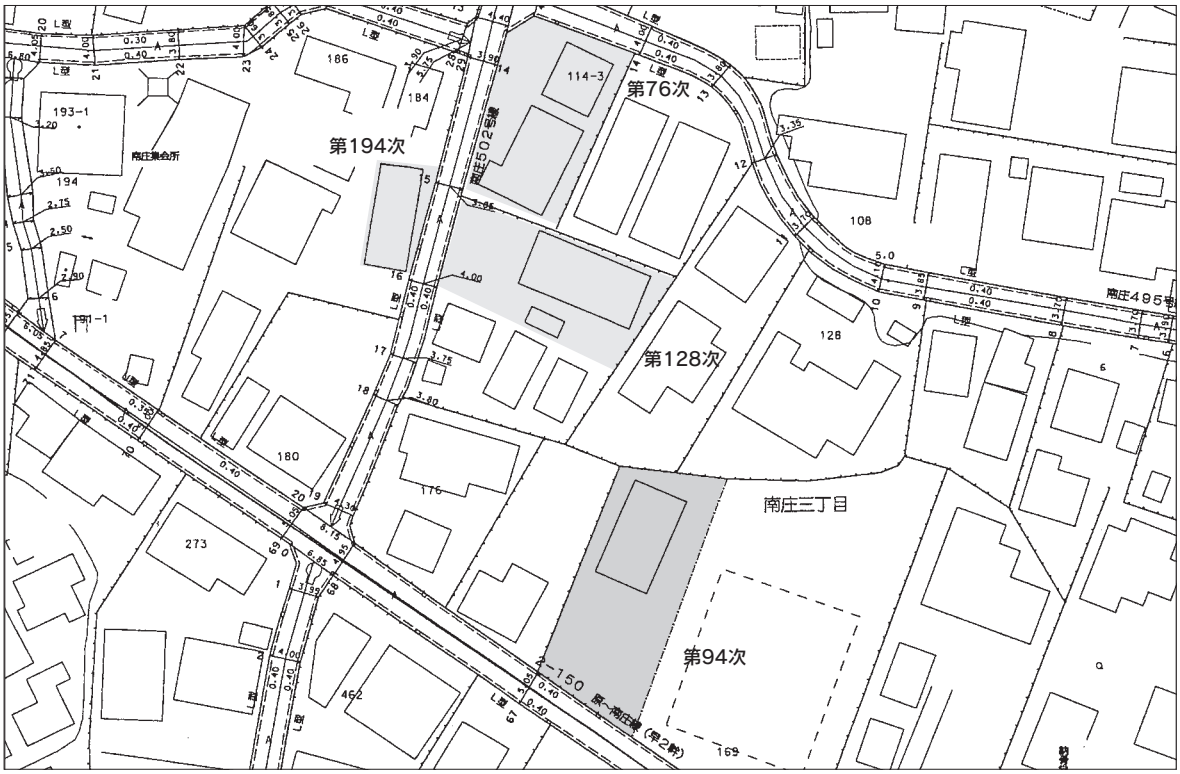


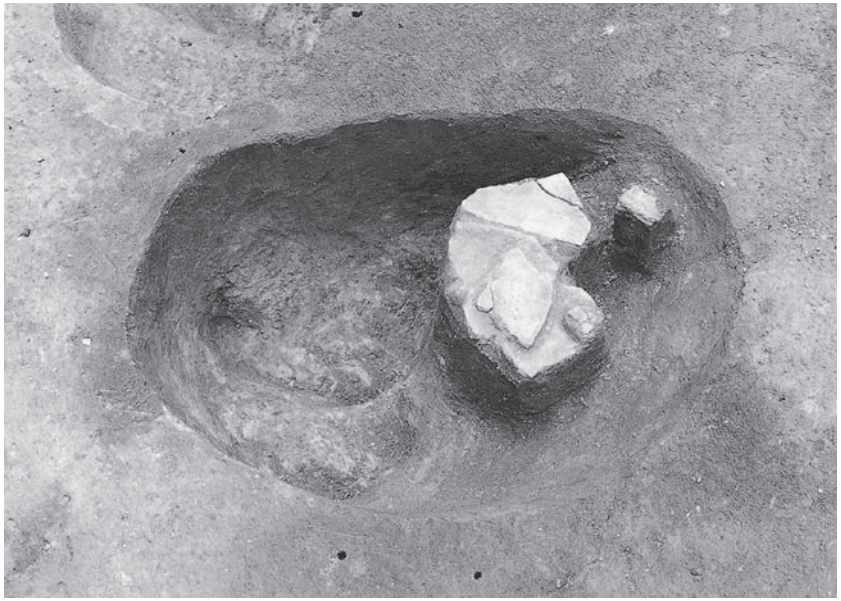
Fig. 56　第 94 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

3. まとめ

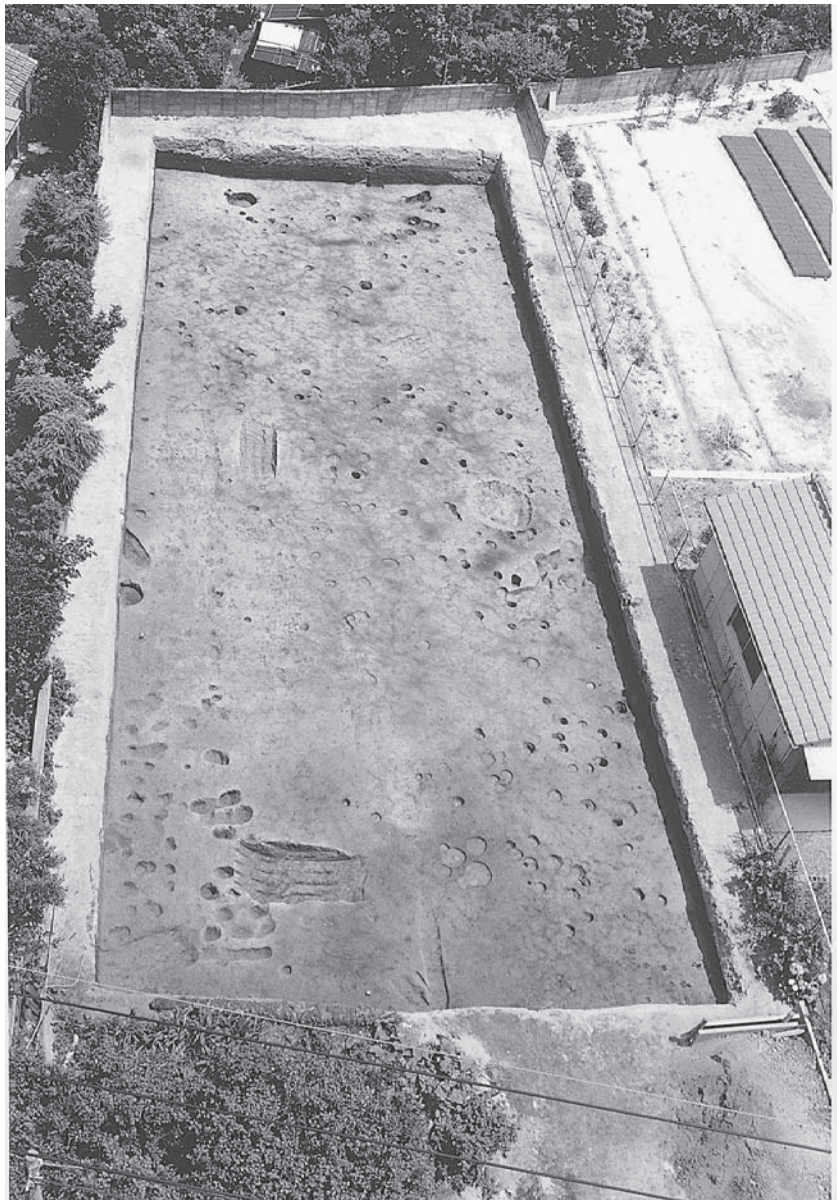
当該地は、遺構面の削平が著しく、周辺の発掘調査が進んでいないことからも今後の方向性を示すことはできない。ただし、当該地の南側に接する道路は、「太閤道」と称され、かっては肥前唐津を経由して呼子の名護屋城・陣屋に至る幹道であった。豊臣秀吉の朝鮮の役に際して整備されたと考えられるが、この街道がいつの時期に成立・整備されたのか不明である。また古代官道以後の中世街道の状況についても不明な点が多く、これまでに発掘された中世後半期の溝との関連も含めて今後の課題としたい。

Fig. 57 第 94 次調査遺構配置図（縮尺 1/150）

土壙ＳＫ０１



土壙ＳＰ０２



第84次調査全景（南から）

第 12 章　有田遺跡第 96 次調査（概報）

1. 地形と概要

(1)　立　地

当該地は、有田地区の最高所である有田一丁目から東に寄った地点に所在する。標高約 14m を測り、最も平坦な地形を維持している地域である。昭和 40 年代の区画整理によって東に向かって階段状の区画がなされ、字図によれば旧小字は「畑」である。当該地の東側では、第 7 次・第 66 次・第 88 次調査が行われており、少なくとも律令期に台地緩斜面が階段状に造成されていた事が推測されている。

(2)　概　要

当該地周辺では多くの発掘調査が行われており、区画整理の同一区画内では、第 6 次･第 9 次･第 28 次･第 66 次調査が行われている。これまでの調査では、弥生時代の環濠･袋状貯蔵穴･住居跡、古墳時代住居跡、律令時代の柵・掘立柱建物、中世後半期の溝などが検出されている。

遺構面は、削平を受けており、特に北側半分は深さ 70cm 程掘り下げられて段状をなしており、段下では八女粘土が表出する。

遺構は、これまでの周辺調査と関連する弥生時代の溝、中世後半期の井戸・溝・池状遺構・土壙などを検出した。

2. 遺構・遺物説明

遺構は、中世の土壙 11、弥生時代前期溝 1 条、中世後半期溝 1 条、同じく池状遺構 1、石組井戸 1、を検出した。遺物には、弥生時代前期～中期の土層、中世後半期の土層、瓦類、石塔石塔類が出土している。

3. まとめ

当該地における主な遺構として弥生時代前期の環濠の一部と中世後半期の溝及び井戸を検出した。弥生時代初頭と考えられる溝の一部は、南側に接した第 6 次調査においも発掘されており、その溝に接続

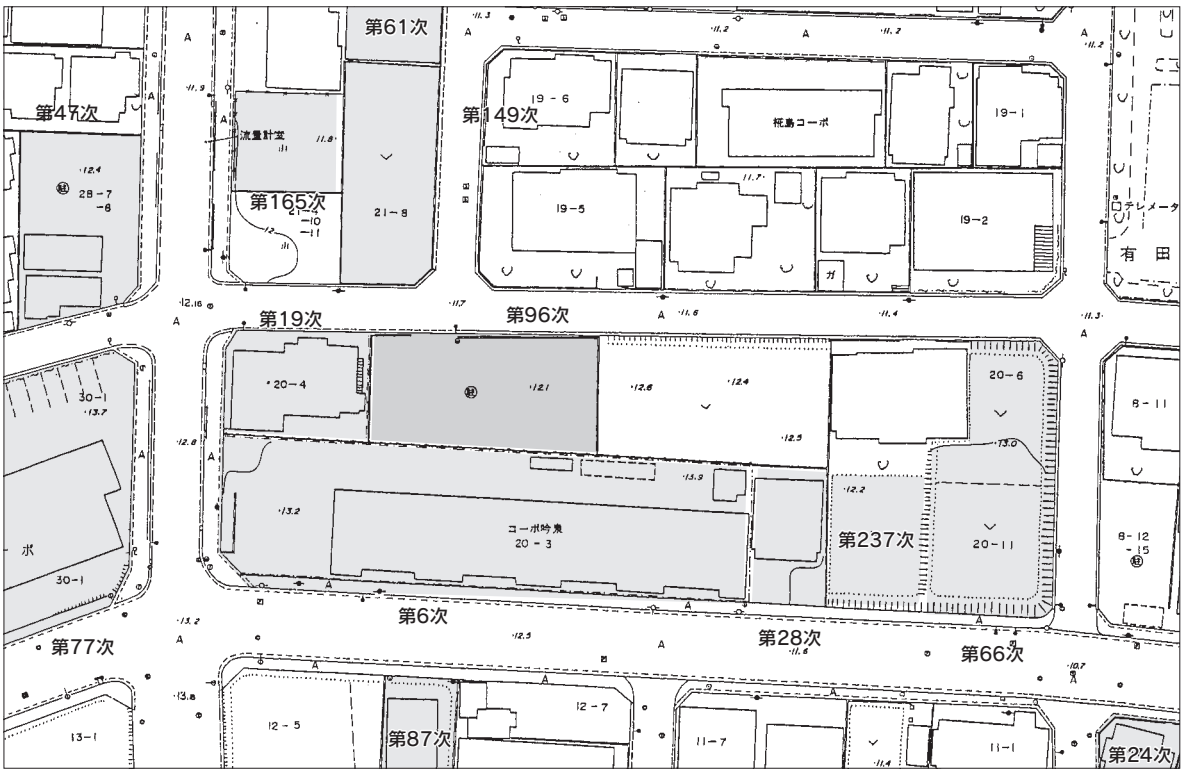


Fig. 58　第 96 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

するものである。西に隣接する第77次調査において検出した環濠SD04は、南北径300mを測る環濠の一部であると認識されているが、当該溝SD02は、この環濠に対しての切り合い関係が認められないことから直交する形で取りついているものと考えられる。深さは、第77次調査の溝SD04に比べて浅く、V字形を呈する断面も傾斜が緩い。有田遺跡の環濠については、初頭及び前期に比定される環濠が存在することが明らかになっているが、初頭に時期の環濠が、拡張部を有した構造で、単純な一重ではないとすれば、今後の弥生時代環濠研究に興味深い資料を提供しる事となる。

中世後半期と考えられる溝及び井戸などの遺構は、出土遺物からみて同時性が高く、従来から指摘されている曲輪の形成と機能について示唆するものである。遺構は井戸の他、池状の遺構や、溝の内側に構築された土塁又は柵などの構造物の存在を窺わせる柱穴の存在から軍事的機能と屋敷機能を兼ね備えた曲輪をイメージすることができる。

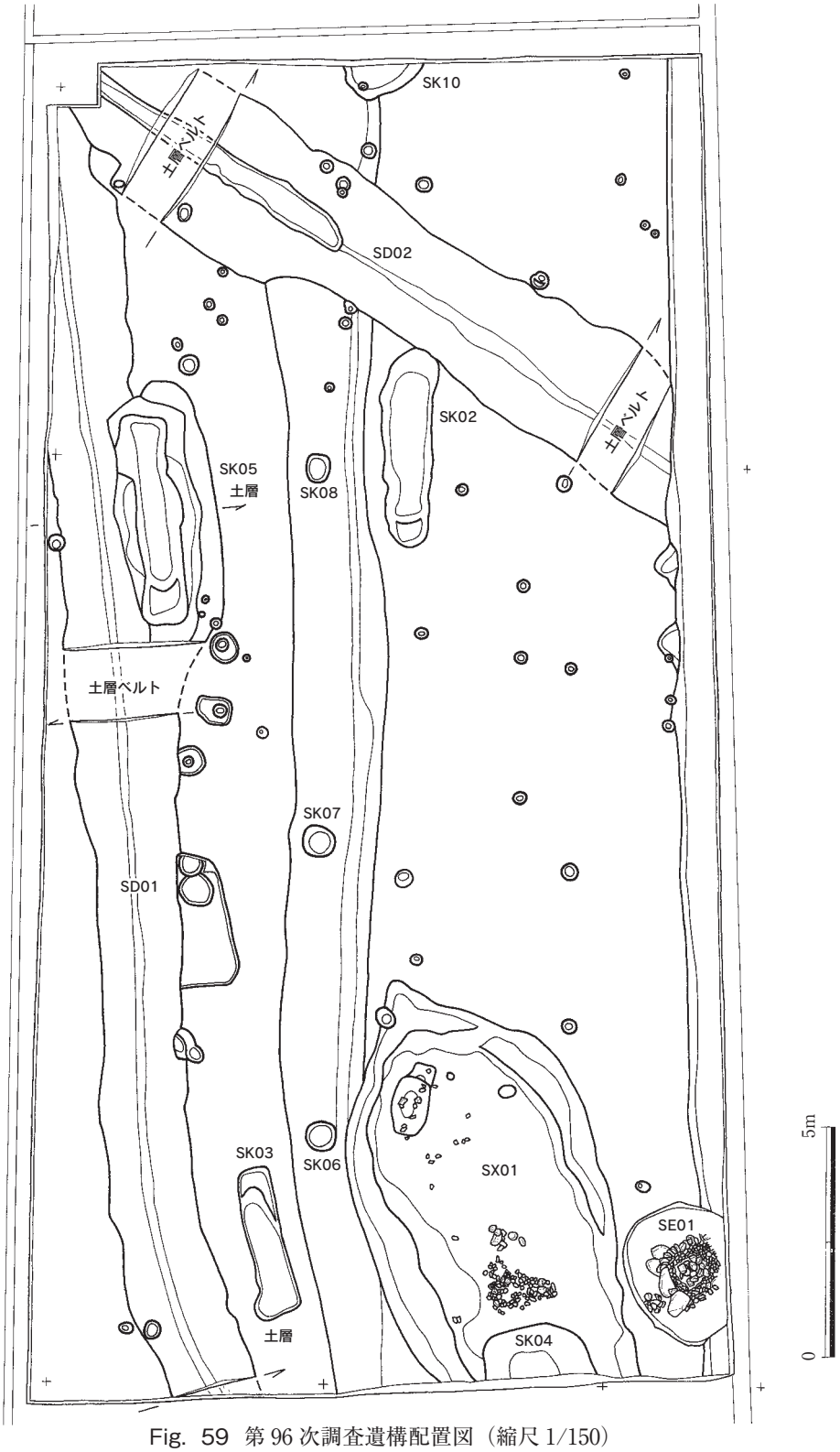


Fig. 59 第96次調査遺構配置図（縮尺1/150）

中核をなす曲輪の周辺に重臣たちの居住空間を形成したものであろうか？今後の調査が待たれる。

井戸SE01は、石組井戸であるが、石組み内には石塔類に五輪塔、宝篋印塔、板碑が用いられている。この内、五輪塔の地輪には、応永年間の年号が刻まれており、これまで律令時代以降の時期については遺構や遺物に乏しく、16世紀になるまでは空白の時期ではあったが、今回の記念銘がある五輪塔は、室町期における有田・小田部地域の歴史的な状況を知る手掛かりとなる。

第 96 次調査全景（東から）

溝ＳＤ０１・土壙ＳＫ０１（東から）

溝 SD02（北から）

井戸ＳＥ・ＳＥ０１（北から）

井戸ＳＥ０１断面（西から）

池状遺構ＳＸ０１（北から）

池状遺構ＳＸ０１遺物出土状況

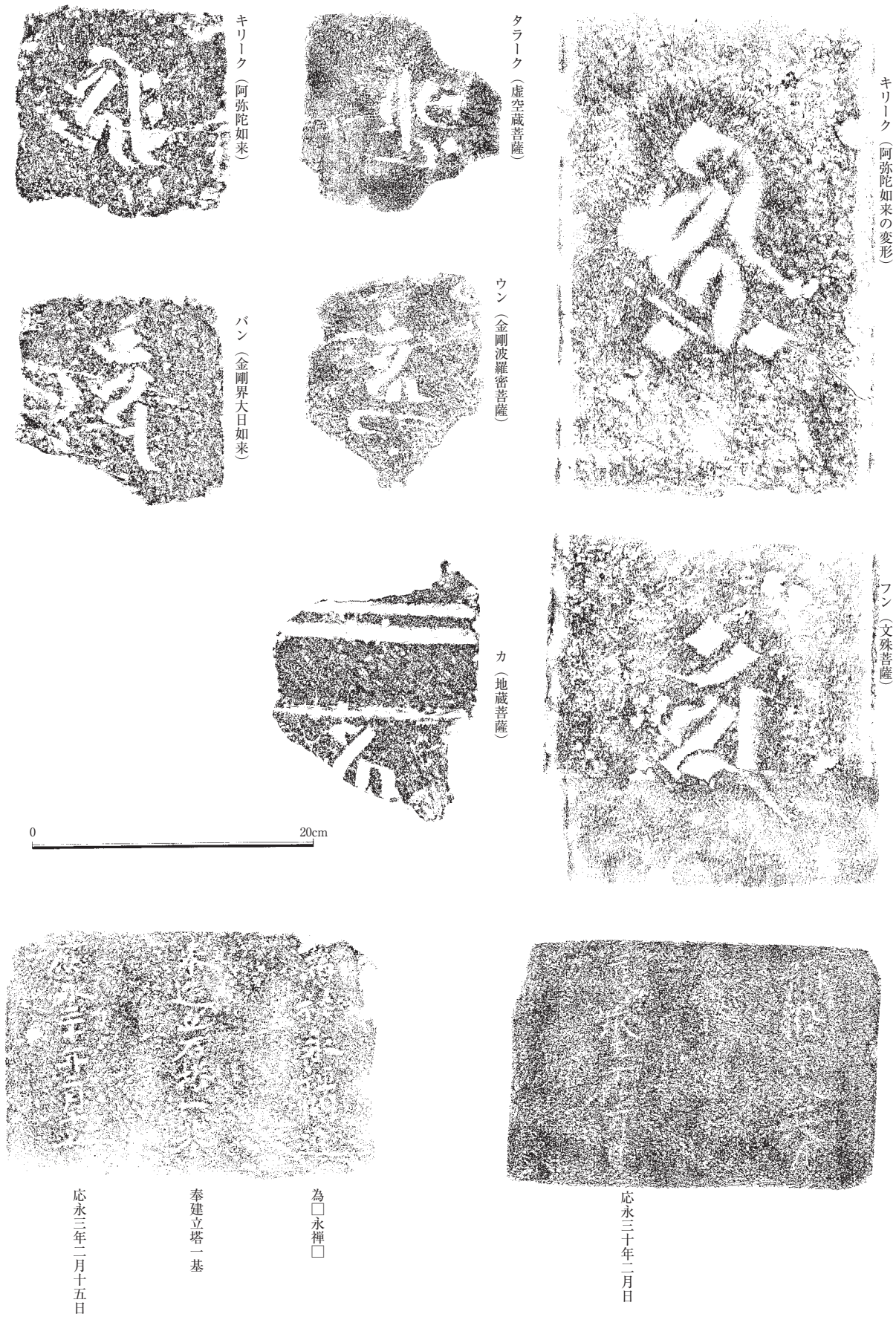


Fig. 60 第 96 次調査出土石塔類拓本（縮尺 1/4）

第 13 章　有田遺跡第 98 次調査

1. 立地と概要

(1)　立　地

当該地は有田小田部台地の北側の八つ手状に分岐した舌状台地群の中央台地上に立地する。標高は約９ｍを測り、旧字名は「五反田」である。現状は畑であった。この地域では、昭和４０年代初めに区画整理が行われているため全体的に台地削平が著しい地域でもある。

(2)　概　要

当該地周辺では、西側の道路を挟んで、第１１４次、第１５２次調査が実施されており、当該調査を補完している。当該地は、遺構面が区画整理により削平受けており、遺存状態は悪い。特に調査区の北側は全く遺構が存在しない。遺構面はローム層である。遺構は、列状に並ぶ柱穴および、土壙１を検出した。

2.　遺構・遺物説明

(1)　各遺構

列状柱穴ＳＡ０１（Fig.62）P1からP5の間の長さは約１７.４ｍを測る。P1～P2間、P2～P3間は４.５ｍ、P3～P4は２.５ｍ、P4～P5間は５.６ｍを測り、ほぼ均等な間隔で配置されている。西側に隣接する第１１４次調査では柵状遺構は検出されていないので、小規模なものと考えられる。柱穴径は２５～３５ｃｍである。

土壙ＳＫ０１（Fig.63）平面形不正は隅丸方形を呈し、断面形は逆梯形である。最大径３０ｃｍ、深さ１８ｃｍを測る。

(2)　出土遺物

遺物の出土が少なく、遺構の時期を把握することはできない。弥生時代の石鏃が１点出土している。

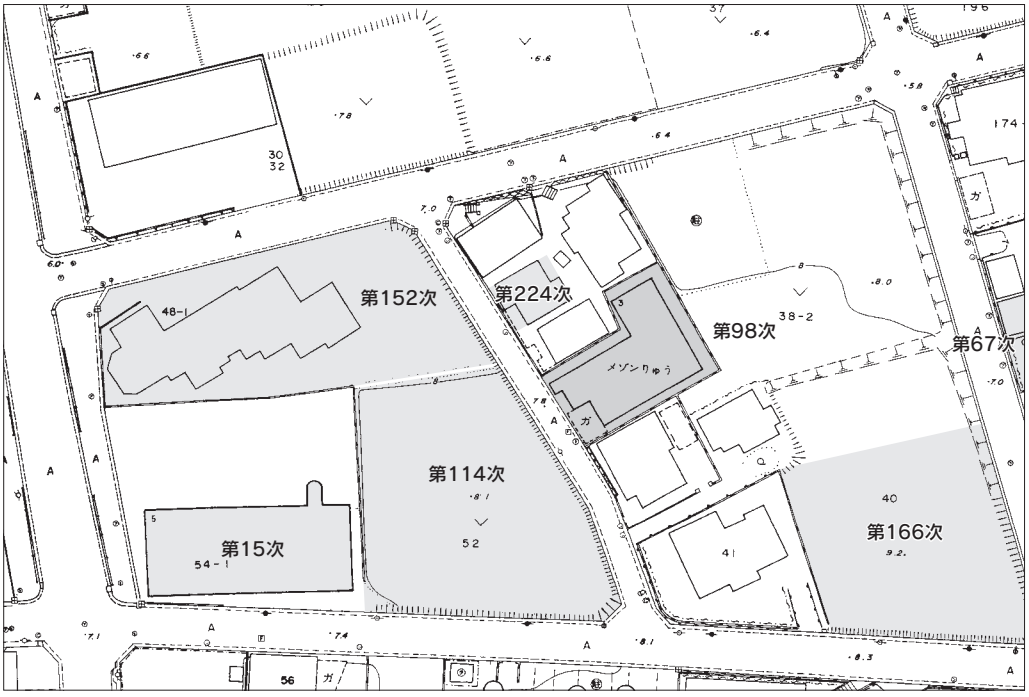


Fig. 61　第 98 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

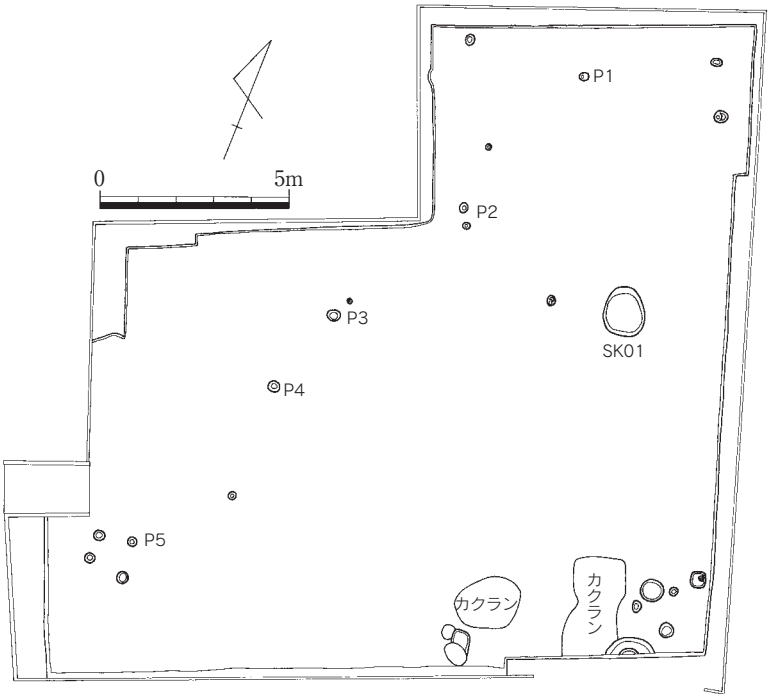


Fig. 62 第 98 次調査遺構配置図（縮尺 1/200）

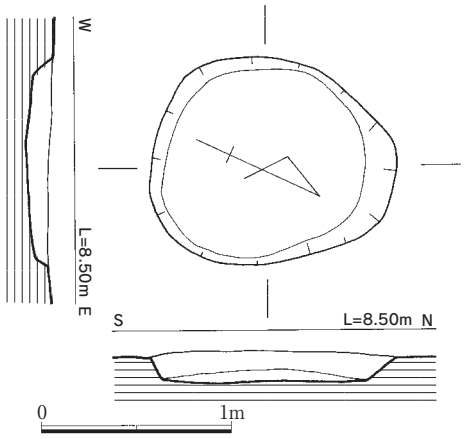


Fig. 63 土壙 SK01 実測図（縮尺 1/40）

3. まとめ

当該地周辺の調査では、古墳時代の竪穴住居跡の他、総柱建物の高床倉庫を伴った大壁造りと考えられる住居跡が多数検出されており、古墳時代において渡来系の遺物が多数発見された西新遺跡や、同じく大壁造りの建物群が存在した梅林遺跡との関連について興味がもたれる。

第 98 次調査全景（東から）

第 14 章　有田遺跡第 99 次調査

1. 立地と概要

(1)　立　地

当該地は有田小田部台地の北側の八つ手状に分岐した舌状台地群の基部に位置し、標高は約８ｍを測り、旧字名は「内竹」である。この地域では、昭和４０年代初めに区画整理が行われているため全体的に台地削平が著しい地域でもある。

(2)　概　要

当該地は、区画整理により遺構面が削平を受けており、遺存状態は悪い。特に調査区の北側は全く遺構が存在しない。遺構面はローム層である。遺構は、調査区南側に集中して存在し、かつ東西方向に分布していることからこの地域が緩やかな傾斜面を形成していたことが推測できる。

遺構は、ローム層上面で検出したが、南側においてピット群および溝状遺構を検出した。ピット群には、建物を構成する柱穴があり、3 棟の建物を把握することができなかった。

2. 遺構・遺物説明

(1)　各遺構

土壙 SK01（Fig.66）平面形は、隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈するが、南側壁面が二段になっている。長さ１７０cm、幅９８cm を測る。壙底の中央に直径 30cm、深さ１８cm を測るピットが存在する。覆土は、黒褐色粘質土を主体とする。縄文時代の落とし穴と考えられる。

掘立柱建物 SB01（Fig.66）溝 SD01 の北側に沿って存在する。梁行 1 間、桁行 3 間の建物である。梁間が狭く、狭長な建物構造になっている。梁桁１２２cm、桁行平均３３５cm、柱穴径は２０～２５

Fig. 64　第 99 次調査位置図（縮尺 1/1,000）

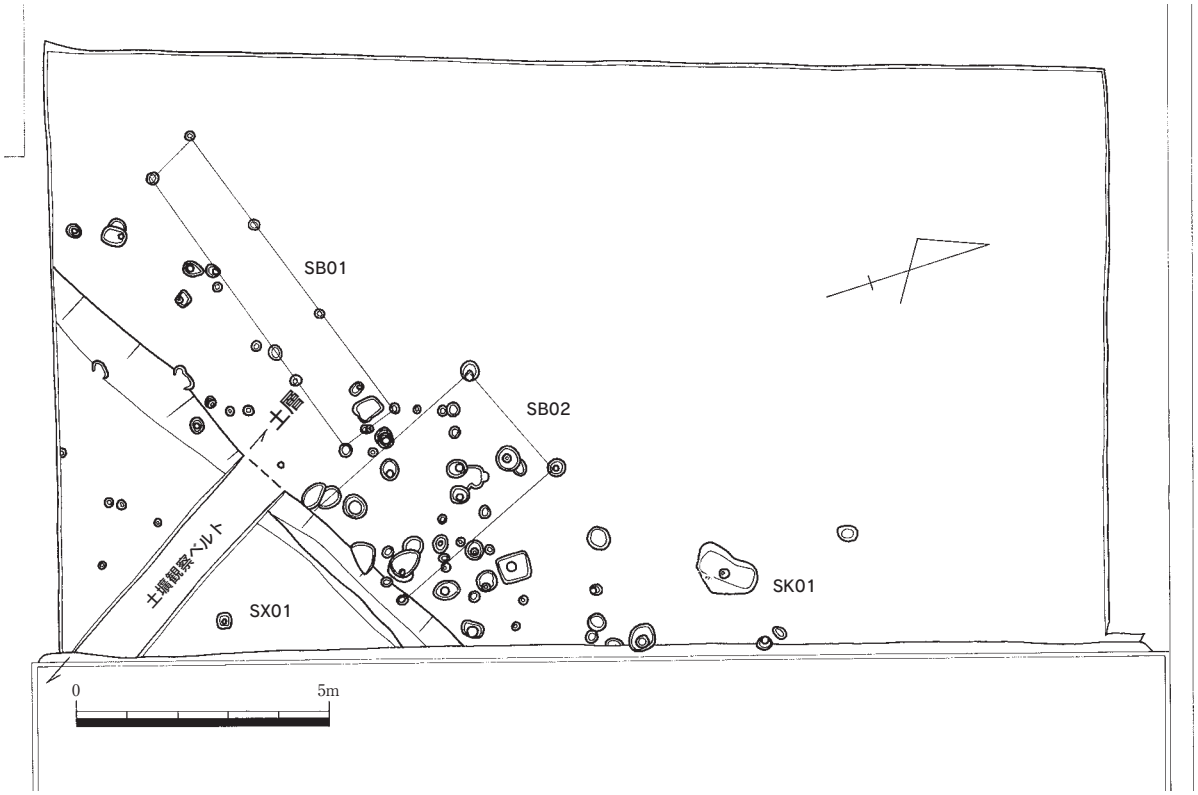
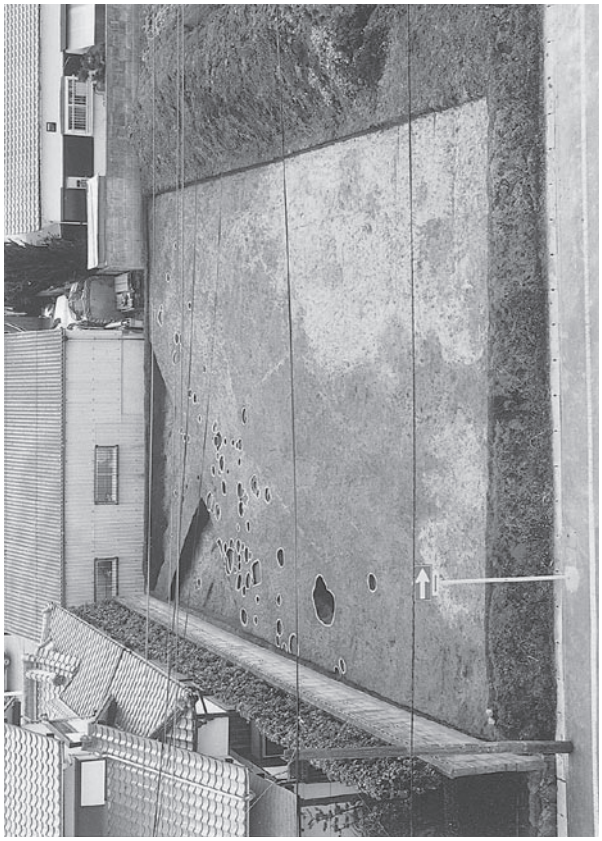
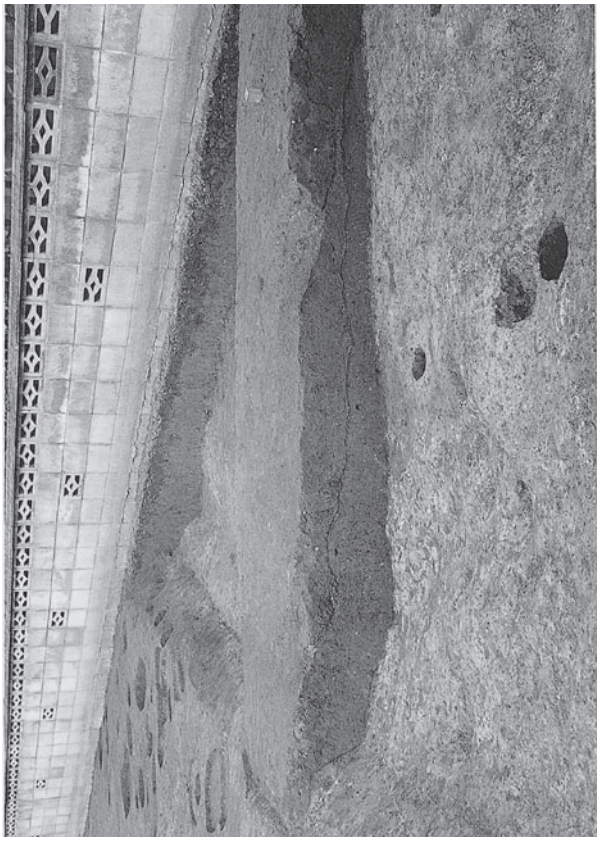


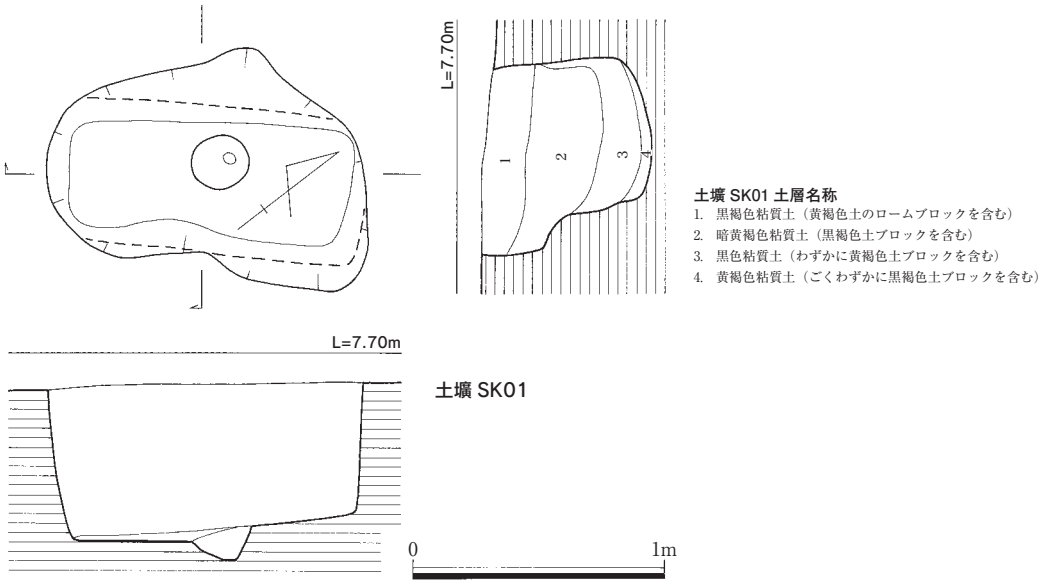
Fig. 65 第 99 次調査遺構配置図（縮尺 1/150 ）

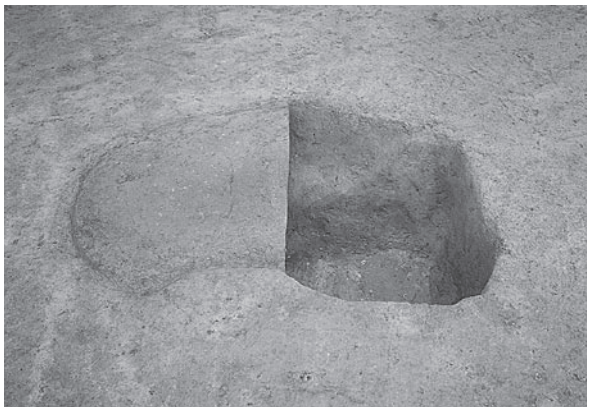


第99次調査全景（北から）



投落部（溝）土層（西から）





土壙 SK01（東から）

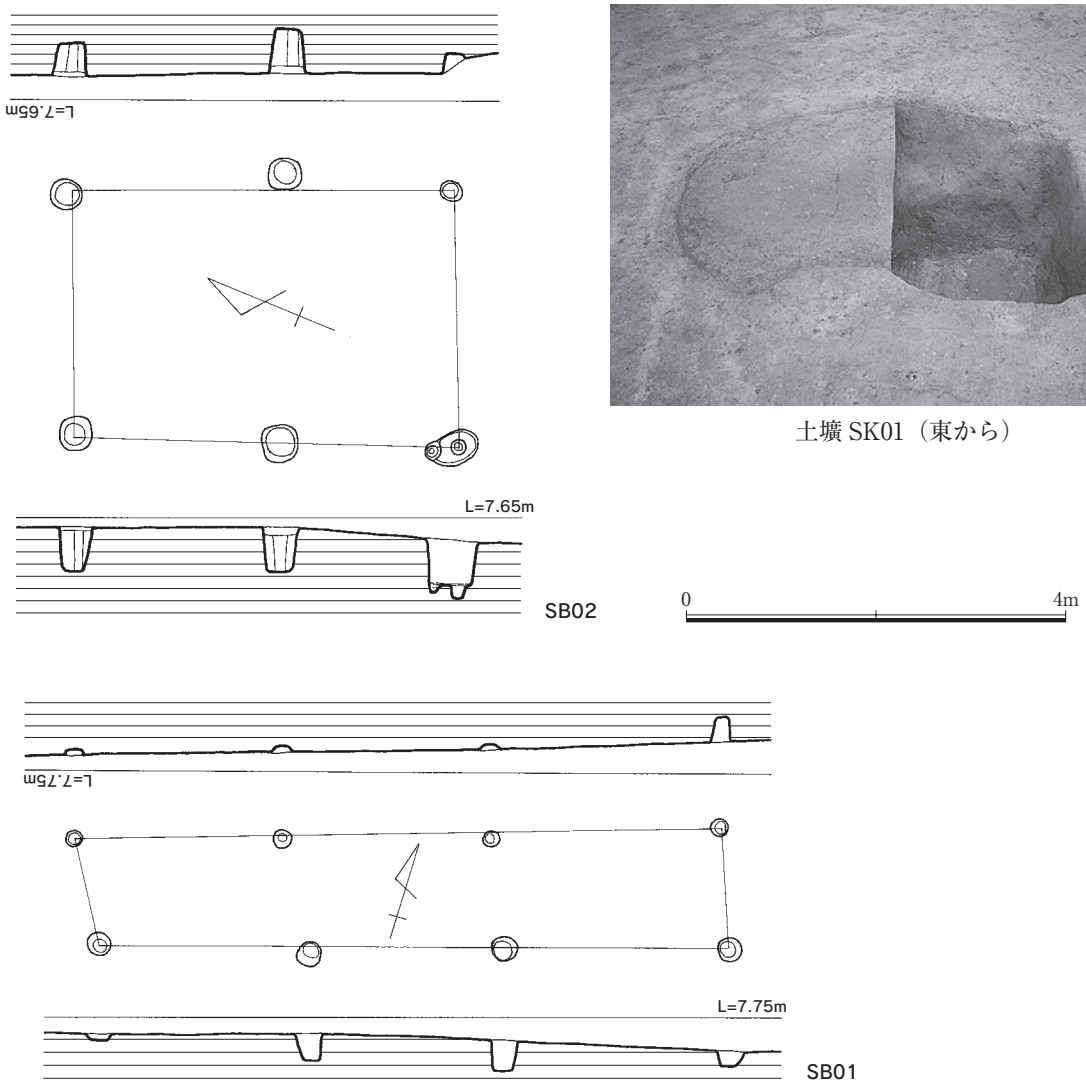


Fig. 66 土壙 SK01、掘立柱建物 SB01・02 実測図（縮尺 1/30、1/80）

cmである。

掘立柱建物SB02（Fig.66）主軸が南北方向の建物で、梁行１間、桁行２間の建物である。梁桁は２６５cm、桁行は４００cmを、柱穴径は２５～３５cmを測る。

溝状遺構SD01（Fig.65・67）当初は、谷状の段落ち部と考えていたが、調査区が大地中央に立地し、旧地形図を見ても谷などの傾斜面が確認できないことから遺構とした。また溝状遺構としたのは幅広く、且つ底面が平坦であることから確定を避けた。現状での最大幅約５．２m、深さ４５cmを測り、断面形は逆梯形と考えられるが、壁面は部分的に段状をなしている。覆土は、黒褐色粘質土を主体とする。

この溝状遺構は、東西方向に向いており、大地を切り込む狭隘な谷を繋ぐ様に存在するが、先述したように旧地形で見る限り道路等の構造物に相当するものはない。この遺構の方向は、太閤道と並行関係にあることから構築時期を中世後半期に考えることも可能である。

(2) 出土遺物

全体に出土遺物が少なく、遺構の時期を判断することができない。

3. まとめ

溝状遺構については、機能が不明であるが、大地を横断する形で設けられていることや、中世後半期の太閤道に平行すること、溝状遺構の底面が平坦であることなどから切り通し道と考えることもできる。

これまでの有田遺跡の調査では、道路遺構として明確に捉えられた遺構はなく検討を要するが、事例として上げるならば、小田部地域の舌状大地の調査の中で、第175次調査において検出した溝SD003がある。この溝は、舌状大地の中央を南北方向に設けられており、屋敷区画溝又は、道路遺構と考えられる。溝幅5.5～8.5m、最大の深さ70cmを測り、断面形は逆梯形を呈している。土層断面図を観察すると掘り直しの溝SD016が下層の溝の埋没土を切り込んでいることから、大きく上下の二期に分けることができ、溝が2期に亘って使用されている。

当該調査の溝状遺構SD01も第175次調査の溝SD003の上位溝の形状や溝幅が近似しており、大地を区画する溝として考えるよりも溝底が幅広く、平坦であることから道路遺構と考えることができる。

小田部地域には文禄・慶長の役に際して整備された太閤道が台地を斜めに横切る形で、東西方向に走っており、屋敷区画などが単に台地地形に制約を受けているだけではなく、太閤道に取り付く道路も存在した可能性がある。

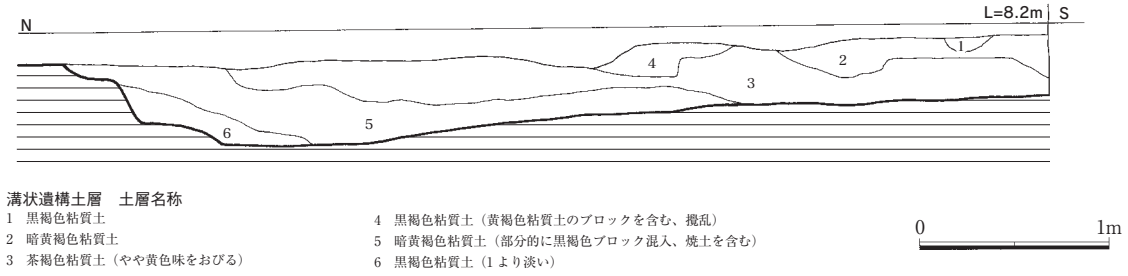


Fig. 67 溝状遺構土層図（縮尺1/40）

有田遺跡調査事務所（昭和 54 年度～昭和 60 年度）

有田・小田部 ５２

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第 1177 集

２０１３年（平成２５年）３月２２日

編集・発行　福岡市教育委員会

〒 810-0001

福岡市中央区天神一丁目８－１

電話 (092)711-4667

印　　刷　國﨑美峰堂

〒 812-0053

福岡市東区箱崎一丁目 20-5

電話 (092)641-8822